

[共同研究：大学教育における和泉市の地域資源の掘り起こし・保存・活用の研究]

日本仏教揺籃の地としての南大阪（一） 仏並（ぶつなみ）

梅 山 秀 幸

【はじめに】

そのお屋敷の表札に私の目はくぎ付けになった。夢を見ているのではないかとさえ思った。その体験がこの論考の発端となる。

随筆めいた書き出しになるのをお許しいただきたい。

冬のある日、自由になる一日があって、朝起きて、槇尾山施福寺に参ろうと思い立った。特に西国三十三か所詣でを目指したことはないものの、数十年も関西に住みつけば、すでに二十数か所の観音霊場はまわっているはずである。満願成就などと意図しないうちに、いつか三十三か所すべてを参りつくす日が来るかもしれないし、すべてを廻り尽くせば、巡礼を行ったいにしえ人の心のありようのいくばくかは追体験できるかもしれない。また讃岐から都に出て大学の学生として学んだ空海は十八歳で儒・道・仏の正確な理解に立って『三教指帰』を書いた後、石淵の勸操に導かれてこの槇尾山の施福寺で髪を下ろして得度したという。中国に渡って密教の龐大な経巻と教えそのものを携えて帰国した後も、大宰府に足止めをくらった上、近畿にもどっても都にはなかなか上らず、太政官符が和泉国司宛てに下って上京が強制されるまで、空海は施福寺に滞留したと考えられている。一躍雄飛して八面六臂の活躍をするようになる以前の空海はこの山中に雌伏しながら何を考えていたのだろうか。

そうした歴史的にも重要なお寺が勤務している大学のある和泉市内にあるのに、なかなか足を延ばす機会がないままである。和泉中央駅からバスがあることはわかっていたから、半日くらいの時間つぶしにはなるだろうと思って出かけたのだった。ところが、バスの終点の「槇尾山入口」から、思いのほかに歩かされることになる。数キロを東槇尾川に沿って歩き、土産物店のあるふもとまで着いて、やっとのことでたどり着いたと思うと、そこで終わるわけではなかった。そこからさらに険しい山に登らなければならない。冬の平日で参拝客は少なかったものの、マイカーで来ていた人たちがいて、「那智も古道を歩けばたいへんやけど、上まで車で行けるしな」とか、「上醍醐とどちらがしんどいやろ」とか、話をしながら登って行く。空海の髪堂などを確認しながら、やっとのことで山頂に至って、観音さまにお参り

をして、膝が笑うような状態で下山したものの、そこからまた歩いて来たバス停留所までの道を引き返さなければならないのだった。もちろん、巡礼という宗教行為がその行程の苦難にこそ本質的な意味合いがあるとすれば、このくらいの歩行で音を上げていては埒もないのだが。

「横尾山入口」のバス停で、帰りのバスを待ったものの、なかなかやって来ない。和泉から父鬼に抜け、さらには和歌山に至ることもできる街道筋であり、父鬼川の兩岸には向かい合うようにして城塞ともいえそうな立派な石垣を積んだお屋敷もある。古い家々の並ぶ「仏並」の集落に「横尾山入口」のバス停はあった。そして、バスを待っているあいだ、ぼんやりと集落の中を歩いていると、そこの一軒のお屋敷の表札に「池辺」とあったのである。さらに、あたりには数軒の同姓の家がある。こんなことがありうるのだろうか。バス停の前には小高い山があって、そこにあるのが「仏並寺」であるらしい。なんということであろう。書物の上だけで理解しているつもりになっていた1500年も前の日本仏教史の最初の重大事件がこの小さな集落にそのまま冷凍されたかのように保存されていたのである。今はひっそりと目立たないこの小さな「仏並寺」は日本で最も古い由緒をもつ寺の一つであり、その下に住まう池辺氏も日本の仏教受容史の上で大きな役割を担った人物の名前だったはずである。その末裔の方がたが歴史の舞台であったその場所に十数世紀を経て今なお住み続けていらっしやる。

それこそ仏教は世の無常をいい、不変のものは何もないかのようであり、日本の社会は歴史上の激しい転変を幾度も経験したかのように見える。しかし、その実、極東の島国である日本は容赦ない外敵の侵入もなかったせいか、数十代にもわたって一つの家の存続を許す持続性があるようなのである。十年一日の如しというけれど、千年一日の如しといっても、まだ言い足りない。それを実際に目のあたりにしていることになる。

【第一章】 さらに遡る過去

和歌山と大阪を隔てる和泉山脈にはそれほど高山はなく、和泉地方では大阪湾に向かってなだらかな傾斜がつづくものの、前山がいくつかあって、それを縫って流れる小さな河川をさかのぼっていくとき、まるで奥深い山間に分け入っていくかのような錯覚に陥ってしまう。横尾川に沿って池田谷を遡り、「納花」という仏のうけに花を手向けるおくゆかしい行為をそのまま土地の名にした集落を過ぎ、和泉国分寺のあった国分峠を経て横山谷に入っていくと、横尾川が父鬼川と東横尾川の二つの支流に分かれるところに仏並はある。

しかし、このあたりには、仏並という名前がつくはるか以前からすでに人びとの営みがあったようなのである。地域社会の持続性は実は1500年どころの話ではなく、その数倍の年月を考えていいのかもしれない。

『和泉市の歴史1 横山と横尾山の歴史』によれば、関西新空港建設にともなって、大阪府南部の道路の整備が行われ、外環状線がこの横山谷を通ることになって、その建設に先だっ

て調査が行われた。事前調査の段階では、この地域は弥生時代から古代・中世にかけての遺物の散布地くらいにしか考えられていなかったそうなのだが、1985年、大阪府埋蔵文化財協会が本格的な調査を開始すると、地下50センチほどのところから縄文土器が見つかり、さらに調査の進行にともない、竪穴住居や土坑も調査範囲のいたるところで見つかったという。一般的に縄文文化は中部山岳地帯から関東、東北に豊かな遺跡を残しているとされるが、この仏並では近畿地方では非常に珍しい縄文時代の遺跡の姿が明らかになったことになる。発見された土器は今から8000年前の縄文時代早期のものから、4000年以前の縄文後期までのものまであり、長いあいだ続いたかなり大きな集落がこの地にはあったことが判明した。さらには、近畿地方では初めてという土面も発見されたという。



仏並土面(大阪府文化財センター提供)

さらに、1993年には旧国道170号線と外環状線の交わるところにガソリンスタンドが建設されることになって、和泉市教育委員会が発掘調査したところ、ここでも縄文時代中期から後期の遺構や遺物が発見された。常識的な理解になるが、縄文時代の人びとにとっては平野部よりも山間部の方が生活環境として適していたのであろう。和泉市には槇尾川下流の平野部に池上曾根遺跡があって弥生博物館があるのだが、槇尾川上流の山間には仏並遺跡があり、縄文博物館があってしかるべきだといっているほどの貴重な遺跡だといえそうである。土器については、関東地方系の土器も見つかって、当時の広範な交流のあり方も明らかになり、その後、縄文時代後期の土面がさらに二面発掘された。土面は宗教祭祀に際してシャーマンが用いたものと考えられる。弥生時代の人びとの営みは平野部で主として展開され、そこでは農耕を主眼にした宗教祭祀に移行するのかも知れない。池上曾根の弥生博物館で入場者に弥生時代の宗教のありようを印象づけるのが鳥形だとすれば、この山間部に伝えられたはずの縄文時代の宗教のありようはこの仮面（ペルソナ）に集約されるように思われる。それはまた、中沢新一流のアースダイバー的思考が許されるならば、仏並を含む横山谷における



(国土地理院 1/20万地図により著者が作図
紙面の都合によりさらに縮小してある)

仏の受容，正確にいえば，仏像（アイドル）崇拝にもつながる古層の文化であるような印象を受ける。

【第二章】 仏並という土地と池辺氏

さて，仏並という地名について，『日本歴史地名大系28 大阪府の地名2』（平凡社）は次のように記す。

ぶつなみ
仏並村 ㊦和泉市仏並町

国分村の南にあり，父鬼川ちちおにが流れる。小村に大畠おぼたけ（畑）村・小川村おがわがある。地名は，当地池辺氏の祖先池辺直氷田が蘇我馬子から授けられた二体の仏像を私宅の仏殿に安置したことから起こったという（大阪府全志）。慶長十年（1605）の和泉国絵図には，当村所在地辺りに「仏阿弥陀村」村が二村描かれている。仏並は仏阿弥陀の転訛であろう。（中略）当地の男乃宇土神社は式内社，寺院は高野山真言宗仏並寺・福德寺がある。仏並寺は池辺直氷田が営んだ仏殿が起源と伝える（大阪府全志）。

また『日本地名大辞典 大阪府』（角川書店）には次のように記されている。

ぶつなみ 仏並<和泉市>

横尾山の北西，父鬼川流域に位置する。地名は，池辺直氷田が蘇我馬子から授けられた仏

像二体を私仏殿に安置したことにちなむという（全志5）。地内の佐々木台は、鎌倉期の横山荘の地頭であった佐々木高綱の屋敷跡と伝える。「延喜式」神名帳に見える「男乃宇刀神社」2座のうち1つがある。（中略）神社は男乃宇刀神社があり、上の宮とも称されている。寺院は、男乃宇刀神社の別当寺で佐々木氏の菩提寺であったという常願寺のほか、真言宗仏並寺・福德寺がある。仏並寺は泉州三十三か所2番札所でもある。（後略）

こちらではもう一つ興味を引く記述がある。佐々木高綱がこの地の地頭であったという。実際に確認できるのは、高綱の甥の信綱が横山郷の地頭職であったことだが（『和泉市史第一巻』）、高綱といえば、『平家物語』の宇治川の先陣争いのヒーローであり、また信綱も同じように後の承久の変において宇治川で戦功を揚げている。それによる混同なのかもしれないが、高綱の方はまた『鎌倉三代記』や『近江源氏先陣館』といった大衆演劇のヒーローでもある。江戸時代の人形浄瑠璃や歌舞伎では徳川家康に敵対した真田幸村を実名のまま取り上げることができず、近松半二は時代を過去に遡らせるという常套手段をとって佐々木高綱のこととして真田幸村を描いたに過ぎないとしても、佐々木高綱という颯爽たる武士の時代のヒーローも、しかし別の立場から見れば相貌を変え、侵犯者としての側面をもつはずである。ここでは立ち入らないが、高綱であれ、信綱であれ、鎌倉から横山郷の地頭職に任じられた佐々木氏は既存の寺社勢力である横尾山施福寺とは大きな摩擦を起こしたはずであり、ここ横山谷でもけっして歓迎された人物ではなかったと思われる。その菩提寺であったという常願寺は廃仏毀釈のために残らない。男乃宇土神社は仏並寺のすぐ近くにある。ヲノウトという、ヲは尾根を意味し、ウト、ウトー、あるいはウツは狭い谷、低くて小さい谷、袋状の谷、せまい峠道などを指す（鏡味完二・鏡味明克『地名の語源』角川 1977）。地形的にこの語源解釈でいいと思われる。この神社は『延喜式』にも記された古社であり、神武天皇の兄のイツセノミコトを祭るというが、この山間の聖地であり続け、人びとの魂の拠り所であったといえよう。また縄文時代の土面を使った祭祀ともかかわる場所であったといって、必ずしも的外れではないように思われる。それが仏並寺とは境界を接してある、あるいは同じ場所にある。

さて、これら二つの地名辞書の記述は『大阪府全志』の記述をもとにしていることになるが、その『大阪府全志』の記事というのは次のようなものである。

（仏並寺）

仏並寺は字上の垣外にあり、天王山と号し、真言宗高野派蓮上院末にして阿弥陀仏を本尊とす。本尊仏像は優秀の彫刻なり。縁起に依れば、欽明天皇十三年百濟国より仏法伝わり、蘇我氏敬信し、蘇我馬子は仏像二軀及び尼三人を池辺直氷田に授けしかば、氷田は受けて私宅の辺に営みし仏殿に其の二仏を安置し、其の子徳那更に弥勒観自在を安置したるもの即ち当寺の起源にして、村名も是れより起れりといふ。池辺直氷田は本地池辺氏の祖

なり。境内は二百七十六坪を有し、本尊兼庫裏・鍾樓を存す。

この『大阪府全史』で「縁起に依れば」という「縁起」は書物を指すのだろうか、この地での云い伝えといった程度のことをいうのだろうか。ここには「徳那」という氷田の息子が出て来て、また弥勒菩薩と観音菩薩の二仏が並べて奉安されたので仏並寺というのだということにしてある。平凡社の『歴史地名大系』では「仏並」は「仏阿弥陀」の転訛であるとしていた。仏並寺でいただいた『和泉西国 観音霊場巡拝案内』というパンフレットでは次のように紹介されている。『大阪府全志』と同じ記述があり、仏並寺に伝わる伝承がある。

欽明天皇の御代に百済の国から仏法が伝わり、蘇我氏がいたく敬信したことは史上よく知られているが、飛鳥時代（600年前後）和泉郷横山村の人で池辺の直氷田（ヒダ）という人が、推古天皇のおじにあたる蘇我の馬子から仏像二体を授けられ、したがう尼三人とともに家の近くに仏殿を作って奉安した。その子「徳那」もさらに弥勒菩薩観世菩薩の両尊を並べて奉安した。仏を並べて安置し奉安した所より寺名が出来、その頃建立されたのが、仏並寺だと伝えられる。近郷の人篤く敬信したる所より、地名もこれより初まったと伝わる。

日本霊異記によれば、泉州海岸高師の浜に楠の大木が流れ着き、それに刻した仏像が安置されたと伝えられるが、当時もその後の歳月に幾度かの興亡を繰り返したのであろう。その詳細はようとしてわからない。

「字上の垣外」にあったとか、現在も「池辺」氏の姓が伝わり、その子孫が存する。学僧・覚超僧都も池辺家の先祖である。古刹であるだけに仏並にまつわる話はかすみがちである。

「字上の垣外」というのは現在地のことであろう。ここでも、氷田の息子に徳那がいて、その徳那が弥勒菩薩と観音菩薩を並べて奉安したのだとする。やはり仏並寺に伝わる伝承があつて、それをもとに『大阪府全志』は記述したかと思われる。ただこのパンフレットも伝承の紹介においてはなほだ遠慮がちであり、「古刹であるだけに仏並にまつわる話はかすみがちである」と控えめに記述されている。

実は、現在の歴史学は仏並が仏教受容史の上で大きな意義をもった土地であることを黙殺する。『日本書紀』や『日本霊異記』に登場する池辺直氷田の末裔である池辺氏が今なおその場に住まわれているという事実と正面から向き合うことができないのである。たとえば、地元の『和泉市史 第一巻』（1965刊）からが、それこそ優れた仏教史学者であった赤松俊秀氏の監修の下、その門下の三浦圭一氏が市史編纂室に常勤となって完成されたものだというのだが、その詳細な史料篇において他の和泉にかかわる史料については網羅し、池辺家に所蔵されていた「修善講式」も収録しているにもかかわらず、古代の池辺氏から現代の池辺



弘法大師御髪堂

氏への連続性については「可能性がないわけではなく」という以上には語らない。この姿勢は40年後の和泉市史編さん委員会編の『和泉市の歴史1 横山と横尾山の歴史』（2005刊）にも受け継がれていて、「一山寺院」としての横尾山施福寺を中心にして横山谷の歴史をたどり、市史としては画期的な優れた書物であると思われるが、やはり仏並寺と古代の池辺氏については言及を避けていて、池辺氏は後の時代に台頭した横山郷の開発領主であるかのように扱っている。

なぜなのか、首をかしげざるをえないが、思い当たることをいえば、津田左右吉以降、歴史学は『日本書紀』を読みながらも、『日本書紀』の記述を否定すること、あるいは無視することを学んでしまったのかもしれない。

【第三章】『日本書紀』の記事をたどって

『日本書紀』あるいは『日本靈異記』の記述をたどってみることにしよう。ただ正史である『日本書紀』の記事も確かに混乱していて、仏教伝来のこの間の歴史を正確にたどるのは、なかなか難しいことのようにも思える。まず、欽明天皇十三年（552）の冬十月に、有名な仏教伝来の記事がある。『法王帝説』・『元興寺縁起』の別伝によって、これを538年にする説もあるのは周知の通りであるが、今はしばらく問題とすまい。『日本書紀』翌十四年の記事がさしあたって問題となる。

夏五月の戊辰の朔に、河内国言さく、「泉郡の茅渟海の中に、梵音す。震音雷の声の若し。光彩しく晃り曜くこと日の色の如し。天皇、心に異しびたまひて、溝辺直（此に但に直とのみ曰ひて、名字を書かざることは、蓋し是伝へ写して誤り失へるか）を遣して、

海に入りて求訪^{もと}めしむ。

是の時に、溝^{くすのき}辺直、海に入りて、果して樟木の、海に浮びて玲瓏^{てりかかや}くを見つ。遂に取りて天皇に献^{あのみ}る。画工^{えのたくみ}に命^{めい}して、仏像^{ほとけのみかた}二軀^{ふたはしら}を造らしめたまふ。今の吉野寺に、光を放ちます樟の像なり。

和泉国が河内国から分立したのは天平宝字元年（757）のことであるから、ここでは泉は河内国の一郡である。その高台からは大阪湾（茅渟海）がはるか遠く見渡せる。その海はカムヤマトイハレビコ（神武天皇）の兄弟たちが九州から攻め上って、日下の盾津で兄のイツセノミコトが痛手を負い、まっすぐには大和に入ることができずに、日の神の御子が日に向って戦うことはできないとして紀伊半島の最南端の熊野にまで迂回する、その海でもある。イツセノミコトが血に塗れた手を洗ったので、その海、すなわち大阪湾を血沼の海というようになったという語源説話が『古事記』にはある。それはあるいは夕陽を反射して赤々と染まった海からのイメージなのかも知れない。その海を遠くに見下ろすことのできるヲノウト神社がイツセノミコトを祭神とするようになるのは理解できないことではない。付言すれば、本居宣長の『古事記伝』はこの地名を説明して、黒鯛の種類にチヌという魚がいる、和名抄では海鯽魚という字を当てているが、この魚は血沼（チヌ）の海の名産であるからその地名を名にしたのだ、チヌという魚が獲れるからチヌの海というようになったという解釈は間違いだなどといっている。そのチヌの海を西方から荘厳な音楽とともに無量の光が訪れる。溝（池）辺直が海に入って確かめると、その正体は樟だったというのだが、ここにはすでに西方極楽に住まいして一切衆生を来迎する阿弥陀仏のイメージが蔵されているとあってよいであろう。前年（552）にもたらされた仏像が百済で製造されたものであったとすれば、この樟を使って日本で最初の仏像二体が作られることになる。それが、今、すなわち『日本書紀』が編纂された時期には吉野寺にあると、ここではいう。吉野比蘇寺の放光の樟の仏像である。『大阪府全志』は「本尊仏像は優秀の彫刻なり」といって、六世紀の仏像がそのまま仏並寺にあるかのような書きぶりなのだが。私は写真でしかその仏像を拝見したことはないが、『日本書紀』の記述通りであるならば、日本で最初に制作された仏像であることになる。確かに飛鳥寺の釈迦像や法隆寺の釈迦像・薬師像に共通した古風の趣のある、細面で杏型の目をした北魏様式の仏像である。そして、この記録を尊重する限り、日本で最初に作られた仏像というのは、金銅仏でも、乾漆仏でも、そして塑像でもなく、木像であったことも記憶しておかなくてはならない。

『日本書紀』のなかの池辺直の登場記事をさらに挙げることにする。敏達天皇十三年（584）のこととなる。

秋九月に、百済より来る鹿深臣^{かふか}（名字欠せり）、弥勒の石像一軀^{いしのみかたひとしらすも}有てり。佐伯連（名字を欠せり）、仏像^{ほとけのみかた}一軀有てり。

是歳、蘇我馬子宿禰、其の仏像二軀を請せて、鞍部村主司馬達等・池辺直氷田を遣して、四方に使用して、修行者を訪ひ覺めしむ。是に、唯播磨国にして、僧還俗の者を得。名は高麗の恵便といふ。大臣、乃ち以て師にす。司馬達等の女嶋を度せしむ。善信尼と曰ふ（年十一歳）。又、善心尼の弟子二人を度せしむ。其の一は、漢人夜菩が女豊女、名を禪蔵尼と曰ふ。其の二は、錦織壺が女石女、名を恵善尼と曰ふ（壺、これを都符と云ふ）。馬子独り仏法に依りて、三の尼を崇ち敬ぶ。乃ち三の尼を以て、氷田直と達等とに付けて、衣食を供らしむ。仏殿を宅の東の方に経営りて、弥勒の石像を安置せまつ。三の尼を屈請せ、大会の設齋す。此の時に、達等、仏の舍利を齋食の上に得たり。即ち舍利を以て、馬子宿禰に献る。馬子宿禰、試に舍利を以て、鉄の質の中に置いて、鉄の鎚を振ひて打つ。其の質と鎚と、悉に摧け壊れぬ。而れども舍利をば摧き毀らず。又、舍利を水に投る。舍利、心の所願の隨に、水に浮び沈む。是に由りて、馬子宿禰・池辺氷田・司馬達等、仏法を深信けて、修行すること懈らず。馬子宿禰、亦、石川の宅にして、仏殿を修治る。仏法の初め、茲より作れり。

『日本書紀』の紀年をそのまま受け取るならば、欽明十四年（553）からは三十年後のことになる。百濟からの渡来人である鹿深臣がもっていた弥勒菩薩の石像と佐伯連がもっていた仏像を蘇我馬子は手に入れた。そして、池辺直氷田と鞍部村主司馬達等を諸方にやって仏法修行者を探させたが、すでに還俗していた高麗の恵便が見つかった。それを仏法の師匠としたが、さらに出家者を探して、結局のところ、司馬達等自身の娘の嶋を出家させ善信尼とよび、その弟子として漢人夜菩の娘の豊女と錦織壺の娘の石女の二人も出家させてそれぞれ禪蔵尼、恵善尼と呼んだというのである。ここに関係しているのはすべてが海外から渡来した氏族のりびとであることとともに、日本で選ばれた最初の出家者がすべて女性であったことも注目される。出家者に戒・定・慧を求めるよりも、むしろシャーマンとしての要素が求められたのだというのは、その通りなのであろう。池辺直氷田と司馬達等は蘇我馬子の下でかいがいしく三人の尼たちの衣食の世話をし、仏法の擁護者であったことになる。あるとき、司馬達等が仏舍利を見つけて、それを鉄の質に置いて鉄の鎚で叩いても決して砕くことはできず、水に投げ入れても心中の願いのままに浮き沈みした。それを見て、いよいよ蘇我馬子・池辺氷田・司馬達等らは仏法を深く信心するようになって、馬子は石川の家に仏殿を作った。ここではこれがことさらに日本における「仏法の初め」だとしている。

そうして、翌年の敏達天皇の十四年の春二月十五日、『日本書紀』の記事をたどるならば、蘇我馬子は大野丘の北に塔を建てて法会を行った。前年に手に入れた仏舍利を塔の柱頭に蔵めた。ところが、同月の二十四日には、馬子は病気にかかる。卜者に占わせたところ、卜者は「父のときに祭りし仏神の心に崇れり」といった。仏教渡来当時、排仏派の物部尾輿・中臣鎌子らに抗して、父の蘇我稲目は百濟聖明王が贈った仏像を欽明天皇からもらい受けて向原の家を寺に改めたのだ。父の稲目が崇拜して祭った仏神の心が崇っているのだという。

そのことを敏達天皇に奏上したところ、天皇は「卜者のことばどおりに、父親が敬った神に祈るがよい」と命令をください。馬子が石像を礼拝して延寿を祈ったものの、疫病は世の中にさらに蔓延した。仏法がやって来たのも西方からであろうが、日本には疫病もつねに西方からやって来る。仏法は疫病をともに連れてきたのだという古代人の思惟のあり方はけっして突飛なものではないであろう。排仏派の物部守屋と中臣勝海とが立ち上がることになる。

三月の丁巳の朔に、物部弓削守屋大連と、中臣勝海大夫と、奏して曰さく、「何故にか臣が言を用る肯へたまはざる。孝天皇より、陛下に及るまでに、疫病流く行りて、国の民絶ゆべし。豈専蘇我臣が仏法を興し行ふに由れるに非ずや」とまうす。詔して曰はく、「灼然なれば、仏法を断めよ」とのたまふ。

物部守屋と中臣勝海は上奏する。どうして私たちの意見を取り入れてくださらないのか。欽明天皇の代から今上陛下に代に到るまで、疫病は猖獗をきわめて、衰える気配はなく、人びとはすっかり死に絶えてしまうであろう。これもひとえに蘇我馬子が仏法を崇拝しているからではないでしょうか、と。敏達天皇は、二人のことばを認めざるを得ず、それこそ因果関係がはっきりしていると判断して、仏法を排することを命ずることになる。

丙戌に、物部弓削守屋大連、自ら寺に詣りて、胡床に踞げ坐り。其の塔を斫り倒して、火を縦けて燔く。并て仏像と仏殿とを焼く。既にして焼く所の余の仏像を取りて、難波の堀江に棄てしむ。是の日に、雲無くして風ふき雨ふる。大連、被雨衣り。馬子宿禰と、従ひて行へる法の侶とを誦責めて、毀り辱むる心を生さしむ。乃ち佐伯造御室（更の名は、於閭礙）を遣して、馬子宿禰の供の善信等の尼を喚ぶ。是に由りて、馬子宿禰、敢へて命に違はずして、惻愴き啼泣ちつつ、尼等を喚び出して、御室に付く。有司、便に尼等の三衣を奪ひて、禁錮へて、海石榴市の亭に楚撻ちき。

古来の神々への畏怖心、あるいは神道がもっていたであろう理念はさておき、現実に今起こっている疫病の惨状が物部守屋に荒々しい行動をとらせることになる。みずから出かけて行って、胡床にどっかと腰をおろし、部下たちに命じて塔を伐り倒させ、仏堂と仏像に火を放つ。そして残った仏像を難波の堀江に投げ捨てる。この行為そのものは、流し雛、あるいは罪やけがれを移した人形を川や海に流す習俗を思わせなくもない。難波の海での祓いというのはずっと後世まで行われ、『源氏物語』の中では主人公の光までが行っている。災いをもたらした原因そのものである仏像を祓うことになる。ここで投げ棄てなくてはならなかった仏像こそが仏並寺の本尊だということになるが、まだもう少し『日本書紀』の記述を追うことにしよう。この破仏の行為に対して天は風を吹かせ、雨を降らせるが、物部守屋はそれをこととせず、雨具をまとめて活発に動いて指揮した。佐伯御室をやって蘇我馬子が供養

していた三人の尼を連れて来させ、法衣を脱がせて繁華な海石榴市で鞭打たせた。ここでは蘇我馬子は抵抗らしい抵抗をせずに、尼たちが凌辱されて連行されるのを見逃している。これではあまりに情けないが、『日本書紀』は別に或本の記録を付け加えていて、それには「物部弓削守屋大連・大三輪逆君・中臣磐余連、俱に仏法を滅さむと謀りて、寺塔を焼き、并て仏像を棄てむとす。馬子宿禰、諍ひて従はずといふ」とあり、馬子をはげしく抵抗したように記されている。

天皇、任那を建てむことを思ひて、坂田耳子王を差して使とす。此の時に属りて、天皇と大連と、卒に瘡患みたまふ。故果して遣さず。橘豊日皇子に詔して曰はく、「孝天皇の勅に違ひ背くべからず。任那の政を勤め修むべし」とのたまふ。又瘡発でて死者、国に充盈てり。其の瘡を患む者言はく、「身、焼かれ、打たれ、摧かるるが如し」といひて、啼泣ちつつ死る。老も少も竊に相語りて曰はく、「是、仏像焼きまつる罪か」といふ。

敏達天皇は失った任那復興政策をとって、坂田耳子王を朝鮮半島に派遣しようとしていたが、その大事のときにあたって、天皇自身と物部守屋がともに天然痘を罹患してしまった。それゆえ、坂田耳子王の派遣は実現できず、みずからの死を予感した天皇は弟の橘豊日皇子、すなわち後の用明天皇に後事を托すことになる。任那復興は亡くなった父欽明天皇の悲願であり、われわれ子どもたちへの遺言でもあった、お前はきっとこれを成し遂げよと。しかし、天然痘は猛威をふるい続ける。身体が熱で焼かれ、激しく打たれて碎かれるようだと泣きながら訴えて、人びとは死んでいく。そして、仏像を焼いた、その罪がわが身に返ってきたのだとみなは感じて、それを口にする。

夏六月に、馬子宿禰、奏して曰さく、「臣の疾病りて、今に至るまでに癒えず。三宝の力を蒙らずは、救ひ治むべきこと難し」とまうす。是に、馬子宿禰に詔して曰はく、「汝ひとり仏法を行ふべし。余人を断めよ」とのたまふ。乃ち三の尼を以て、馬子宿禰に還し付く。馬子宿禰、受けて歓悦ぶ。未曾有と嘆きて、三の尼ををが頂礼む。新に精舎を営りて、迎へ入れて供養ふ。

夏の盛りに、天然痘はいよいよ猖獗を極め、蘇我馬子は自身の病勢が衰えず、今もって快方に向かわない、これはもう仏法に頼るしかない、天皇に懇願して、やっこのことで、蘇我馬子一人だけに仏法の信仰が許可される。そして捕えられ辱められていた三人の若い尼たちも馬子のもとに返される。三人はすんでのところ、日本での最初の殉教者になるところであったから、馬子はこれを歓悦して、未曾有のこととして感嘆し、そして頂礼する。これは仏をおし頂くような動作であり、僧尼を仏の化身として崇め奉る姿勢を示すのであろう。宗

教に帰依するというのは身震いするような体験であり、尋常の精神のことではない。今までの寺は焼かれてしまっていたから、新たに寺を造営して、そこで三人の尼をうやうやしく「供養」するのである。池辺直氷田もその敬虔なる信仰者である蘇我馬子の下で働く信仰者であった。

こうして、秋の八月には「天皇、病^{みやまい}弥留^もりて、大殿^{かむあが}に崩^{あざ}りましぬ」とあって、敏達天皇自身が崩御することになる。蘇我馬子は回復し、物部守屋との対決姿勢はいよいよ強まっていく。敏達天皇の殯宮でのエピソードの描きぶりが二人の関係を描いて冴えわたっている。

馬子宿禰大臣、刀^{たち}を佩^はきて誅^{しぬ}たてまつる。物部弓削守屋大連、听^{あざ}然而^{わら}咲^{あざ}ひて曰^わはく、「^{ししや}獵^お箭^お中^{すずみ}へる雀^{すずみ}鳥^{わら}の如^{わら}し」といふ。次に弓削守屋大連、手^て脚^{あし}揺^{あし}き震^{ふる}ひて誅^{しぬ}たてまつる。馬子宿禰大臣、咲^{わら}ひて曰^わはく、「鈴^{すず}を懸^かくべし」といふ。是^{こゝ}に由^よりて、二^{ふた}の臣^{たり}、微^{やうやく}に怨^{うら}恨^みを生^うず。

この後、もう一人の若いヒーローである聖徳太子の登場とともに、日本で最初で最後の宗教戦争の幕が切れて落とされることになる。

【第四章】『日本靈異記』の説話から

さて以上は『日本書紀』の記述をたどったものであるが、池辺直氷田の名前は説話集の中にも登場する。『日本靈異記』上巻の説話を引いて見る。

三宝を信敬ひて現報を得る縁 第五

大花^{だいけ}上位^{うゑ}大部^{たふ}屋^や栖^す野^の古^こ連^{れん}公^{こう}は、紀伊^{きい}国^{くに}名草^{なぐさ}郡^{ぐん}の宇治^{うぢ}の大^{おほ}伴^{とも}連^{れん}等^らの先祖^{せんぞ}なり。天^{あま}澄^{すみ}める情^{なさけ}ありて三^{さん}宝^{ぼう}を重^{おも}尊^とぶ。本^{ほん}記^きを案^あふるに曰^わはく「敏^み達^{だち}天^{てん}皇^{こう}の代^よに、和^わ泉^{せん}国^{こく}の海^{うみ}の中^{なか}に樂^{たの}器^ぎの音^ね声^{こゑ}有^あり。笛^{ふえ}と箏^{そう}と琴^{こと}と篋^{せう}篋^{せう}と等^らの声^{こゑ}の如^{ごと}く、或^{ある}るは雷^{かみ}の振^ふひ動^うくが如^{ごと}し。昼^{ひる}は鳴^なり夜^よは耀^あきて東^{あづま}を指^さして流^{なが}る。大^{おほ}部^ぶ屋^や栖^す野^の古^こ連^{れん}公^{こう}天^{てん}皇^{こう}に聞^き奏^{そう}せども嘿^{へい}然^{ぜん}したまひて信^{しん}ひたまはず。更^{さら}に皇^{みかど}后^ごに奏^{そう}せば聞^ききたまひて連^{れん}公^{こう}に詔^{みこと}して曰^わはく「汝^{なむ}、往^いきて看^みよ」とのたまふ。詔^{みこと}を奉^{ほう}りて往^いきて看^みる。実^{まこと}に聞^きける如^{ごと}く霹^{かみ}靂^{とけ}に当^ありし桶^{くす}有^あり。還^{かへ}りて上^あ奏^{そう}さく「高^{たか}脚^{しの}浜^{はま}に泊^はつ。今^{いま}屋^や栖^す伏^ふして願^{ねが}はくは仏^{みかた}の像^{がた}を造^{つく}りたてまつらむ」とまうす。皇^{みかど}后^ごのたまはく「願^{ねが}ふ所^{ところ}に依^よるべし」とのたまふ。連^{れん}公^{こう}詔^{みこと}を奉^{ほう}りて大^{おほ}に喜^{よろこ}び、嶋^{しま}大^{おほ}臣^{おほみ}に告^つげて詔^{みこと}命^{めい}を伝^{つた}ふ。大^{おほ}臣^{おほみ}また喜^{よろこ}び、池^い辺^へ直^{ちか}氷^ひ田^たを請^{むか}へ、仏^{ぶつ}菩^ぼ薩^{さつ}の三^{さん}軀^{しん}の像^{がた}を彫^た造^{つく}らしむ。豊^{とよ}浦^{うら}堂^{どう}に居^いきて諸^{もろ}人^{ひと}仰^あぎ敬^{うや}まふ。然^{しか}うして物^{もの}部^{のべ}弓^{ゆげ}削^{のり}守^{もり}屋^や大^{おほ}連^{れん}公^{こう}皇^{みかど}后^ごに奏^{そう}して曰^わさく「おほよそ仏^{みかた}の像^{がた}を国^{くに}の内^{うち}に置^おくべからず。なほ遠^{とほ}く棄^すて退^ひけよ」とまうす。皇^{みかど}后^ご聞^ききて屋^や栖^す古^こ連^{れん}公^{こう}に詔^{みこと}して曰^わはく「疾^{すみ}に此^{こゝ}の仏^{みかた}の像^{がた}を隠^{かく}せ」とのたまふ。連^{れん}公^{こう}詔^{みこと}を奉^{ほう}りて、氷^ひ田^た直^{ちか}をして稲^{いな}の中^{なか}に藏^{かく}さしむ。弓^{ゆげ}削^{のり}大^{おほ}連^{れん}公^{こう}火^ひを放^{はな}ちて道^{みち}場^ばを焼^やき、仏^{みかた}の像^{がた}を将^もちて難^{なん}波^はの堀^{ほり}江^えに流^{なが}す。然^{しか}うして屋^や栖^す古^こを徵^せめて言^いはく「今^{いま}国^{くに}家^けに災^{わざわひ}起^おるは、隣^{まら}の国^{くに}の客^{きやく}神^{しん}の像^{がた}を己^{おの}が国^{くに}の内^{うち}に置

くに依りてなり。斯の客神の像を出して速^{すみやか}忽^{とまくに}に棄て、豊国に流すべし」といふ（客神の像とは仏なり）。固く辞びて出さず。弓削大連心を狂^{くるほ}し逆^{さかへ}を起し、傾^{かたふけむこと}を謀^{たより}り便を窺ふ。爰に天^{そね}また嫌^いみ地^{いな}また慥^おみ、用明天皇の世に当りて、弓削大連^{とりひだ}を挫^{ひそ}き、すなはち仏の像を出して後の世に伝ふ。今の世に吉野の竊^{ひそ}寺^おに安置^おきて光を放つ阿弥陀の像是れなり。（以下、略）

この説話の方では主人公は人となりとして澄明な心をもった大部屋栖野古連公である。和泉の沖合の海をただよって来た音楽の音があり、それを敏達天皇に奏上したものの、天皇は沈黙してその話に取り合わなかった。そこで、後に推古天皇となる皇后の額田部皇女に奏上すると、行って調べるようにと命じる。すると、雷に当たった楠であった。屋栖野古はそれが高脚の浜に打ち上がったことを報告し、それでもって仏像を造ることを乞うて許された。それを蘇我馬子に告げると、馬子も喜んで池辺直氷田を招いて仏菩薩三体を彫造させた。「池^{いけ}辺^べ直^{あた}氷^ひ田^たを請^{むか}へ、仏^{ぶつ}菩^ぼ薩^{ざつ}の三^み軀^{しら}の像^{みかた}を彫^{まりつく}造らしむ」というのだが、古代の記録、あるいは物語を読むとき、使役の助動詞がだれの使役を指しているのか判断するのは実のところ厄介である。池辺直氷田は彫刻士で、馬子は彫刻士の氷田に「彫造」させたというのか、そうではなく、馬子が氷田に命じたのは確かだが、氷田はまただれか彫刻士に命じて「彫造」させたのか。『日本書紀』敏達紀に池辺直氷田と並んで出て来る鞍部村主司馬達等は法隆寺金堂の釈迦三尊像を造った司馬鞍首止利の祖父であり、金銅器の製造技術者であったかに見える。それなら、それと並んで池辺直氷田もまた木工技術者、あるいはその長であったとしてもおかしくはない。仏像の木による彫刻がこのとき初めて行われるとすれば、それまで池辺直氷田はなにの彫刻を行っていたのだろうか。思いつくことと言えば、神楽の面ということになるだろうか。山間であって祭祀に使用する仮面を彫刻する技術者集団の長であったと想像して見る。その継承された木彫技術の先にこの地方に遺されたおびたしい「行基仏」や、あるいは和泉穴師神社の神像が見えて来るようにも思われる。

仏菩薩三体というからには、阿弥陀如来と観音・勢至の脇侍の二菩薩をいうのであろうが、それを豊浦寺において人びとの信仰の対象としたものの、排仏派の巨頭の物部守屋が仏像などこの国の中に置いてはならない。遠くに棄ててしまえといい、慌てた額田部皇女は屋栖古連にすぐにこの仏像を隠すように命令する。屋栖古連は池辺直氷田に命じて「稲の中に」隠させた。守屋は道場を焼き、他の仏像を難波の堀江に流し、その上で隠した仏像のあるのを知って、屋栖古連に、今、国家に災いが起こっているのは隣の国の客神の像を国の中に置いているからである。お前が隠しているこの客神の像を出してすぐに棄て、「豊国」に流すべきだという。しかし、屋栖古は拒絶して出さなかった。『日本霊異記』はもちろん仏者の立場で書かれているので、物部守屋は「心を狂し逆を起し」とあり、そのことに天も地も憎んで、用明天皇の時代には、守屋は遂には滅び去ってしまうことになる。その後、この仏像はふたたび日の目を見ることになり、吉野^{ひそ}の竊^お寺^おに置かれることになったというのである。

ここで、「稲の中に」隠したところというのが、仏並ということになる。池辺氏については『新撰姓氏録』の「和泉諸蕃」に「池辺直、坂上大宿禰同祖。阿智王之後也」とあって、渡来系の氏族であり、和泉に根拠地をもっていたことがわかるが、少し気になることがないでもない。用明天皇は磐余の池辺雙槻宮に居し、法隆寺のあの有名な薬師如来像の光背銘には「池辺大宮治天下天皇」とも記されている。この池辺雙槻宮は大和国十市郡、現在の桜井市にあったと考えられる。また、『日本書紀』敏達紀には、

七年の春三月の戊辰の朔壬申日に、菟道皇女を以て、伊勢の祀に侍らしむ。即ち池辺皇子に姪されぬ。事顕れて解けぬ。

とある。この密通事件を起こした池辺皇子も実は用明天皇のことであると考えられる。はなはだ尋常ならざる事件であるが、そのことはともかく、用明天皇はすでに皇子のころから池辺の雙槻に住していて、そこで池辺皇子と呼ばれ、天皇即位とともにそこが宮となったものと考えられる。これと池辺氏はどう関わるのだろうか。『新撰姓氏録』の編纂は平安時代の弘仁六年（815）のことであり、そのときすでに池辺氏の本貫が和泉国だと記されたとしても、たとえば、もともとは大和の氏族であり、貴人の子は乳母に育てられてその姓を名とすることもあったから、用明天皇は池辺氏の女性を乳母として育てられたのではないかという想像もできないわけではない。中世の、たとえば『舞の本』の「烏帽子折」に現れる山路（用明天皇）の絵姿女房譚のエピソード、さらには近松門左衛門の『用明天皇職人鑑』に至るまで、実際の用明天皇は天然痘にかかって治世は短かったものの、たんに聖徳太子の父親だからという理由からだけではなく、気に掛かるところの多い天皇である。近松の作品はラブリーの『ガルガンチュア物語』を思い出させるようなにぎやかな、ポリフォニックな作品であり、さまざまな職人たちが用明天皇について宗教戦争で大活躍するのだが、なぜか中世の職人たちは用明（池辺）天皇との結びつきを伝承してきたようである。「金剛組」というこの当時にできたという大工集団の世界最古の株式会社が今なお大阪にはあるのだから、この伝承もおおざりにはできない。しかし、池辺氏は池辺皇子あるいは用明天皇と関わりがあったとしても、やはりもともと横山谷の人であり、自分の本貫の地に尊い仏像を隠したのであつたらう。

【第五章】 槇尾山施福寺

仏並寺は中世にはひっそりと存在し続け、歴史の表舞台に登場することはない。だが、仏並から東槇尾川の谷を遡っていった槇尾寺施福寺が隆盛を誇った。黒田俊雄氏の「寺社勢力論」以来、中世社会における寺社の勢力は見直されているが、槇尾山施福寺は「一山寺院」として横山谷一円を支配下に置いて荘園化する。そして仏並の池辺氏は中世を通じて大規模な荘園を所有する施福寺の下司職にあつた。正確にいえば、池辺氏は横山谷の開発領主であ

り、それを槇尾寺に寄進することによって、その支配権を確保したことになる。とすれば、池辺氏＝仏並寺と施福寺は別のものではなく、仏並寺は施福寺に含みこまれることになる。仏並に「槇尾山入口」のバスの停留場があるのはバス会社の恣意によるとばかりはいえない。この槇尾山施福寺については、いわゆる『槇尾山縁起（巻尾山縁起証文等之事）』（大日本仏教全書120 寺誌叢書4）があって、欽明天皇の時代の行満上人の開基を伝え、一丈六尺の弥勒菩薩像を安置したこと、また光仁天皇の時代に法海上人が九十日の安居を勤めたときに欠かさず訪れて水と花を供えた僧がいた、それが本当は観音菩薩であったので、そこで千手観音菩薩像を造立して安置したことなどが語られている。これが三十三か所廻りの対象となる観音像である。ふと「花を供えて」ということばで、川下の池田郷の「納花」という地名を思い出す。「納花」は施福寺に花を供えるための花畑があったところと伝えるからである。しかし、『槇尾山縁起』にまして施福寺の当時のありさまをよく伝えると思われるエピソードが『日本霊異記』中巻「愛欲を生し吉祥天女の像に恋ひて感応して奇しき表を示す縁 第十三」と題する説話である。

和泉国泉郡の血滄上山寺ちぬのかみのやまでらに、吉祥天女のせふぞう壻像有す。聖武天皇の御世に、信濃国の優婆塞来りて其の山寺に住む。天女の像みかた めかりうに睇おこちて愛欲を生し、心を繋けて恋ひ、六時ごとに願ふ。「願はくは天女の如き容好き女を我れに賜へ」とねがふ。優婆塞夢に見て、天女の像かほよ をみなにくなか婚ふ。明日みにそ瞻れば、彼の像もの腰けがれに不浄染み汚れたり。行者視ては慚愧はぢて言さく「我れ似たる女を願ふ。何すれぞかたじけな忝もはらみく天女ひそか専みや自づから交りたまふ」とまうす。媿ぢて他人に語らざれども弟子ひそか儔みやに聞きく。後に其の弟子ひそか師みやに礼無し。故せにお噴さめひ去らる。里をおひいだ擯そし出され、師あらはをそらことまこと誂まことし事しを程す。里人聞きき、往うやまきて虚実うごを問とひ、並まことに彼の像うやまを瞻うごれば淫精染み穢れたり。優婆塞事を隠すこと得ずして、具に陳べ語まことる。諒まことに委しる、深く信うやまはば感うごきてこた応おもひへずといふこと無し、と。是れ奇異あやしき事なり。涅槃經に云ふが如たいむし「多淫あがの人は画おこける女にすら欲おもひを生ず」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

この話そのものの面白さはともかく、ここでいう血滄上山寺は槇尾山の施福寺であると考えられる。そこには遠く信濃の国から修行にやってきた優婆塞がいたことがわかる。優婆塞というからには正式に得度をして国家で認められた僧侶というわけではない。空海もまた優婆塞としてここにやって来て、勤操によって剃髪得度をしたのであった。槇尾山には多くの優婆塞たちがいて、優婆塞ながらも師匠・弟子の関係も結んで集団をつくり、修行をしていたことがわかる。

私はかつて韓国の山寺で十日ほど過ごしたことがある。私自身は住職のご好意で快適な僧坊に寝泊まりさせていただいたのだが、山林の中ではそこかしこに新たに自分で鋸や金槌をふるって小さな庵を作り、横に簡易なかまどをつくって煮炊きしながら修行をしている人たちがいた。それが日本でも古い山岳寺院のありようではなかったろうか。韓国のそうした

修行者に御馳走していただいた山菜のナムルと麦飯とみそ汁とは絶品だった。日本の仏教は葬式仏教となり（それなりの必然性があり、批判しているわけではない）、寺には墓が付随して暗く、いつも死と向き合う姿勢をもたざるをえず、特に夜間には普通の神経の人はいっしゆの恐怖感なしには過ごせない気がする。しかし、韓国の仏教は葬式仏教とは無縁であり、“memento mori”（死を忘れるな）は大切な標語であるにしても、その山林の生活は活き活きとしてすこぶる清明であり、修行者の顔もどこか突き抜けて明るかった印象がある。

もともと宗教とは人がいかに生きるべきかを追及するためのものであったはずだから、それが本来あるべき姿であり、檜尾山の修行者の生活もしかつめらしい苦行の相ばかりで見るべきではないであろう。この説話でも優婆塞は性欲に苦しんでいるわけではなく、吉祥天女に向って、あなたのような美女を手に入れたいと祈願して、それを吉祥天女みずからがかなえてくれたという話である。誤解を恐れずに言えば、密教の最高經典の一つである『理趣経』は男女の交接こそが菩提であり、最高の境地であると説いている。『日本霊異記』の説話は滑稽譚ではあっても、あくまでも信仰に応じる霊異を語っているのであって、たとえばフランスのファブリオのように僧侶の墮落ぶりを嘲笑しているのではない。この説話ではまたこの寺を支える「里人」たちがいたことが注目される。それこそ横山谷の人びと、あるいは池辺氏を初めとする仏並の人びとであるはずなのである。寺と里びとは断絶してはいない。寺の修行者たちの様子について、行って尋ねることができ、不埒な行いを糾弾こそしないものの、好奇心いっばいに詮索はする。両者には積極的な交流があったように思われる。ちなみに、この吉祥天女像は現在は貝塚市王子の吉祥天園寺に移して安置されている。

『日本霊異記』の同じく中巻、「観音の木の像火の難に焼けず威く神き力を示す縁 第三十七」もやはり檜尾山施福寺でのことをいうらしい。

聖武天皇の世に、泉国泉郡の部内に、珍努上山寺に正観自在菩薩の木の像を居きて敬ひ供る。時に火を失し、其の仏の殿を焼く。彼の菩薩の木の像は、焼かるる殿より二丈ばかり出でて、伏して損はるること無し。誠に知る、三宝の色にあらざること。目に見ずといふとも威力無きにあらず。此れ不思議の第一なり。

観音さまは不壊で失火などという事態は超越している。「色にあらざること。目に見ずといふとも威力無きにあらず」という表現はわかりにくいだが、横山谷は仏教受容の最初の受難の時代から仏教を守り通した仏並を含みこむ霊地であり、そこには貴い仏像があり、その仏に近づこうと努める修行者たちが集って生活をしている。空海もことさらに雌伏の地としてこの横山谷を選んだのには意味があったのであろう。『檜尾山縁起』は、行満の弥勒菩薩を安置しての開基、法海の観音像の安置の話しに続けて、役の行者が『法華経』の「不軽品」を奉納したこと、また行基が卒塔婆を立てたこと、そして弘法大師がここで勤操の手によって得度したことなどを語る。縁起が弘法大師のことをことさらに語るのは、史実であるよりも弘法大師による権威づけを意図

したものだと、現在の歴史学者は考える。しかし、『御遺告』自体に槇尾山のことは触れられていて、東寺と高野山と誕生地の讃岐の善通寺を除けば、槇尾山施福寺は京都の高尾山の神護寺について、空海と深いゆかりをもつお寺だといえる。そうして次に平安時代の傑僧である覚超の話になる。



仏並寺

【第六章】 覚超の「修善講式」

仏並には最初に述べた通り、今でも何軒かの池辺氏のお宅があるが、この覚超が出たという本家筋の池辺氏のお宅を訪ねた。覚超の自筆の重要文化財である「修善講式」がこのお宅にはあって、今でこそ行われなくなったものの、以前は毎年九月九日には家の行事として修善講が覚超の時代以来絶やすことなく、行われていたのだという。ご主人の弘氏はすでに亡くなられていて、出て来られた御夫人と話をし、「止悪修善」という石碑と「修善講式」の納められている建物の写真を撮らせていただき、そして、池辺弘氏が1981年に発行された赤松俊秀氏著のパンフレットをいただいた。赤松俊秀氏の『続 鎌倉仏教の研究』（平楽寺書店 1966）には「藤原時代浄土教と覚超」という論文が収録されている。池辺家の所蔵されていた「修善講式」の発見を紹介しながら、貴族階級の中でのこととして捉えられていた平安時代の浄土教の、山間の庶民の中での展開をたどる史料として位置づけられている。

ただ一点、厄介なことがある。『元亨釈書』の覚超伝が覚超の出自を巨勢氏と伝えることである。全文を引いてみよう。

釈の覚超、姓は巨勢氏、泉州大鳥郡の人なり。幼にして叡山に上る。奇相あり、舌を出せば鼻を過ぐ。慈慧之を見て大いに驚きて曰く「聡明の相なり。必ず国宝とならん」と。

納れて上足となす。儕輩の年少、慧の言を嫉んで諛呼して国宝と号す、故を以て人皆之を称す。慈慧の門人たるを以て兼ねて源信法師に兄事し、顕密の奥、一山之を推す。昔慈覚、二経の疏を造り、安然法師踵いで撰述に勤めたり。超、後れて出づと雖も追つて二師に則る。所謂る東西曼荼羅抄・三密抄・両界生起・仁王護国鈔等、皆学者の為に珍秘せらる。慧、徒に語つて曰く「凡そ叡峯の学者は初め顕教を習ひ後に当に密乗を受くべし」と。是を以て超力めて秘蔵を究む。嘗て月輪観を修す、其胸常に冷きこと水の如し。皇后産難あり、超に勅して持念せしむ。超、起たず。重ねて侍臣藤公に詔したまふ。公、横川に上りて嚴旨を宣べ且つ曰く「師若し山を下らずんば我れ又宮に帰らじ」と。超已むことを得ず。藤公同駕を請うも、超聴かず、徒歩して宮に入る。産誕即ち平かなり。帝大いに悦び僧都を加へたまふも、超、受けずして速に出づ。宮司背後に逐つて詔牒を読む。是れより僧都の名あり。

賛に曰く、慈慧中興の資を以て比叡に立つや、信と運とを左右と為せり。今に至るまで台道を言ふもの慧心・檀那を以て称首となす。超公は二子の間に介つて述製に従事す。此の三者は所謂る文字を以て第一義諦を揭示せる者か。

最後の賛の方からいえば、比叡山を中興した慈慧大師良源の弟子の両翼は慧信院の源信と檀那院の覚運であった。今に至るまで比叡山の天台宗はこの二人を領袖としているが、覚超はこの二人にはさまって目立たないものの、執筆に専念した。この三人は著作で以て仏教に貢献した人たちだということであろう。

さて、覚超はここでは巨勢氏であって、和泉の国の出身ではあっても、大鳥郡の出であることになっている。泉郡の横山ということにはならない。しかし、池辺氏が今なお仏並の地に家を守り、覚超出生の家として、彼の自筆の「修善講式」を伝え、その末尾には「永延三年十一月八日 願主当郷近江大掾池辺兄雄第二男延暦寺僧覚□」とあることから、覚超はやはり池辺氏であるといってよい。だからといって、『元亨釈書』の虎関師錬がまったく間違っているわけでもないようである。大鳥郡の巨勢氏を母方の家とすることもできるし、現にそのように記す文書もあるようである。覚超は幼くして比叡山に上ったというが、舌が長くて、鼻まで届くという奇相があったという。それを見て、慈慧大師良源がこの子は聡明の相があり、きっと国宝となるだろうという。この「国宝」ということばは最澄の『山家学生式』を思い出させる。七珍万宝などが国宝なのではない、学ぶ心をもった学生こそが国宝なのだというわけだが、ここで信行解すべてを具備して比叡山を背負って立つ可能性をもつ逸材だという意味なのであろう。師匠のあまりの評価に、人情として当然のことだろうが、他の弟子たちは面白くは思わなかったという。覚超の学問で特徴的なのは、比叡山では本来は顕教を優先させ、その修得後に密教を受けるべきなのに、覚超は秘蔵された密教經典の修得にも勤めたことである。月輪観を修得して、常にその胸は水のように冷んやりとしていたというのだが、もともと舌が鼻に届いたという、どうでもいいようなエピソードも、密教修

得の素質を示したものであったのであろうか。その効験の力は世間でも評判であったらしく、藤原氏の后が難産で苦しんだとき、天皇の詔勅があり、わざわざ藤原氏の大が横川まで上って訪ねてきて、加持祈禱を頼んだのだと書かれている。覚超と紫式部は同時代人である。『源氏物語』では重篤な病や難産のたびに山の聖たちに加持祈禱を要請する。ここでふと、后ではないものの、妊娠中の葵の上が六条の御息所の生き霊に苦しめられた際の話の思い出す。能の「葵の上」ではそれこそ横川の聖が般若の面の六条の御息所の霊と対峙して調伏するのである。仏並、あるいは槇尾山施福寺の関係からいっても、また地理的な遠近からいっても、覚超は比叡山ではなく、高野山に上ってもおかしくはなかったようにも思われるのだが、この密教への傾斜にはやはり覚超が背景にもっていた横山谷の仏教の歴史があるのだとも思われる。



池辺家庭内の石碑

覚超は比叡山に行きつきりだったわけではなく、横山谷の人びとのためにもわかりやすい形で布教をした。良源一源信から受け継いだ浄土教による横山谷の人びとの結縁に努めたのである。それが「修善講式」に表れている。

此処ハ是レ部内ノ大衆ノ有縁□仏子ノ勸ニ依テ、過去・現在ノ父母・先祖・近親 并郷内ノ有縁・無縁ノ存亡ノ輩ヲ計エテ、其ノ為ニ印仏ヲ捺シ、又彼輩及自身并法界衆生平等利益ノ為ニ仏ヲ図シ経ヲ書テ卒塔婆ヲ立テ、其の基ニ件仏・経并人々名帳ヲ埋納テ、靈験ノ仏地ヲシテ毎年今日恭敬□□□奉ル処也（この部分は鎌倉本による）。

和泉郡内の有縁の人びとを勧進して過去・現在の父母・先祖・親類や郷内の有縁・無縁の人びと、亡くなった人も生きてる人も、すべてその数を数え上げてその数だけ仏の印を捺

す。また仏画を描き、経典を書写し、卒塔婆を建ててその下に仏画・経典、そして名簿を埋納する。いわゆる経塚ということになるが、そこを靈験の仏地として毎年同じ日に供養を行うということになる。ここでは法会の対象は広くは和泉郡内、絞れば池田・横山郷の人びととなるが、覚超がこれを始めたのは永延三年（989）のことであったとされる。それが池辺氏のお宅では千年ものあいだ行われ続けて来たのであった。

修善講式の後半近くには次のようなことばを唱えることになる。

今已に三宝を奉礼了ぬ、其功德无量无边也、即以此功德は自他法界平等に利益せん、就中て此郷内の有縁無縁の一切の靈等怨敵をも親友をも皆供に引導せん、現在結縁諸人各減悪業して現生後生共に安楽にして皆共に仏道成らん、大衆皆存此志して唱に随て礼拝して諸罪を懺悔して、極楽の縁を結て一生乃後には、設ひ悪道に墮とも、我は此功德を以て訴て速に解脱せんとおぼすべき者也、

南无慚愧懺悔自他所犯（七反打）

南无命終決定往生極楽（二十一反打）

すでに仏法を礼拝し終わった。その功德は無量無辺のはずであり、一切の人びとに平等に利益をおよぼし、なかんづくこの横山郷内の前世からの縁のある者もない者もその一切の靈魂について、敵同士でも親しい者同士でもすべていっしょに引導することになろう。現在において成仏の縁を結んでいる者みなが悪行を消し去って、現在の生においても後生においても安楽に成仏することになろう。人びとがみなその志を心にもって唱え、礼拝して犯した罪を懺悔して、極楽往生の縁を結んで、一生を終えるときには、たとえ悪い道に陥ることがあったとしても、今日のこの功德を訴えてすみやかに解脱しようと思うべきである・・・そして最後に、「ああ、自他の犯したことを恥じて懺悔する」と七回唱え、「ああ、臨終に際して極楽往生は決定している」と二十一回唱えるのである。

【第七章】 まとめ

『今昔物語集』第十一巻の本朝仏法部は、「聖徳太子、此朝にして、始めて仏法を弘めたる語 第一」、「行基菩薩、仏法を学びて、人を導ける語 第二」、そして「役の優婆塞、呪を誦持して、鬼神を驅へる語 第三」と展開する。最初に以後の日本の仏教のあり方を決定づける貴族仏教、庶民仏教、そして山岳仏教のそれぞれの創始者三人について語ることになるが、その三人ともに南大阪と深い関わりをもっている。四天王寺を南大阪とはいえないにしても、聖徳太子にゆかりの上太子・中太子・下太子がそうであり、物部氏との宗教戦争も河内を主戦場として戦われたとあってよい。行基の活躍舞台も後には近畿一円に広がるとしても、誕生地の堺の家原を中心とする地域といちおうは考えられるし、役の行者については、大阪と西では奈良を隔て、南では和歌山を隔てる葛城山系がその山岳跋涉の舞台であった。

日本の仏教の黎明期には南大阪が主要な舞台となり大きな役割を果たすといつてよさそうなのだが、そこに収斂し、またそこから放射する中心として仏並を位置づけると、日本の初期仏教のありようが鮮やかに浮かび上がってくるように思われる。池辺直氷田は推古天皇あるいは蘇我馬子、そして聖徳太子側に立って、仏像を仏並に隠したのだった。仏並から槇尾川を下って泉州の平野に出て、行基の活躍した堺・高石まではすぐに出られる。先に引用した『元亨釈書』では池辺氏の覚超を大鳥郡の巨勢氏かとしていたが、そこで述べたように、大鳥郡と和泉郡横山郷とは極めてありふれてしかも最適な通婚圏だったのであろう。行基が四十九院を造ったとき、その木材を供給したのは横山谷であったという伝承がある。この行基については稿をあらためて論じたいと思う。

そうして、縁起では槇尾山と役の行者との深いかかわりを説くが、仏並からまっすぐに父鬼川をさかのぼって父鬼街道（粉河街道でもある）を行けば、和泉葛城山に突き当たる。役の行者を祖とする葛城修験道とかかわりの深い山である。より正確に言えば、葛城山はいくつもあるようである。まず大阪と奈良を隔てる大和葛城山と大阪と和歌山を隔てる和泉葛城山があり、他にも金剛山の南に中葛木山があり、紀見峠の西に南葛木山がある。『葛嶺雜記』には「葛城の峯」について、次のように述べる。『日本歴史地名大系28 大阪府の地名 下』（平凡社 1986）所載のものからの引用である。

かつらきは大和のくに、限るにあらず、このみねは東南に紀の川のながれをしき、西南には友がしま、西北は海浜の山際をかぎり、東北は石川のながれをさかへ、大和川の落合よりその水上にいたりては、亀瀬といへる所にをはる。惣じて紀・泉・河・和の四か国に跨りて、行程二十八里が間の惣名なり。

地図でいえば、大和葛城山と金剛山、そして和泉葛城山を結べば逆L字形になる。それをさらに西に延ばして、先端は大阪湾の海中に入って友ヶ島に至る。北の方は大和葛城山からさらに延ばして二上山を含んで大和川の亀瀬で終わる。それらすべてが「かつらき」であり、役の行者が創始したと伝わる葛城修験道の舞台であった。行程二十八里というのには意味があって、友ヶ島から亀瀬に至るまで役の行者が法華経二十八品を一品ずつ埋めたという二十八宿が存在する。何のことはない、私の勤務する大学のある和泉市の高台からは、南の南西の犬鳴山から和泉葛城山へと和泉山脈がつらなり、岩湧山が見え、三国山に続き、北へとひとときわ高く金剛山から大和葛城山も冬には雪を頂いて見え、遠くに雌岳と雄岳の二上山も見える。パノラマとしてぼんやりと何も考えずに眺めていた風景がにわかに変質して見える。山林抖擻の修験者たちの霊山であり、聖なる山塊、サンクチュアリだったのである。美学者でもあった須田国太郎は、当時のお決まりのようにパリになど留学せず、マドリッドに行ってスペイン絵画の技術と深い精神性に影響を受けて帰ってきた昭和の初め、和歌山高商に職があって京都から通っていたことがあるらしい。その彼が行き帰りに親しんだ「かつらき」

山系の山並みを描いた絵が何点かあって、私はその深い色調に感銘を受けたことがある。神々しいとしかいいようのない荘厳さがその絵にはあった。芸術家は山々のもつ霊性を見事にとらえていたのである。仏並は屏風のようなその山々に抱かれてある。

【参考文献】

★引用は次の書物による

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系68 日本書紀 下』（岩波書店 1965）

出雲寺修校注『新日本古典文学大系30 日本霊異記』（岩波書店 1996）

『国訳一切経 和漢撰述部50 史伝部19 元亨釈書 上』（大東出版社1938 改訂版1980）

★参照した文献はできるだけ本文の中で紹介するよう心がけたが、以下の書物には論文の根幹にかかわるところで、大変にお世話になった。

和泉市史編さん委員会編『和泉市の歴史1 横山と横尾山の歴史』（和泉市 2005年）

和泉市史編纂委員会編『和泉市史 第一巻』（和泉市役所 1965 1980復刻版）

（2014年3月28日受理）

South Osaka:
Cradle of Japanese Buddhism (1)
Bunnami (仏並)

UMEYAMA Hideyuki

In the 6th century, the introduction of Buddhism caused very serious and critical conflicts in the ancient mentality of Japan, resulting in the first and last large-scale religious war in the history of Japan. As the main battlefield, South Osaka was the scene of various wars.

According to the “Nihon Shoki”, Ikebe no Atahi Hida carefully concealed Buddhist statues, which had been ordered to be destroyed and dumped into the sea. It is said that Bunnami is the very place where these statues were concealed. Surprisingly, the Ikebe family has survived through 15 centuries and continues to live in Bunnami even now.

Following the lead of Tsuda Sokichi, mainstream Japanese historians have been curiously skeptical about this account. “Nihon Shoki” should be particularly neglected with “Kojiki” because of the over estimation of the past totalitarian age. Neither the legends nor the traditions can be the object to be taken into considerations by the Japanese positive historians. They cannot accept the obvious fact of the presence of the Ikebe family in Bunnami.

By reviewing the “Nihon Shoki” and considering the local traditions in South Osaka, we would like to shed new light upon how the Japanese adopted Buddhism.

〔共同研究：大学教育における南大阪の地域文化資源の掘り起し・保存・活用の研究〕

日本仏教の揺籃の地としての南大阪（二）

——槇尾川に沿って（I） 国分寺——

梅 山 秀 幸

和泉地方には東南の山地から西北の茅沼の海（大阪湾）に向って流れる多くの河川がある。流域がさらに長ければ合流して大きな川になるのだろうが、それぞれが独立した中小河川として海に流れこむ。夏や冬の雨の少ない時期には川底がすっかりあらわになるくらい水量も少ないが、いったん大雨になれば急激に水かさが増して段丘の上までおびやかすことになる。槇尾川もそういった中小河川の一つに過ぎない。しかし、この川の流域にはなんと数多くの古代寺院あるいは古代寺院址が存在していることか。川のそもそもの源にまず西国三十三カ所霊場の一つである槇尾山施福寺があり、その入り口にある仏教導入の際の霊地ともいべき池辺氏ゆかりの仏並寺も施福寺と一つのものとして把握していいものであることは、その池辺氏の家が千五百年後の今もお現地に存続していることへの感銘とともに先に述べた。そこから川を下り、横山の盆地をへて国分あたりでは槇尾川の溪谷は思いのほか深く蛇行して、街道は高い段丘の上を通るが、その国分峠の街道筋から古い人家の密集した細い路地を通った奥まったところに国分寺が存在する。急峻な溪谷からなだらかな傾斜地になり、いくつかの農業用水の池を横目に川を下っていくと、仏教にゆかりのある地名の納花を過ぎ、室堂を通り過ぎたところには池田廃寺（現明王院）があり、さらには坂本寺（現禪寂寺）がある。それぞれが古代氏族の池田首、そして坂本臣の氏寺であり、かつてはその氏族の勢力を示して威容を誇ったものと思われるが、そこからさらに下って平野部のかつての国府近くには和泉廃寺があった。それら槇尾川流域の古代寺院（址）について今回は一つにまとめて論じて見たいと考えていたのだが、実際に資料を調べ、足を運んで山林や谷田や人家の中を歩きまわっている過程で一つ一つの寺院（址）が背後にもつ歴史が思いのほか深い層をなしていることがわかった。槇尾川流域の寺々についてだけでも、あるいは二回、三回と書き継ぐことになるかもしれない。

まずは国分峠の和泉国国分寺である。いまは人家の中にひっそりとたたずむささやかな寺であるが、その寺を調べていく過程で三人の女性の姿が立ち現れてくる。



写真1 和泉国国分寺

【一人目の女性 光明皇后】

『大阪府全志』は次のように述べる。

国分寺は中央字北条にあり、護国山と号し、真言宗高野山無量光院末にして十一面観世音を本尊とし、今は福德寺と称す。縁起に依れば、中古一人の沙門あり、智海上人と号し、本州和泉郡浦田の産なり。同郡宮里の瀧山に住して仏乗を勧修しけるに、或る時一麩来りて上人の小便を嘗めて懐胎し、竟に一少女を生みしかば、上人之を見るに忍びず、隣嫗をして慈育せしむ。嫗は貧賤にして常に農事を業とし、少女の七歳となりし年の夏五月、嫗は野田に出て苗を植ゑ、少女は嫗に伴はれて嬉戯しけるに、槇尾寺に詣で、帰途に付きし勅使大臣藤原不比等、一瑞気の揚るを見れば是即ち少女の全身より光を放てるなり（北池田村大字室堂女鹿坂の西辺に、今も照田・光田といへる字地あり、里伝に依れば当時少女の遊び居りし所なりといへり）。依て大臣輿より下りて之を見るに、体貌殊麗なりければ、光明子と名づけ、嫗に請ふて輿を同うして伴なひ帰る。長ずるに従ひて艶麗益加はり、毎に君側に侍し恩寵を得て、天平元年八月立ちて后宮となれり。光明皇后即ち是れなり。性酷だ仏法を好み、幾多の寺院を創建し、此の地は其の家郷たるを以て伽藍を構へて安楽寺と号し、後承和年中勅して国分寺となすと。

ここまでが、前段である。ここにはたいへん不思議なことが書かれている。聖武天皇の後であった光明皇后はこの地の出身であるというだけではなく、実は僧侶の小便を嘗めた雌鹿が懐妊して生まれた子どもだというのである。その子は近所の老婆に育てられて美しい少女となり、たまたま槇尾寺に勅使として参詣した藤原不比等が全身から光明を放つような少女を見て、これをもらい受けて都に連れもどった。不比等がこの光り輝く美しさの少女に出会ったのは、槇尾川をさらに下った現在の室堂あたりだという説明もつけ加えている。成長する

にともなって、この少女の艶麗さはさらに増し、聖武天皇のもとに入内していつもその側に侍り、天平八年（736）には皇后となった。その人となりは、仏教を好み、多くの寺院を建立したが、この地はみずからの誕生の地だということで寺院を建てて名前を安楽寺とつけ、平安時代の承和年中に国分寺としたというのである。

河内国から和泉郡と日根郡、さらに大鳥郡を割いて和泉監を置いたのが靈龜二年（716）、その後、天平十二年（740）には和泉監は廃止されて河内国にもどり、天平宝字元年（757）にふたたび河内国から分離して和泉国が置かれるようになった。国分寺設置の詔が出されたのは天平十三年（741）のことであったから、その当時には和泉国は存在しない。和泉国が設立されてもしばらくは国分寺が置かれることはなく、平安時代に入って始めて和泉国からの申請によって、安楽寺を国分寺とすることとなった。

『続日本後紀』承和六年五月辛巳朔癸未には、

和泉国^{まう}言す、和泉郡^{こほり}に在る安楽寺を以て国分寺と為し、講師一員、僧十口を置かん、但し読師は置かず、と。請ふに依って之を許す。

とあって、安楽寺が国分寺となったのは承和六年（839）五月三日のことだったのを確認することができる。

『大阪府全志』は大正十一年（1922）の発行であるが、光明皇后が実は僧侶の小便をなめた雌鹿が孕んで生まれた子どもだというのは、いかに俗伝であっても、その当時としては処理に困ったであろう。著者の井上正雄は、「然れども是れ妄誕不敬の説なり」として後段を始めている。たしかに不敬きわまりない言説である。そこで井上氏は『続日本紀』をもとに整理する。

光明皇后は後掲続日本紀に見ゆるが如く、淡海公藤原不比等の女にして、十六歳のとき立ちて聖武天皇の妃となり、天平元年八月皇后となり給ひ、孝謙天皇の母后にましませり、いかでかゝる事のあるべき、附会の説も亦極まれり。然れども皇后は国分寺を創建せしめ給ひし御方なれば、此の寺の創立も皇后御在世の時ならんか。

「いかでかゝる事のあるべき」として光明皇后の母が雌鹿であるという伝承は否定されなくてはならない。光明皇后が崩御したのは天平宝字四年（760）六月七日のことであるが、『続日本紀』のその日の条には詳しい崩伝がある。

六月乙丑、天平応真仁正皇太后^{かむあが}崩りましぬ。姓は藤原氏。近江朝の大織冠内大臣鎌足^{かむあが}の孫、平城朝の贈正一位太政大臣不比等の女なり。母は贈正一位県犬養橋宿祢三千代と曰ふ。皇太后、幼くして聡慧にして、早く声誉^しを播けり。勝宝感神聖武皇帝儲式とあ

りし日、納^いれて妃と^なしたまふ。時に十六。衆御を接引^つして、皆、その^{まさ}喜びを^な尽し、雅しく^{なら}礼訓に^な閑ひ、敦く^{おきな}仏道を^{こう}崇む。神龜元年、聖武皇帝位に^つ即きたまひて、正一位を^な授け、大夫人と^なしたまふ。高野天皇と皇太子とを生む。その皇太子は、^{うま}誕れて三月にして、立ちて皇太子と^な為る。神龜五年、^{おきな}夭くして^{こう}薨じき。時に年二。天平元年、大夫人を^な尊びて皇后とす。湯沐^{とうもく}の外、更に別封一千戸と、高野天皇の東宮に封一千戸を加ふ。大后、仁慈にして、志、物を救ふに在り。東大寺と天下の国分寺を創建するは、本、大后の勸めし所なり。また、悲田・施薬の両院を^い設けて、天下の^{ひた}飢^いゑ病める徒を^い療^{ひた}し養す。勝宝元年、高野天皇、^い禪を受け、皇后宮職を^い改めて紫微中台と^い曰ふ。勲賢を^い妙選して、台司に^い並^{ひた}列^いねたり。宝字二年、尊号を^い上^{ひた}りて天平応真皇太后と^い曰ふ。中台を^い改めて坤宮官と^い曰ふ。崩する時、春秋六十。

ここまでが「崩伝」であり、以下、三品船親王以下十二人の装束使を決め、三品池田親王以下十二人の山作司を決め、さらに養民司を決め、前後次第司を決めて、盛大な葬儀を行うこととしたことが記されている。そして、「天の下の諸国に^い挙哀すること三日、^い服期三日」とあって、同じ月の二十八日に、「仁正皇太后を大和国添上郡佐保山に^い葬る」とある。奈良女子大学の北の方に佐保川を^い遡^{ひた}って行けば、静かな住宅地の奥に今もたしかに聖武天皇陵と並んで光明皇后陵はある。

「崩伝」には、祖父は藤原鎌足、父は藤原不比等であり、そして、聖武天皇の皇后であったとあるが、ここまでは学校の教科書にも書かれていて、誰もが知っていることである。そして母親は贈正一位^い畠^{ひた}犬養橋宿禰三千代、歴々たる女性であって、国分峠の雌鹿であったなどということはもちろん正史には書かれていない。幼いときから聡明であり、それは世間でも評判であった。ここでは特にその^い光りかがやくような^い美しさについては^い触れていない。彼女は伝説的な美人であった。奈良の法華寺の十一面観音像は光明皇后を^い模したものと^い伝えられる。ガンダーラの生見王は生身の^い観音菩薩を見たいと^い望んでいたが、ある夜の夢に、^い生きた^い観音菩薩が見たければ、日本の光明皇后を見れば^いいいと^い告げられる。そこで、^い仏師を遣わして光明皇后をモデルに^い三体の^い観音菩薩像を作らせた、その^い一体が今の法華寺の十一面^い観音菩薩像なのだ^いという。その藤原光明子は聖武天皇が皇太子になったとき、十六歳でその妃となった。ちなみに聖武天皇と光明子は同じ年に生まれ、光明子の異母姉であり聖武の母である藤原宮子は^い精神に病を抱えていて^い極度の^い引き籠もり^い状態であったから、^い畠^{ひた}犬養橋宿禰三千代こそが^い乳母、あるいはそれに^い類した^い存在として^い聖武の母代わりであった^いと思われる。つまり、三千代の右の^い乳房を^い光明子が^い吸い、左の^い乳房を^い聖武が^い吸って^い育て、その二人がそのまま^い夫婦になった^いということになる。親密といえ^いば親密、遠慮がないといえ^いば遠慮がない^い関係である。

光明子は活発で^い社交的であり、多くの^い人びとに^い会って^い愛想よく^い振る舞い、^い皆が^い喜びを^い尽くすように^い心がけ、しかも、^い礼儀に^いかなった^い行いをして、そして^い篤く^い仏道を^い敬った。神龜元年

(724) 聖武天皇が即位すると、大夫人となり、阿倍皇女（後の孝謙天皇）と基王を生んだが、基王の方は生まれて三カ月のこれまでの歴史になかった早さで皇太子となったものの、神亀元年（728）二歳で薨去した。そして天平元年（729）に光明子は皇后となったが、「皇后」という称号を臣下として名乗ったのは光明皇后が始めてということになる。姉の藤原宮子は文武天皇に嫁いだものの、「皇后」を名乗ることができず、あくまでも「夫人」だったのである。光明子の人となりは仁慈の心に富んでいて、困窮した人びとを救済しようとする心があった。『続日本紀』の記事で、ここで特筆すべきなのは、この時代に東大寺および天下に国分寺を創建したのは、もともと彼女が勧めたものであったということ、また悲田院と施薬院を設置して天下の飢えかつ病んだ人びとを療養させるようにしたという彼女の仏法への傾斜と菩薩のような深い慈悲の心である。勝宝元年（749）、娘の孝謙天皇が即位すると、皇后宮職を紫微中台にあらため、さらに坤宮官と名を変えて、そこには能吏たちが詰めた。六十歳で崩御したのは天平宝字四年（760）のことであったから、光明皇太后の紫微中台そして坤宮官に能吏がつめたとすれば、十年以上にわたって政治権力をふるったということになる。

はなはだしく不敬ではあっても、光明皇后が雌鹿の子どもという伝説はるか遠くの三河の鳳来寺にも伝わっている。そちらでは山の上から小便をしたのは利修仙人である。利修仙人はその子を三歳まで育て上げ、竹籠に入れて奈良の都に上って都大路に捨てた。それを藤原不比等が拾って育てたのだというのである。ちなみに鳳来寺といえば、徳川家康はこの寺の本尊の薬師如来に祈って授かった子なのだという。そしてもう一人、鳳来寺の薬師如来の申し子として忘れてならないのは、虚構の人物であるにしても、矢作の宿の遊女であった浄瑠璃姫であろう。この浄瑠璃姫を主人公とした物語が十六世紀に一世を風靡し、それと同じ形式の語り物と操り人形とが合体して人形浄瑠璃の起源となる。

光明子には母の異なる姉にあたり、文武天皇に入内した宮子もまた、実は藤原不比等の子などではなく、紀州日高郡の海人の娘だという伝承が道成寺の縁起として伝わっている。恋に狂った女性が若い僧侶を追いかけ、ついには蛇となって鐘の中に隠れた僧侶を鐘もろともに焼きつくすという例の説話とは別系統の、文武天皇勅願寺としての道成寺のそもそもの創建を語る、髪長姫の物語である。梅原猛先生は、文武天皇の夫人となった宮子は藤原不比等の女などではなく、実は海人の子であるという伝承を史実と考えた上で、画期的な奈良時代論である『海人と天皇』を書かれた¹⁾。鳥がくわえてきた美しく長い髪の毛の持ち主の女性を探し求めて日高郡の海女・宮子を見つけ出して都に連れて来て文武天皇と結婚させる。これは美しい金髪を持ち主を求めてアイルランドの姫君のイザーをコーンウォールに連れて来てマルク王と結婚させる「トリスタンとイザー」伝承の日本版といえるかもしれない。不比等の二人の女とされる、宮子が文武天皇に嫁ぎ、光明子が聖武天皇に嫁いだことが、平安時代

1) 『梅原猛著作集（第二期）3, 4巻 海人と天皇 上・下』（小学館 2002年）

の藤原氏の外戚政策の雛型となるわけだが、その最初の二人ともに実の娘ではなく、しかも卑賤の出自だとする伝承はにわかには史実とは考えにくいかもしれないが（いかでか、る事のあるべき！）、宮子についてはきわめて緻密かつ蓋然的な証明を梅原先生はなされている。それなら、光明皇后の場合はどうであろうか。

現在の国分寺は密集した集落の中のごく狭い寺域に本堂と庫裏だけをもった小寺に過ぎない。しかし、本来は今の国分の集落全域を飲みこむほどの境域をもち、七堂伽藍を備えた立派なものであったと思われる。そして、光明皇后の誕生地というのは、正確には、国分寺の奥の院として少し離れた浄福寺なのだという。ふたたび『大阪府全志』に当たってみよう。

浄福寺は字滝山にあり、堺市宝泉寺末にして阿弥陀如来・薬師如来を本尊とす。和銅六年智海上人の開基なり。もと法相宗なりしが、宝永年中浄土宗に改む。口稗に依れば、光明皇后の誕生地なるを以て、天平勝宝年中同皇后は此の地に行幸して薬師の像を安置し、白滝の霊水を汲みて薬湯を設け、以て諸人の病苦を救はせ給ふ、故に白滝山成福寺と号せしが、後今の寺名に改めしと。

この浄福寺は国分寺（安楽寺）よりは国分峠近く、国分寺とは街道の反対側の槇尾川近くにある。古い民家の中を通り抜けて行くと、やはり本堂と庫裏だけの小さな寺である。本堂の裏には墓地があり、新しい立派な墓石がならんでいるが、奥の方には廢れて倒れかけ、苔の生した墓石もある。過疎化が進んでいてもう供養されることのない墓々が増えたのであろう。その墓地を抜けて、林の中のもう人が歩くこともなく朽木が倒れて失われかけた路を足を取られながら、迷わないかとためらいながら行くと、「光明弁財天」という小さな祠があった。さらに行くと、光明子が都に連れられて行くとき、地団太を踏んで別れを悲しがったという母鹿の足跡石というのがある。そのすぐ目の前には槇尾川を堰くダムがあり、実はここが十キロほど離れた光明池の取水源となっていることを、私は始めて知った。十年以上、通勤のために泉北高速鉄道を利用して、光明池駅を通り過ぎてきたものの、ほんやりとしていて、その命名の意味を深く考えたことはなかった。しかも、駅から見える線路の横の小さな池を光明池というのだと信じこんでいた。そうではなく、線路からは見えない東南の大きな池を光明池といい、その池は実際に光明子が誕生したという伝承の地、お坊さんが小便をして母鹿がそれを嘗めたという場所にある滝沢から水を取っていたのだ。光明子が生まれたのは701年のことであるが、この浄福寺の開基は和銅六年（713）と伝え、天平勝宝年間（749～757）にはいちど光明皇后が行幸して、光明滝の霊水で薬湯を煎じて病者に与えて救済したのだという。

光明子をあえて雌鹿の子だとする伝承の意味合いについて適当な説明を探せないが、これはかならずしも光明皇后をおとしめる説話ではなく、彼女の際立った聖性を尋常ではない出自によって示す説話であると考えられるべきなのであろう。光明子が困窮した人びとを救済した



写真2 浄福寺



写真3 光明皇后の母鹿の足跡石

という、その聖人としての伝承には根強いものがある。そして、光明皇后がこの和泉の地で生まれたという伝承自体もけっして「妄誕」として片付けることができない性質のもののように思われる。三河の鳳来寺は距離的に都とはあまりに遠く離れているが、和泉地方はさほど遠くはない。本当にこの地で生まれたのではなかったか。

【二人目の女性 県犬養橋宿禰三千代】

和泉地方と光明皇后を結びつけるためには、そのあいだに一人の女性を媒介させればよいことに、今回、何冊かの書物をひもとくとき、いくつかの場所を歩きまわっていて気がついた。光明皇后の母親は県犬養橋宿禰三千代であった。梅原先生が海人の子だとされる姉の宮子の母親は賀茂比売としてその名は伝わるものの、歴史の中にははっきりした輪郭を現わすことのない女性である。この賀茂比売が海女であってもおかしくはない。一方、県犬養橋宿禰三千代の存在ははっきりしていて、あるいは奈良時代史の最重要人物であるといっても過言ではないかもしれない。もう四十年ほど前のことになるが、梅原先生と亡くなられた上山春平先生は、父親の藤原鎌足にくらべて蔭に隠れた感のある藤原不比等を歴史の表舞台に登場させ、読書界に一大センセーションを巻き起こされた。これまでの天皇一代きりの都ではなく恒常的な都である平城京を造り、法律を整備して大宝律令を完成し、和同開珎という最初の貨幣を作って経済活動の基礎を整備し、さらには『古事記』・『日本書紀』の製作主体ともなって、天皇を中心とした記紀の国家イデオロギーをも完成させた。それらすべてに藤原不比等は主導的な立場でかわり、いわば不比等のプランニングにそって律令国家としての日本は成立したというのであった²⁾。

2) 上山春平『埋もれた巨像』（岩波書店 1977）

『梅原猛著作集（第一期）1巻 神々の流竄』（集英社 1981 ただし初出は季刊誌『すばる』創刊号 1971）

最近の義江明子著『県犬養橘宿禰三千代』では、つねに男性の視点で捕えられがちな歴史の動きを女性の視点から捕えなおして、歴史学にも新しい風が吹いているのだとあらためて目を覚まされる思いがした。義江氏は、県犬養橘宿禰三千代は天才政治家でもあった藤原不比等を「支えた」のではなく、不比等とともに二人三脚で新しい政治の局面をつくりだした人物としてとらえ直している³⁾。「妹の力」をいい（妹はイモウトではなく、長上の姉も含む）、日本の家の中での「家刀自」の智慧と裁量を重視するのは柳田国男の考え方でもあるが、県犬養橘宿禰三千代は、義江氏のいうように奈良時代の国家の家刀自であったといえるかもしれない。不比等が傑物であったとすれば、その配偶者であった三千代もまたそれに劣らず傑物だったのであろう。三千代が亡くなったのは天平五年（733）正月であるが、『続日本紀』には次のようにある。

庚戌（十一日）、内命婦正三位県犬養橘宿禰三千代薨じぬ。従四位下高安王らを遣して、喪事を監護らしむ。葬の儀を賜ふこと散一位に准ふ。命婦は皇后の母なり。

このときに正三位であったが、葬儀は散一位の位格で行われ、この年の十二月には従一位が贈られている。さらにその後、正一位を贈られ、「県犬養橘氏大夫人」の称号を与えられている。この薨去した日には特別な薨伝はないのだが、天平八年（736）十一月、三千代の美努王とのあいだの子である葛城王と佐為王とが王の身分を棄てて、母一代きりが名乗ることを許された橘姓を賜りたいと願い出た文章に次のようにある。

葛城が親母、贈従一位県犬養橘宿禰、上、浄御原朝廷を歴て、下、藤原大宮に逮ぶまで、君に事へて命を致し、孝を移して忠を為せり。夙夜勞を忘れ、累代力を竭せり。和銅元年十一月二十一日、国を挙げて大嘗に供奉る。二十五日、御宴あり。天皇、忠誠の至を誉めて杯に浮べる橘を賜ひき。勅して曰ひしく、「橘は菓子の上にして、人の好む所なり。柯は、霜雪を凌ぎて繁茂り、葉は寒暑を経て膨まず。珠玉と共に光に競ひ、金・銀に交りて逾美し。是を以て、汝の姓は橘宿禰を賜ふ」とのたまひき。

和銅元年（708）年の十一月、三千代は当時の天皇の元明から橘の姓を賜ったことになるが、それはこれまでの天武・持統・文武の三代によく仕えたことへの褒賞を意味していた。この詔の後の元明・元正・聖武にも仕えたわけだから、六代の天皇に仕えたことになる。伝説上の人物である武内宿禰は五代の天皇に仕えたというが、三千代の場合は六代の天皇に仕え、内侍司が正式にできるのは大宝律令以後だとしても、内侍的な役割で天皇のそば近く仕える宮人であったと考えられるから、つねに政権の中核にいて、二度目の夫である藤原不比

3) 義江明子『県犬養橘三千代』（吉川弘文館 2009）

職掌は（二）の屯倉の守衛説になるのだが、犬が狩猟犬としてよりも番犬として用いられたことを述べ、神社にはなぜ狛犬が置かれるのかまで、木堂・犬養毅の随筆を引用して述べていてはなほだおもしろい。この論文の中でイヌカイとミヤケとの関係を見捨てる例として九つを列挙した後で、黛氏は第十例、十一例として和泉の例を挙げている。

前に続けて第十例とすれば、それは和泉志日根郡の条に見える犬飼畑なる地名と茅渟県（または茅渟宮）との関係である。茅渟県は凡そ和泉国と一致すると見られ（宮は日根郡とされる）、かつこの県は屯倉に準じて皇室の直轄領と考えられるから、その領域内には犬飼畑なる地名の存したことは偶然ではあるまい。そればかりではない。和泉志泉南郡条にはまた河内川県犬養神祠のあったことが記されているので、茅渟県における犬養部は県犬養氏の管掌するところであったと考えられ、県犬養氏の県の意味も自ずから明らかになるのである。姓氏録によれば県犬養宿禰は左京に貫せられているが、本貫はここ和泉国であり、遡れば河内国の茅渟県であったと云える。

第十一例もその近辺である。和泉志泉南郡の条に「箕土路旧名犬飼」とあるが、泉南郡は和泉郡の南を割いて新設された郡で、したがってここもまた元来は茅渟県の域内とすることができる。和泉志によれば同郡内に三田の地名もあり、これもイヌカイとアガタとの関係を思わせる。また、この犬飼の地には橘諸兄の子孫と称する三宅氏が現に居住しているとのことで、これもまた橘氏→県犬養→ミヤケ・アガタと連想して行くと、元来イヌカイとアガタとに密接な関係があったことから生じた伝承ではなからうか。

黛氏がここに挙げる第十例および第十一例は、光明皇后の和泉との関連を説明するのに補強材料となるであろう。「あがた」の語源は明快そのもので、「我が田」であり、王家の田なのであろうが、屯倉がさらに発展して範囲を広げ、屯倉を中心にして設定された行政地域を「県（あがた）」と呼んだものと考えられる。県犬養という姓の県は、ここでは茅渟県の県そのものであると黛氏はいうのである。和泉市の隣の岸和田市の箕土路は行基が造った久米田池の近くにあるが、その旧地名は犬飼であったと、『泉州志』はいう。箕土路にはまた「河内川県犬養神祠」があって、それを「犬養堂」と人びとは称しているという。三田は御田の意味であり、要するに貴人の田であり、屯倉に通じることばであるが、この三田も箕土路とは久米田池をはさんだところにある。安宿媛についていうなら、和泉市域の坂本郷にかつては明日香部という地名もあったようである⁶⁾。実は久米田池および久米田寺についても、もちろん行基が主体になって勧進をして作ったとしても、橘諸兄の影が色濃くまわりついている。僧侶が国家に管理され、民衆への自由な布教が禁じられていた時代に、行基はあくまで庶民の中であって、禁を破ってまでその福祉をも兼ねた布教活動を行っていたのが、国家

6) 『日本歴史地名大系28 大阪府の地名Ⅱ』（平凡社）の「黒鳥村」の項に「坂本郷明日香里内の地」の売買之事が見える。

に取りこまれて「転向」するのは天平十二年（740）のことだと考えられる。房前・麻呂・武智麻呂・宇合の藤原四兄弟が立て続けに天然痘で死ぬのが天平九年（737）であり、その後の朝廷での実権は天然痘などはねのける頑健な身体をもった橘諸兄に転がり込んでくることになる。なにしろ疫病が猖獗を極める中でまともに朝廷に出仕できる公卿は彼しかいなかったのである。

「東大寺過去帳」なるものがある。東大寺二月堂のお水取りの期間の三月五日の実忠忌とクライマックスの十二日に読みあげられる、東大寺の創建と維持に尽力した人びとを記したものである。千数百年にもわたる歴大なもので、大工や鋳物師や樵や金掘り人夫たちについても記され、謎めいた「青衣の女人」が出てくることで有名なものである。それは次のように始まる⁷⁾。

大伽藍本願聖武皇帝	聖母皇太后宮
光明皇后	行基菩薩
本願孝謙天皇	不比等右大臣
諸兄左大臣	根本良弁僧正
当院本願実忠和尚	大仏開眼導師天竺菩提僧正……

諸兄と行基は同じ時期に歴史の表舞台に登場する。「過去帳」に藤原四兄弟の名前はないのだとあらためて考えさせられるが、東大寺の創建にかかわって行基は四番目、諸兄は七番目に名前が呼ばれることになる。聖母皇太后宮（宮子）と不比等が大仏開眼時にはすでに故人となっているとすれば、天皇・皇后の次にはこの二人の名前が続けて呼ばれることになる。この二人が時代とどう切り結びお互いにどうかかわったかについては、行基にゆかりの寺々をたどるときに改めて考えたいのだが、実をいうと、久米田寺の背後、あるいは境内の中といてもいいところに橘諸兄の墓がある。久米田池を築いたのは行基であり、その畔に隆池院、つまり久米田寺を造ったのも行基であることはあらためていうまでもない。ところが、久米田寺の本堂や開山堂（行基堂）を抜けて細い道を抜けて裏に抜けると、右手に垣根に囲まれ、盛り土をされた円墳があって、それは光明皇后の陵なのだという。その伝光明皇后陵と道を挟んで青々と水をたたえた濠があり、かなり大きな前方後円墳がある。宮内庁に管理されていれば立ち入り禁止で鬱蒼と木々が生い茂っているのだろうが、近所の人びとの散策の場、子どもたちのかっこうの遊び場となっているためか、禿げ山となっていて、実際に近づくと盛り土のボリュームをじかに確認することができる。その深い濠と高い盛り土を利用して室町時代には城塞として利用されたというが、お寺でいただいたパンフレットには航空写真が載っていて、それを見ると、久米田寺に参詣する人は本堂にお参りしながら、実はこ

7) 『東大寺お水取りの記録と研究』（小学館 1986）によるが、インターネットで原本の冒頭の写真を見ることができる。

の古墳にお参りしている格好になる。それを橘諸兄の墓だと云い伝えていることになる。奈良時代はもう前方後円墳の時代ではなく、これが諸兄の墓であるはずはないのだが、これをあえて諸兄の墓だとするのは深い意味があるように思われる。『大阪府全志』を引くと次のようにある。

橘諸兄塚は久米田寺背後の松林中にあり、東西九十間・南北三十五間・面積三千一百五十坪を有し、周囲には濠池断続して存す。中に円石の一碑あり、碑面に橘諸兄公塚の五字を刻せりと伝ふれども、磨滅して殆ど読むべからず。諸兄は難波皇子の曾孫美努王の子にして、初め葛城王といひ、後諸兄と改む。天平八年橘宿祢の姓を授けられ、同十五年従一位左大臣となり、大宰帥を兼ね、勝宝の初め正一位に進み、改めて朝臣の姓を授けられしが、同八年致仕して、宝字元年正月七十四歳を以て薨去す。其の此に葬られし縁由は詳ならざれども、久米田池を穿ち、久米田寺開創の大檀越たりし関係もあれば、其の功績を伝へんがために廟を建て、祭りしものならんか。



写真4 久米田寺裏の伝橘諸兄の墓



写真5 久米田寺裏の伝光明皇后陵

橘諸兄を「久米田池を穿ち、久米田寺開創の大檀越」というのも伝承になるが、この前方後円墳の濠に沿って左に歩いて行くと、今度はやや小さな円墳がある。先の光明皇后の陵よりも大きいのが、こちらは諸兄の夫人の墓だと伝えられている。

橘諸兄の墓については、京都府井手町にもあり、わたしはもうずいぶん前に、遠足のつもりでその界隈を歩きまわって、竹林の中のその墓に参ったことがある。諸兄は井手の左大臣ともいわれ、井手に別荘をもっていて、井手寺址も発掘されている。そこに墓があるのに何の不思議もないのだが、久米田池畔の前方後円墳がその墓だと言ひ伝え、この界隈に色濃く伝承を残すのはどうしてなのだろうか。久米田池からは上流になるが、岸和田市には葛城という地名が今も残っていて、そちらにも橘諸兄（葛城王）の伝承が残っている。津田川の上流の堰を諸兄堰というらしいのである。実際に歩きまわって見たものの、それをまだわたしは確認できていない。『大阪府全志』には次のようにいう。

諸兄堰といへるは津田川の上流にあり。捨石の如き石数個にて堰止め、両方に分水せるものにして、数百年を過ぐるも曾て緩みしことなく、伝へて橘諸兄の為せし所なりといふ。

犬養（箕土路）、三田、葛城と、久米田池をぐるりと囲むように県犬養（橘）氏にかかわる地名が残り、その中心に位置する久米田池畔には橘諸兄とその妻、さらには諸兄とは母を同じくする妹の光明皇后の墓もあるということになる。墓については後世の仮託に過ぎないとしても、どうやら県犬養（橘）氏とこの地方には深い関わりがあったようである。現在でも実家に帰って出産することは普通に行われている。光明皇后は実際に和泉で生まれたのかもしれない。母系制や母権制、あるいは母方居住の社会制度をあえてここで取り上げずとも、光明皇后伝説が母方の県犬養氏の本拠地に色濃く残るのはそれほど不思議なことではない。

光明皇后の母方の県犬養（橘）氏の本貫が和泉にあったと考え、もう一つ和泉に伝わる奇妙な伝承の説明が可能となる。和泉も最南端、紀州街道の大阪府と和歌山県の境になるのは孝子峠であるが、この下孝子の集落には橘逸勢とその女の妙沖の墓がある。ここでも『大阪府全志』を引くと、次のように書かれている。

橘逸勢及び妙沖の墓は下孝子畑の字あやめにあり。封土の高さ各二尺許にして、逸勢の墓域は十五坪・妙沖の墓域は二十二坪なり。文徳実録に依れば、妙沖は其の父逸勢の屍を負ひて京に帰りしと見ゆるも、里伝に依れば、妙沖は京に帰らずして直に此の地に來り、その屍を此に葬り、其の身も此の地に住し墓を守りて終わり、其の邸址は墓を距る二町程東方なるあやめ屋敷是れにして、あやめは妙沖の俗称なりしと。邸址は今松林となる。

承和九年（742）、嵯峨天皇が崩御すると、伴健岑と橘逸勢は謀叛を問われ、恒貞親王は皇太子を廃される。いわゆる承和の変である。藤原良房が妹の順子が仁明天皇とのあいだにもうけた道康親王（後の文徳天皇）を皇太子にするために謀って起こした陰謀であると考えられるが、空海・嵯峨天皇とともに三筆と称された橘逸勢もこのときに伊豆に流され、配流先におもむく途中の遠江で死んだ。その八年後には赦されて正五位を贈られているのだが、そのときに橘逸勢の伝記が記されている。『文徳実録』嘉祥三年（850）五月十五日の条である。

壬辰、流人橘朝臣逸勢に正五位下を追贈す。勅を遠江国に下し、本郷に帰葬せしむ。逸勢は右中弁従四位下入居の子なり。性たるや放誕、細節に拘らず。尤も隸書に妙なり。宮門の榜題、手迹見在す。延暦の季、聘唐使に随ひて入唐す。唐中の文人、呼びて橘秀才と為す。帰來の日、数官に歴事し、年老いて羸え病たるを以て静居して仕へず。承和九年、健伴岑の謀叛の事に連染して拷掠さるるも服さず、死を減じて伊豆国に配流す。

初め逸勢の配所に赴くや、一女あり、悲泣して歩きて従ふ。官兵の監送する者、之を叱りて去らしむ。女は昼は止まり、夜に行き、遂に相従ふを得る。逸勢は遠江国板築駅に到り、逆旅に終はる。女、攀号して哀を盡す。便ち駅下に葬むる。葬前に廬して屍を守りて去らず。乃ち落髪して尼となり、自ら妙沖と名づく。父の為に誓念し、晝夜に苦至す。行旅し過ぐる者、之が為に流涕す。帰葬を詔せらるるに及んで、女尼は屍を負ひて京に還る。時人之を異とし、称して孝女となす。

橘逸勢は最澄や空海とともに遣唐使の一行として中国に渡った。長安の都大路を闊歩して自由を謳歌し、中国の儒生たちとも積極的に交わったようである。帰国後、いくつかの官職を経たが、それほど出世することはなく、年老いて病をかこって隠退していたはずだったが、謀叛に連座して拷問を受け、屈服することがなく、死を減じて伊豆に流刑になった。流刑地におもむく途中の遠江の板築で死に、父を泣きながら追いかけてきた娘はそこに墓を作り、その前に廬を編んで尼となって父の墓を守った。逸勢の罪が赦されるにおよんで、娘は父の遺骸を背負って京都に還って来た、ということまでは正史の『文徳実録』にも書かれていることである。和泉地方の伝承では話はそこで終わらず、妙沖は都にとどまることなく、そのまま父親の遺骸とともに和泉地方に移り住んだのだということになる。本当にそうであったかどうかはともかく、やはり県犬養（橘）氏の縁故をたどって、和泉地方にこのような伝承が伝えられたと考えるのが妥当だと思われる。

祟りをなす霊は境界に置かれて、逆に邪鬼を祓う役目を負わされる。

菅原道真や平将門ほどの威力はなかったとしても、橘逸勢もやはり怨霊であった。京都の御所をはさんで南北に存在する上御霊・下御霊の両社は平安京に祟る、政治的には敗残の憂き目を見た人びとの怨霊を祭るが、橘逸勢もその中の一人に含まれる。承和の変があって、すぐに八年後には赦され、名誉回復がなされているというのは、その怨霊を考慮してのものなのか、「性たるや放誕、細節に拘らず」といった性格が災いして事件に巻き込まれたものなのか、あるいはもともとそれほどの罪はなかったものなのか、判断がつかねるところがある。実はこの「帰葬」の詔が出る十日ほど前に、橘逸勢には従妹に当たる女性が死んでいる。この女性が死んだことによって逸勢は赦されたのだと思われるが、逸勢の赦免はその女性の死を逸勢の怨霊の祟りによるものと考えた人びとが行ったのか、心やさしいその女性が死ぬ前にせめて従兄の遺骸の帰還だけでも赦されるようにと嘆願して行われたものだったのか、どちらだったのであろうか。

一日、わたしはこの橘逸勢と妙沖父娘の墓を訪ねていった。上孝子、下孝子を訪ねて探しまわったが、墓のありかがわからない。外に出ている人は少なく、上孝子にある交番にも巡査はいなかった。なにしろ「三筆」の一人なのだから、書道家たちの尊崇を集めて参拝者もあり、それなりには大切に管理されているのではないかと考えていたのだが、そうではなかった。探しあぐねて、なかば諦めて帰りかけていたところ、集落からはかなり離れて、街道筋



写真6 孝子峠の橘逸勢の墓



写真7 妙沖の墓

のモーターの裏側に、線路をはさむ形で、橘逸勢と妙沖の父娘の墓が冬枯れしたススキに隠れるようにしてあった。かつて境界には怨霊が祀られるとともに、遊女たちが集まって悪所が形成された。祝祭のような「性」もまた邪なるものを祓う旺盛な生の営みだったのだ。夜闇の街道をドライブする男女をそこだけは明るく華やかにネオンが照らし出して誘蛾燈のように誘いこむモーターと、その裏にひっそりと枯れススキにおおわれて眠る逸勢父娘の墓の対比に、古代・中世の民俗が現代にも発想の底流として生きているのが感じられて、妙に感動的ではあった。

【三人目の女性 檀林皇后橘嘉智子】

和泉国国分寺をめぐって、ここにもう一人、またもやゆかしくも臍長けた女性の姿が浮かび上がってくる。承和の変で謀叛人となった橘逸勢には従妹にあたることになるが、県犬養橘宿禰三千代の玄孫であり、嵯峨天皇の皇后となり、仁明天皇の母となった橘嘉智子である。「風容絶異，手は膝に過ぎ，髪は地に委がふ，見る者皆驚く」（『文徳実録』）とあるように、驚嘆すべき絶世の美人であった。この血筋には、三千代自身がやはり美しかったのであろうが、光り耀くような光明子を初めとして、尋常ならざる美しさの女性が登場する。奈良の法華寺の十一面観音像は光明皇后の面影を写すものだといわれるが、嘉智子を模したものだという説があった。この説はうべなえないが、近接した時代の美人の基準など似通ったものだし、ましてやもともと血がつながっていて同じ遺伝子をもっているとすれば、二人ともに同じような容姿であったのかもしれない。しかし、ここでは美人について喋々と述べたいわけではない。「クレオパトラの鼻が低ければ、歴史は変わっていたであろう」とパスカルがいったように、一人の女性の美醜が歴史とは無関係というわけではなく、むしろ歴史を動かす大

きなカギを握るものであったとしても。

先に述べたように、『続日本後記』によれば、安楽寺を和泉国国分寺とすることを申請して、講師や僧侶を置くことが許可されたのは承和六年（839）の五月三日のことである。このときの天皇は仁明天皇で、その母后は檀林皇后、すなわち橘嘉智子であった。嵯峨もまだ上皇として存命であり（薨去は承和九年）、空海はすでにいない（承和二年に遷化）。この時代の仏教政策には橘嘉智子の意志が大きく反映していると考えてもいい。聖武天皇の国分寺・国分尼寺の創建が、嘉智子とその美貌とともに性格をも受け継いでいるらしい光明皇后の意志によるものであったと同じように、嘉智子もまた寺々の存廃に大きくかかわっているらしく思われる。同年の六月の二十八日には次のような勅令が出ている。

丁丑、勅す、国分二寺、建立の遠くより、一は則ち名づけて金光明護国寺とし、一は則ち号して法華滅罪寺とす。先帝の救世利物の法、遠く不朽なるを伝ふる者なり。而るに頃年、僧寺安居の会にて独り最勝王経を講じ、尼寺滅罪の場にて法華妙典を説くことなし。設くる所の法蔵、用ゆるに同じからざる有り。是、忍びて行われず、恐らくは修善欠如せんか。宜しく五畿内七道の諸国、安居の会には、先づ僧寺において最勝王経を講じ、次に尼寺において法華経を講ぜしめ、願ふところの無二無三の勝理を国家に開示し、除災植福の大善を広く衆庶に被らせん、と。

聖武天皇と光明皇后が国分寺と国分尼寺を創建した当初から、国分寺は金光明護国寺とし、国分尼寺は法華滅罪寺とした。これは聖武天皇らの世の中を救い、人びとに利益する精神を久しく不朽たらしめようとするものである。しかるに最近では、国分寺での安居会で最勝王経の講読はおこなわれるものの、国分尼寺での法華経講読は行われていない。せっかく設置された寺院であるのに、同じように活用されていない。逼塞して行われないうままでは、善行を修めるのに欠けることになろう。そこで、五畿内と七道の諸国の国分寺と国分尼寺とにおいて、国分寺の安居会では最勝王経を講じ、国分尼寺では法華経を講じるように徹底して、本来の願のとおり、この世にまたとない優れた道理を広く国家に示し、災いを取り除き、福徳が植えつけられて、大いなる功徳が人びとにもたらされるようにしよう……。

天平からは百年が経って、国分寺と国分寺とは光明皇后の意図した通りには運営されなくなっている。国分寺では最勝王経が、国分尼寺では法華経がきちんと講じられなくてはならないのに、国分寺の最勝王経の講読はいちおうは行われているが、特に国分尼寺の方の法華経の講読が行われてはいない。『法華経』提婆達多品は女人成仏を説くことで有名である。しかし、そこでは女の人が女の姿のまま成仏できるという話ではない。いわゆる変成男子の話であり、八歳の龍女に男性器が生じ、その後成仏するという話であって、現在のフェミニズムからはやはり女性蔑視というしかないものだが、仏教経典の中では珍しく女性の救済の可能性を説くものとして『法華経』が尊重されてきたのは確かであり、光明皇后はそこに

魅かれて、自己の居住所を法華滅罪之寺とし、全国にも国分尼寺を創建させたものであったろう。おそらく檀林皇后が国分尼寺の立て直しを図ったのも同じ精神によるものといっているのではないか。法華八講は空海の師匠であった石淵の勤操が始めたと言われるが、盛んに行われるのは平安中期以降で、村上天皇が母親の藤原穩子の菩提を弔うために天曆九年（955）に行ったのが貴顕のあいだで行われた最初であるという。『源氏物語』賢木の巻で、藤壺は法華八講を四日間にわたって行い、その最後の日に人びとの哀しみの中で出家する。物語の中の非常に印象的な場面であり、藤壺の心にはさまざまな想いが去来したろうが、これまでの罪障を懺悔するとともに、不義の相手の源氏への想いを断ち切る契機としたのであろう。法華八講の主役が女性であるとは限らないし、女人成仏だけが強調されるわけでもないが、現世においても来世においてもすすがるものがない女性たちは自分たちを見捨てずに救済を説く『法華経』に傾斜しやすかったのは当然である。承和六年の国分寺・国分尼寺の立て直しの勅令には檀林皇后の意向が働いていると思われる。特に国分尼寺において法華経の講読を徹底するよというのは檀林皇后の強い働きかけだと見て間違いないのではないか。

しかし、国分寺の立て直しがそう簡単にはかどったわけでもない。同じ年の九月二十一日には次のような勅令が出ている。

己亥、勅す、聞くならく、神護景雲二年以還、諸国国分寺をして毎年正月八日より十四日に至るまで最勝王経を読み奉らしめ、吉祥悔過を修せしむ。不祥を消除し、国家を保安せんが為なり。而るに今、講読の師かならずしも其の人にあらず。僧尼懈怠して、周旋して法に乖き、国司検校するも、亦心存せず。徒に修福の名のみ有りて、すべて殊勝の利なし。此則ち緇素処を異にし、相監察せざるの致す所なり。宜しく国分寺に行ふを停め、序事にて之を修せしめん。自今以後、立てて恒例とせん。

神護景雲二年（768）以来、諸国の国分寺において正月八日から十四日に到るまで最勝王経が講じられることになっているが、その際、いっしょに吉祥悔過を行っていた。『金光明最勝王経』の中に「大吉祥天女品」あるいは「大吉祥天女増長財物品」がある。吉祥天女に向って悔過を行うことによって、衣食に満ち足り、寿命を延ばし、雨も降って穀物も実り、果物もたわわに実る、さまざまな不祥を除去して国家を保全することができるというわけである。薬師寺にある国宝「吉祥天女画像」など、この吉祥悔過のために使われたのであろうが、その豊かさとかあでやかな美しさに、ふとループルで見たアフロディテ像やウフィッチのポッティチェルリへの思いがよぎる。吉祥天女はギリシアの豊穡の女神であるアフロディテ（ヴィーナス）の仏教ヴァージョンだといっているかもしれない。ところが、吉祥悔過を行うのに適当な人がいず、僧尼たちも怠惰だし、国司たちも国分寺のことになどには意を払ってはいない。そんな状態では、名目ばかりは残って利益を得ることができない。これは役人と僧侶が別のところにおいて、お互いに監視していないからである。そこで、今後は国分寺で

の吉祥悔過はやめて、役所の方で行うことにして、それを恒例にしようということになる。

『延喜式』玄蕃寮を読むと、正月八日から十四日まで、部内の諸寺の僧を呼んで国庁で吉祥悔過を修せしめるとあり、そこには細字で注釈が施されていて、国分寺の僧はもっぱら最勝王経を読むことにして、この法にはかかわらないとしている。『延喜式』の規定は承和六年に出た勅令を受けてのものであると考えられる。吉祥悔過だけを国分寺から切り離し、国府で国分寺の僧以外の僧を呼んで行う意味がどこにあるのか、腑に落ちない感じがするが、これら仏教界への朝廷の容喙は、やはり橘嘉智子の意志を反映してのものであろう。この同じ時期、橘嘉智子は日本仏教史にもう一つ大きな足跡を記している。彼女は檀林皇后と呼ばれるが、それは京都の嵯峨に檀林寺を創ったからに他ならない。

『続日本後紀』承和三年閏五月に造檀林寺使主典の秦家継の名前があって、承和三年(836)には檀林寺はすでに着工されていたようである。嘉智子が崩御したのは嘉祥三年(850)五月四日のことであるが、その翌日の『文徳実録』の記事に、「后みずから泡幻を明らかにし、篤く仏理を信ず。一仁祠を建てて檀林寺と名づけ、比丘尼の律を持する者を遣りて寺家に入住せしむ。仁明天皇其の功德を助け、五百戸の封を施捨し、以て供養に充つ」とある。嘉智子がすでに創建していた寺に、その崩御の後、供養のために五百戸を封じたというのである。『元亨釈書』巻六の浄禅三の一に義空という僧侶の伝記がある。その中に檀林皇后が登場する。

釈の義空は唐国の人なり。塩官の齊安国師に事^{つか}ふ、室中推して上首となす。初め慧^{けい}萼^{がく}法師海^こを跨^こえて法^{もと}を覓^{もと}む。吾が皇太后橘氏、唐地の禅化^{した}を欽^{した}ひ金幣^ひを萼^{わた}に委^{わた}して有道の尊宿^{たくへい}を扣^{くわく}聘^{へい}したまふ。萼、杭州の靈池院^いに到^{いた}って国師に参^まじ、且太后の幣^ひを通^とず。国師感嗟^{かんさ}して之^{これ}を納^なる。萼曰く「我国は信根純熟して教法甚だ盛なり、然れども最上の禅宗は未だ伝ふることあらず。願はくは師が一枝の仏法を得て吾土宗門の根柢となさんも亦宜ならざらんや」と。国師、空^{うか}をして其請^{うか}に充^{うか}てしむ。空便ち萼と共に海に泛^{うか}んで大宰府に著^つく。萼先づ馳^ちせ奏^{そう}す。敕^しして空^{うか}を迎^{むか}へて京師東寺西院に館^{くわん}せしむ。皇帝の來^{らい}賚^し甚だ渥^{あつ}し。太后、檀林寺を創^{つく}して居^いせしめ、時時に道^{みち}を問^とひたまふ。官僚、指^{さし}受^うを得るもの多し、中散大夫藤公兄弟は其選^{せん}なり。萼、再び支那に入^いつて蘇州の開元寺の沙門契^{けい}元^{げん}に乞^こうて事^{こと}を勅^しして琬^{えん}琰^{たん}に刻^くみ、題^{だい}して「日本国首^{しゅ}伝^{でん}禅宗記」と曰^いふ、舶^{はく}に附^つして寄^よせ來^きる。故老^{こらう}伝^{でん}へ曰^いふ「碑^ひは羅城門^{らじやうもん}の側^{わき}に峙^たてり」と。門楹^{もんぎやう}の倒^たるゝや碑^ひも又碎^くけ、見^みに今東寺講堂東南の隅^{ぐも}に在^あり。

慧萼という僧には、たまたま佐賀県唐津の鏡神社にある高麗仏画である楊柳観音像について考えていて、高麗の忠宣王がしばしば江南に出かける理由を調べている過程で衝きあつたことがある。忠宣王は本国の高麗には帰^かりたがらず、王位を下^{くだ}りてまでも元の都に留^{とど}まりたがった。その間、「江浙に南遊^{なんゆう}し、宝陞山に至^{いた}りて還^{かへ}る」という遊覽^{ゆうらん}を行う。それが何を

意味するのか考えていたのだが、それは「遊覧」ではなく、実は「巡礼」だったのである。浙江省の寧波の沖の舟山列島は観音菩薩の聖地となるが、それというのも、それぞれ日本の慧萼が列島の中の一つの島に補陀落寺を創建したからなのである。その寺のある島が補陀山であり、廃位した忠宣王が行った「宝陀山」というのはまさしくそれであるに違いない。慧萼は観音像を得て日本に帰ろうとしたものの、観音像を載せた船が進もうとしない。そこで、慧萼は日本に帰ることを断念してその地に留まり補陀落寺を建てたのだという。忠宣王は観音信仰が嵩じて日本人の慧萼が創建した補陀落寺に巡礼していたのである。

この『元亨釈書』を読むと、慧萼が中国に留まったのは二度目の中国渡航でのことになるが、最初の渡航では、慧萼は橘嘉智子に渡された金品を懐中にして、日本にはまだいない禅僧を求めに行ったのである。それは聖武天皇（光明皇后）の時代に日本にはまだいない戒律の師を求めて栄叡と普照が唐に渡ったのに比べることができる。普照が苦難の末に鑑真和尚を連れ帰ったように、慧萼は齐安国師の一番弟子の義空をわが国に連れ帰った。大宰府に到着すると、慧萼は駆けるようにして急いで都に帰って報告した。天皇（仁明だと思われる）は命じて義空を都に迎え、まずは東寺の西院に住まわせたが、橘嘉智子が檀林寺を創建して住まわせることにして、彼女は義空にしばしば禅の道を尋ねた。官僚たちの中にも教えを請う者が多く、中でも藤原良房と良相の兄弟はその中の選良であった。この藤原北家を隆盛に導いた二人が禅を嗜んでいたということは、北家の専横ばかりに目が行きがちだが、着目している事実である。慧萼はふたたび中国に渡り、蘇州の開元寺の契元という沙門にこの事を文章にすることを頼んで玉石に刻ませた。慧萼はその「日本国に始めて禅宗を伝ふる記」という石碑を船に頼んで送り（自身は観音像とともに補陀落寺に留まったのである）、その石碑は羅生門の脇に建てられた。しかし、羅生門が倒壊するとともに、その石碑も砕けて、今は東寺の講堂の東南の隅にある。

『元亨釈書』では以上の本文に対して、贅を付す。それが注釈の形を取るようになる。はなはだ重要なことが書かれているので、それも引用してみよう。

贅に曰く、予碑刻を求むるに無し。乃ち東寺に如きて親ら之を摸印す。其碑破れて存するもの四片、大なるものは径二尺余、小なるものは尺に盈たず。額の左右には蟠龍偉如たり、頭角完からずと雖も鱗甲燦然たり。其文残欠して句読成らざるも、其字画の存せるもの亦甚だ鮮明なり。妙筆に非ずと雖も頗る楷正となす。予便ち四片のものを印して帰る。之を上にし之を下にし、之を左にし、之を右にし、百計剽閱して少しく明らむべし。世に言ふ、橘后密法を弘法に問ひたまふ。法、盛に之を称す。后曰はく「更に法の之に邁たるものありや。」法曰く「太唐に仏心宗あり、是れ達磨の伝へ来る所なり、熾に彼の地に行はる。空海又少しく之を聞くと雖も未だ之を究むるに暇あらざるのみ」と。茲に因つて后、萼をして靈地に扣問せしむと。今の碑は文句成らずと雖も而も斑斑或いは見ゆ、世の伝ふる所徒然ならず。

虎関師鍊はその碑文を模刻したものを探したがなかった。そこで東寺に行って自分で模刻しようとした。しかし、その石碑は碎けて残ったものは四片に過ぎなかった。大きなものは二尺ほどあったが、小さなものは一尺に満たない。額に龍が刻まれているものの、頭角は完全には残っていない。ただ鱗甲は燦然としている。文章は断片的で正確には読みとれないが、残っている文字は鮮明で、優れた筆跡ではないが、楷書できちんと書かれている。その四つの断片を模印して帰って、上にしたり、下にしたり、左にしたり、右にしたりして、あれやこれやと考えてなんとか文章の意味を汲みとることができた。世間で言い伝えている話がある。それは、檀林皇后が空海に真言密教について教えを乞うたときに、空海はさかんに真言密教の優越を称賛した。皇后はさらに尋ねた、もっと優れた仏法の教えはあるのだろうか、と。すると、空海は、中国には禅宗というものがあり、これは達磨がインドから伝来したもので、中国では隆盛している。自分はすこしは聞きかじったものの、それを深く探求する余裕がなかったと答える。そこで、禅宗を深く知りたいと考えた皇后は慧萼を中国に遣ったというのである。東寺の碑文は全文が明らかではないが断片的には理解できる。世間の伝承は嘘ではなかったと、虎関師鍊は結論する。

日本の禅宗の渡来については、普通にはまず筆頭に臨済宗をもたらした栄西の事跡を挙げる。しかし、実は義空を、あるいはむしろ義空を招いた橘嘉智子を挙げるべきなのである。しかも、伝承には、空海までもが登場する。中国での最新とされる真言密教をもたらして自信満々な空海に対して、もっと優れた教えはないのかと、橘嘉智子はほとんど詰問までしているかのようである。そこで空海は仕方なく禅宗の存在をもらしたというのである。『元亨釈書』の著者の虎関師鍊（1278～1346）と夢窓疎石（1275～1351）とは同時代の人であったから、夢窓疎石もまた日本の禅宗の歴史における橘嘉智子の役割をよく理解していた。彼の『夢中問答集』には「皇后宿習開発して、教外の宗旨を悟りましき」とあって、教わる以上の禅の悟りの境地に到ったというのである。この記事をあだや疎かにはすべきではない。承和の変がきっかけとなって橘氏は一気に衰退するとともに、後ろ盾もなく、禅も時代に先んじ過ぎたのか、檀林寺は衰えて廃寺さながらになったようだが、その敷地は後嵯峨院の龜山殿となり、さらに後には足利尊氏の手によって、政敵であった後醍醐天皇の菩提を弔うため、あるいは憤怒を抱きながら死んだであろう怨霊を鎮めるための天龍寺となる。夢窓疎石がその創建の資金を得るために天龍寺船のアイデアを出し、この寺の開山となることになる。そのときにそこが橘嘉智子の檀林寺の故地である、あるいはみずからはその檀林寺を再興するのだという意識はかならずともなったものと思われる。嘉智子は時代に先んじ過ぎて、加持祈祷の仏教の時代に禅は根付かなかったが、今や禅の時代である。天龍寺は京都五山の筆頭として威容を誇ることになるが、その広い天龍寺の境内のここかしこには橘嘉智子の造営した檀林寺の名残が残っているのではないかと思われる。

もう少し橘嘉智子につきあってみたい。日本の仏教にはやはり根底に女性蔑視があると考えざるをえない。『元亨釈書』に見えるのは高僧の伝記ばかりで、高邁な精神をもつ女性た

ちについてはほんのわずかししか触れない。『今昔物語』などの仏教説話集には信心深い庶民の女性の果報が語られることはあるが、キリスト教に見える聖女たちとは質が違っている。橋嘉智子はまちがいなく西洋なら列聖されてもいいはずの女性なのだが、その聖女性を日本の風土はみごとに屈折した語り口で伝えることになる。京都太秦の広隆寺の前に帷子の辻というところがある。その地名の語源として、たとえば『都名所図会』巻四には、

帷子辻 材木町の東にあり。上嵯峨・下嵯峨・太秦・常盤・広沢・愛宕等の別れ道なり。帷子の辻といふは檀林皇后の骸骨さが野に捨ししとき帷子の落散りし所なり。

とあり、また『擁州府志』に、

帷子辻 伝へ云ふ、檀林皇后遺勅に任せ、野葬し奉る時に、著御したまふ所の帷子斯処に残ると云ふ。

とある。

橋嘉智子は「薄葬」を望んだことが『続日本後記』にも記されている。それがここでは嵯峨野に棄てられた、あるいは野葬されたと伝わる。しかも、遺体を運ぶときにこの場所で彼女を覆っていた帷子が落ちたといい、京都に住む者にとっては馴染みの深い地名が中世的な色調を帯びるものになる。身体を覆っていた帷子が落ちたとすれば、彼女の死体は裸形になったわけで、いわゆる「九相図」は彼女の死体が帷子の辻で腐敗していく過程を描いたものだという暗示がすでにここではなされていることになる。



写真8 京都 帷子ノ辻

中世、天台三部の中の『摩訶止観』や蘇軾の「九相詩」をもととして、生きていたあいだは美しかった女性も、死ねばその体は青黒く変色し、内臓がまず腐敗してガスで膨張し、次には皮膚が破れて蛆虫が湧きだし、野犬や烏が腐肉を漁って、ついには骨だけになってしまう様子を九段階に分けて描いた「九相図」が盛んに描かれる。それは美しかったという評判の女性、たとえば小野小町を描いたものとされるわけだが、檀林皇后橘嘉智子を描いたものだとされるものもある⁸⁾。男性にとって女性に対する欲望は煩惱の中でも最たるものであり、それを断ちきるための「不浄観」を身につけるのを目的とした画である。女性の身体などただの腐肉に過ぎない、だから男たちよ、すみやかに煩惱を断て、というわけである。谷崎潤一郎の『少将滋幹の母』は若くて美しい妻を奪われた老人が夜毎に屋敷を抜け出しては京都の郊外に歩いて行く。子どもが不審に思っ、後をつけて行くと、老人は野に放られて腐敗していく女の死体をじっと見て、みずからが執着してやまない美しい妻の肉体を忘れようとしていたのである。谷崎らしく、そんなことはできるわけがないという結論になり、この小説はあくまでも美しい女性への喝仰に終わるのだが、檀林皇后はみずからすすんで不浄観の手立てとなるためにみずからの死体を捨てさせたというのである。単なる伝承に過ぎないが、仏教に帰依した女性の窮極の捨身の行といえなくもない。その九段階を経て腐敗し骸骨だけになって行くのが小野小町だとする人びとの想像力には美に対するルサンチマンを感じざるをえないが、それが檀林皇后の伝承になるとき、少しニュアンスが異なって来る。虎関師鍊や夢窓疎石のような禅の高僧が日本における禅者の嚆矢であると彼女を位置づけるとすれば、やはり檀林皇后自身の開悟の姿を現わしていることになる。

今は小さな本堂と庫裏だけを集落の奥に残すに過ぎない和泉国国分寺を論ずるのに、伝承をたどって、現代の歴史学がそれらを除去していくのとは逆に、加算に加算を重ねて、光明皇后、県犬養橘宿祢三千代、そして橘嘉智子について述べて来た。われわれの共同研究は伝承をも貴重な遺産としてとらえ直すことも意図していると考えてのものである。和泉国国分寺の前身の安楽寺は光明皇后の誕生地に創られ、しかも皇后は実は僧侶の小便を嘗めた雌鹿が懐胎して産んだ子だったという不思議な伝承の意味を探りながら、母親の三千代の出自である県犬養（橘）氏の本拠地は和泉国にあったのではないかと考えた。それは地名をもとに

8) 山本聡美・西山美香『九相図資料集成 死体の美術と文学』（岩田書院 2009年）

その他、次の書物には全体にかかわってお世話になっている。

『和泉市史紀要第11集 古代和泉郡の歴史的展開』（和泉市史編纂委員会 2006年3月）『和泉市の歴史6 和泉市の考古・古代・中世』（和泉市史編纂委員会 2013年）

なお、史籍の引用については、次の通りである。

『続日本紀』については岩波書店の『新日本古典文学大系』のシリーズのものを、丁寧に施されているルビは省略したところもある。

他の関わりのある六国史の記事については、『新訂増補 国史大系3 日本後紀・続日本後紀・文徳実録』（吉川弘文館）を用いて原漢文を筆者が読み下した。

『元亨釈書』については『国訳一切経 和漢撰述部 史伝部19 20 元亨釈書上・下』（大東出版社）を使用した。

考察したものであったが、橘諸兄の墓と伝える古墳が行基ゆかりの久米田寺の背後にはあり、同じく諸兄の築いたという堰堤があり、なぜか橘逸勢とその娘の伝説まで和泉にはあって、この和泉＝県犬養（橘）氏本拠地説はかなり蓋然性が高い。平安時代になってその橘氏から嵯峨天皇の後となった橘嘉智子が出るが、安楽寺が国分寺に昇格したのはこの嘉智子の時代であった。三千代一光明皇后一檀林皇后の血縁者は類まれな美貌を受け継ぐとともに、高い精神性をも受け継いだ。三千代については、法隆寺にある白鳳時代の仏教美術の逸品とっていい橘夫人念持仏を念頭にそう書くのだが、法隆寺の西円堂も彼女が創建したものであった。国分寺・国分尼寺の創建は聖武天皇の意志であるよりも光明皇后の意志であったというのは正史である『続日本紀』に書かれていることである。そして、日本最初の禅刹である檀林寺を造って禅の世界に悟入し、「九相図」の伝承を生む檀林皇后は仏者の窮極の姿を示している。有名な話だが、光明皇后自身も似通った捨身の行を行っている。今、わたくしの机の上には義空および檀林皇后について書くために開いた『元亨釈書』がそのままになっている。彼女の履歴を記すのには『続日本紀』の記事を使ったが、彼女の国分寺・国分尼寺の創建を発願する精神性について考えるために引用して、この稿を終わりたい。

東大寺の成るに及んで后以謂ひたまふらく、大像大殿皆既に備足せり、帝外に^{つと}勤めたまひ、我れ内に^{おも}営む、勝功鉅徳加ふべからざるなりと。且く^{しばら}託る^{ほこ}意あり。一夕閣裏の空中に声あつて曰く「后誇ることなかれ。妙触宣明、浴室^{ほこ}澣濯、其の功言ふべからざるのみ」と。

后怪み喜びたまひ、乃ち温室を建てて貴賤をして浴を取らしむ。后又誓つて曰はく「我親ら千人の^{のぞ}垢を去かん」と。君臣之を憚る。後の壮志沮むべからず、既にして九百九十九人を竟へたまふ。最後に一人あり、偏体疥癩にして臭気室に充つ。后、垢を去るに^{ほぼか}難る。又自ら思つて言さる、よう「今千数に満つ、豈に之を避けんや」と。忍へて背を^{こら}摺りたまふ。病人の言く「我れ悪病を受けて此の瘡を患ふること久し。適々良医あり教へて曰く「人をして膿を吸はしめば必ず除愈を得ん」と。而れども世上深悲の者無し、故に我が沉痾此に至れり。今后、無遮の悲濟を行じたまふ、又^{はなは}孔だ尊し。願はくは后、意あれや」と。后已むをことを得ずして瘡を^す吸ひ、膿を吐きて頂より踵に至るまで皆遍し。后病人に語つて曰はく「我汝が瘡を^す吮ふこと慎んで人に語ること勿れ」と。時に病人大光明を放つて告げて曰く「后、阿閼^{あしゅくぶつ}仏の^{のぞ}垢を去くこと又慎んで人に語ること勿れ」と。后驚いて之を視たまふに、妙相端巖にして光耀馥郁たり。忽然として見えず。后驚喜無量、其の地に就いて伽藍を構へ、阿閼寺と号さしめたまふ。

大学の初年度、習いたてのフランス語の勉強のために辞書と首っ引きでフローベルの『もてなしの聖ジュリアン (La Légende de Saint Julien l'Hospitalier)』を読んだ。狩りに明け暮れて獣たちを殺しまくり、両親までを殺してしまって回心をし、城を棄て妻を棄てて乞食の僧となり、川の渡し守となった聖ジュリアンの話である。物語の最後、死にかけた重篤のハ

ンセン氏病患者の身体をジュリアンは裸になって暖める。その重篤の患者が実はキリストであったという、光明皇后のこの湯屋の話と似た話である。フローベルは自分の故郷のルーアンの大聖堂のステンドガラスの絵物語を小説化したのだが、『ボヴァリー夫人』や『感情教育』を書いたフローベルが、子どものころから親しんだステンドガラスの物語をもとに芥川のような皮肉な批評や諷刺など一切加えずにコントに仕立てた、それと同じ程度の聖者への親しみと敬愛の情とをもって、われわれは光明皇后や檀林皇后を仰ぎ見てもいいのかもしれない。和泉国国分寺を調べながら、三人の女性たちに出遭うことができ、まことに幸せな時間を過ごすことができた。

(2015年3月 東大寺のお水取りが始まる日に)

(2015年3月27日受理)

Southern Osaka; The Cradle of Japanese Buddhism II Along the Makio River (1): Kokubunji

UMEYAMA Hideyuki

Today, many ancient temples or the ruins of ancient temples can still be found along the Makio River. In the small village of Kokubu, as the name suggests, there once was the grand temple of Kokubunji, which watched over the peace and prosperity of the Izumi region. The villagers of Kokubu have for a long time believed a very strange legend.

In the legend, a female deer conceived after licking a drop of urine of a hermit. The deer bore a baby who grew into a beautiful woman, who later was recommended to enter the Imperial Court. Eventually she became Empress. She built kokubunji Temple as a memorial to her mother and the place of her birth. In short, the tradition that's been passed down is that Empress Kōmyō was indeed the daughter of a deer.

This legend sounds so strange and incredible that we might be tempted to laugh it off. But there is a possibility that Empress Kōmyō was in fact born here in Izumi. Her mother, if not a deer, was of the Tachibana family, and has left her marks all around Izumi.

Behind Kumedera Temple is the large tomb of Tachibana no Moroe, one of the most important persons in the history of the Nara period. On the border of Osaka and Wakayama prefectures can be found the tomb of Tachibana no Hayanari, one of the greatest calligraphers, that was destroyed in a great rebellion.

Empress Danrin, also called Tachibana no Kachiko, was an ardent advocate of Buddhism and the first to import Zen into Japan. It was also she who renovated Kokubunji Temple during the Heian period. By researching the connections of the Tachibana family to the Izumi region, we hope to clarify the meaning of a legend that, on its surface, seems too unbelievable to be true.

[共同研究：大学教育における南大阪の地域文化資源の掘り起こし・保存・活用の研究]

日本仏教の揺籃の地としての南大阪（三）

槇尾川に沿って（Ⅱ）——明王院，禪寂寺——

梅 山 秀 幸

【明王院と禪寂寺】

槇尾川に沿って池田谷を下って行く。「槇尾街道」の街道筋には古くから住みつかれているのであろう家々があり，立派な古い門構えの家もある。納花を過ぎ，室堂を過ぎて，阪和道と泉北高速線の高架下をくぐって行くと，倉庫や飲食店が雑然と建てこんだ街に化して行く。川の両側の段丘にはすでにびっしりと住宅が立ち並ぶ。しかし，この界隈の変貌はそう古い以前からのことではないのかもしれない。かつて田畑があり，農家があった風景が想像される。そして，何物にも遮られることなく，明王院の方形の屋根の頂に宝珠をいただく姿が見えたはずであり，そしてそこから一キロほど下った戒外にはまた禪寂寺が森の中，あるいは竹林の中にたたずんでいたはずである。

明王院はいま，不動明王を本尊とする小さなお寺であるが，かつてはあたりの住宅地をすべて飲み込んで，今の敷地に十倍する境内の中に七堂伽藍を揃えた大きな寺院であったらしい。神仏習合の時代であったから，御霊社も含めて、『和泉名勝図絵』には次のように記す。

池田御霊祠 池田郷下村にあり。祭神，景行帝の皇子，大碓命なり。土人，天満天神と称ず。池田郷中の生土神也。今，明王院これを守る。[泉州志]に，池田寺の鎮守を書しは訛ならん。「姓氏録」曰，池田首は大碓命の後也。

池田寺 同所（池田郷下村）にあり。花供山と号す。真言宗。開基は僧正行基なり。金堂本尊，薬師仏，又十一面観音を安す。大同年中，弘法大師ここに止錫し給ひ，密宗の道場とし，薬師の七仏に准して，僧坊七院を建て，其外，伽藍巍然たり。南朝元年四月，和田和泉守正利，池田在城の時，山名陸奥守氏清，大軍を以て攻来り，上之原にて合戦す。其時の寇火に罹て，仏堂，什室，一時に灰燼となる。今，明王院一坊のみ存在す。池田氏の墳寺によつて，明德年中，再興に違ぶ。池田氏の末流は，今の万町村伏屋氏也とぞ。

瑠璃井，境内にあり，名泉なり。これを服すれば，疾病平癒の効験也とぞ。

行基や弘法大師といったビッグネームをここに出すのは、和泉地方は実際にこの二人の高僧が活躍した地域であり、なんらかの関係があっておかしくはないのだが、池田寺の開基はどうやらそれよりも古くさかのぼることができるようである。そして、「池田氏の墳寺」という見慣れない表現は、地域の豪族であった池田氏の氏寺であるということなのだろうが、寺院＝墳墓であり、土木工事の情熱が古墳築造から寺院建築に移りつつも、その情熱の基盤が祖先供養であることの実質を的確に言い表しているといえる。さらに付け加えれば、池田御霊祠は池田首の祖である大碓命を祀るという。大碓命といえば、小碓命、すなわち倭健命の双子のお兄さんだということになる。「御霊」が非命にして死んだ人間の霊であるとすれば、倭健に掎り殺された大碓命も確かに平穏な死に方をした人ではない。

また禅寂寺については、『和泉国細見』に、



明王院（池田寺）

坂本村、此处ニ善寂寺と云精舎有、行基菩薩開基、七堂伽藍ノ旧跡、境内千八百坪余。

とあり、『和泉国地誌』には、

禅寂寺、村の東方戒下にあり、真言宗高野山親王院末派、天平元年己巳行基創建

とあって、どちらもあまり詳しい由緒を載せない。ちなみに天平元年己巳というのは西暦では729年になる。『細見』の「境内千八百坪」からは広大な敷地を江戸時代までは有していたことがわかる。『大阪府全志』の郷莊村の項には次のようにある。

禅寂寺 禅寂寺は字戒下にあり、真言宗高野派親王院末にして阿弥陀如来を本尊とす。本尊は座像にして作者不詳優秀の彫刻なり。創立の年月は詳ならざれども、坂本近江守の自坊にして七堂伽藍備はり、附近に七ヶの末寺を存せしも、天正年中織田信長の兵火に罹りて共に焼失せしといふ。塔の台石は現存せり。今の堂宇は其の後の建築に係る。

安置仏に弥勒菩薩の木像あり、天正の兵火を免れたるものにして、俗に新左衛門様と称し、旱魃の時に像を背に負へば忽ち降雨あるも、之を負ひし者は必ず死すとの奇伝あり。境内は九百坪を有し、本堂・庫裏・鐘楼・納屋・門を存ず。外に大師堂ありて弘法太子の像を安置せり。

長い歴史のあいだには転変があり、今は真言宗末寺となり、現時点での本尊は阿弥陀如来であるという。坂本近江守の「自坊」であって、もとは七堂伽藍がそなわっていたが、織田信長の兵火によって伽藍が消失し、近辺にあった七つの末寺もことごとく消失したことを語る。塔の礎石だけが今に残っているというが、これは確かに今もある。また、なぜか「新左衛門様」と呼ばれる弥勒菩薩の木像は日照りの際に背負って降雨を祈願すると功験があったことをいい、逆にまた背負った者は必ず死んだという、慈悲の仏らしからぬ「奇伝」を載せる。



禅寂寺（坂本寺）の塔礎石

和泉地方の寺々の興廃を考えると、織田信長の天正五年（1577）の雑賀攻めは重大な事件であったに違いない。信長にとっては天敵とっていい本願寺勢力の後方支援をする紀州の仏教勢力を攻めるのが目的であったが、和泉地方で隆盛を誇っていた寺々は、紀州の雑賀に組して、織田信長に反した場合には、仮借なく攻め立てられ、焼かれて灰燼に帰したことになる。なにしろ、比叡山を焼き討ちし、長嶋の一向宗信徒を皆殺しにした、狂気じみた信長のことであり、凄惨を極めたものではなかったか。後の時代のこの地域の寺院の修復に、江戸幕府が豊臣家の財を消尽させるためであったと注釈がつくことになるが、豊臣秀頼が多大に貢献しているのは、その前代の織田信長の破壊のすさまじさを物語るものであるように思われる。ところが、『信長公記』を読むと、そのあたり、実にあっさりとは片づけられている。一つ一つの寺をどう殲滅していったかなど、事細かには記していない。信長軍にとっては紀伊を攻めるのが目的であって、和泉はその進軍の経路に過ぎず、敵対する勢力は鎧袖一触のありさまで薙ぎ倒していったように見える。

『信長公記』によると、天正四年（1576）の大晦日は、信長は岐阜で過ごして、翌五年の正月二日には安土に「帰陣」とある。常に戦時状態ということなのであろうか、安土城は陣なのである。正月十四日には京都の妙覚寺に行き、二月二日に、

「紀州雜賀内三緘^{みからみ}之者并根来寺杉之坊、御身方の色を立て申すべきの御請申に付て、則三十日御に御動座成さるべきの趣、御国々へ仰せ出さる」

とある。紀州の雜賀の中の三組（緘）の者と根来寺の杉之坊が、もともと内部抗争があったのか、信長方の切り崩しにあったのか、味方をしたいとやってきた。そこで信長は紀州攻めに踏み切り、諸国に動員をかけたということになる。

二月十三日、信長は京都を出て淀川を渡って八幡に陣取り、十四日には雨が降ったので八幡に滞留、十五日には八幡を発って若江に着陣する。そして、

「十六日、和泉の内、香庄御陣取り、国中の一揆、貝塚と云所、海手を拘へ、舟を引き付け、楯籠る。翌日、先陣の衆、貝塚取懸かり、攻干せらるべき所、夜に入、舟に取り乗り罷り退き候。少々退後の者、討ち捕え、頸を香庄へ持ち来たり、御目に懸く」

とある。信長は和泉の国に入って、まずは「香庄」に陣を敷いた。その後、佐野に、志立（信達）に、丹和（淡輪）に、とっとり（鳥取）にと陣を移すのだが、「香庄」などという地名は思い当たらない。二、三日のあいだ、『日本歴史地名大系』などを引いて思いあぐね、困惑していたのだが、なんとということはない。「香庄」すなわち郷莊なのであろう。郷莊という地名は、それこそ坂本郷莊であって、現在の和泉市坂本町一帯をさすわけだが、足利義満が寄進して以来、北野天満宮松梅院領の莊園であったのである。羽柴秀吉などの先遣隊がすでに焼き払い、抵抗勢力を追い散らしていたのであろうが、『信長公記』は坂本近江守の抵抗などに触れることもなく、信長はいともすんなりと坂本郷莊に入って陣取っているように見える。信長にとって坂本近江守など歯牙にもかかるとの人物だったというしかない。信長はどこに落ち着いたのであろうか。坂本寺が焼き払われていなかったのなら、宿泊には格好の場所のようにも思われるのだが、伝承の通りであれば、すでに坂本近江守を滅ぼした上、坂本寺もその七つの末寺もすっかり灰燼に帰っていて、やはり野外に幕を張ったということになるのだろうか。しかし、その場所はいくまでも香庄であり、坂本郷莊である。「海手」の貝塚で打ち取った頸を信長の御目に懸けるために香庄＝（坂本）郷莊に引き返して来るという位置関係もうなずけるし、ここからなら、また兵卒たちが「山手」に攻めかけるのにも好都合であろう。

【石田茂作博士の『飛鳥時代寺院址の研究』】

さて、石田茂作博士の『飛鳥時代寺院址の研究』は、法隆寺再建・非再建論争に決着をつけた若草伽藍の発見に関する論文「法隆寺若草伽藍址の発掘」を載せる。学生時代、それを読むために大学の図書館で閲覧し、それから十数年後にも、地域の図書館の貴重書の書庫から取り出してもらって読んだ記憶があるのだが、法隆寺および若草伽藍の他に特に興味をもつ

たわけではなく、どのような寺院が挙げられていたかの記憶もなかった。その『飛鳥時代寺院址の研究』が、槇尾川沿いにせいぜい1キロも離れずにある明王院（池田寺）と禪寂寺（坂本寺）とを載せている。石田茂作博士の研究はいわゆる「推古天皇四十六院」を推定する意図でなされていて、堂塔址と古瓦の調査から、現存する寺々もあるものの、もうすでに跡形もなく消え去ってしまった飛鳥時代の寺々を浮かび上がらせることにあった。その四十六院というのは、他でもない、『日本書紀』推古天皇三十二年（624）の九月の記事に出て来るものである。

秋九月の甲戌の朔丙子に、寺及び僧尼を校へて、具に其の寺の造れる縁、亦僧尼の入道ふ縁、及び度せる年月日を録す。是の時に当りて、寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、并て一千三百八十五人有り。

つまり、624年の9月3日、寺院と僧と尼とを調査して、寺々の草創の経緯、僧と尼の出家の経緯と出家の年月日を記録した。その結果、この時点で、寺院の数は46、僧が816人、尼が569人いたというのである。聖徳太子が亡くなったのは、『日本書紀』では推古天皇二十九年（621）二月五日とするが、『聖徳太子伝私記』法起寺塔婆土露盤銘には壬午年（622）二月二十二日としていて、最近では後者が取られることが多いようである。いずれにしろ、この寺院と僧尼の調査が行われたのは聖徳太子の死後、まもなくのことであったことになるが、このような調査を行った理由については実は前段がある。同年の四月のことである。

三十二年の夏四月の丙午の朔、戊申に、一の僧有りて、斧を執りて祖父を殴つ。時に天皇、聞きて大臣を召して、詔して曰はく、「夫れ出家せる者は頓に三宝に帰りて、具戒法を懐つ。何ぞ憐い忌むこと無くして、輒く悪逆なることを犯すべき。今朕聞く、僧有りて祖父を殴てり。故、悉に諸寺の僧尼を聚へて、推へ問へ。若し事実ならば、重く罪せむ」とのたまふ。是に、諸の僧尼を集へて推ふ。則ち悪逆せる僧及び諸僧尼を、並に罪せむとす。是に、百済の観勒僧、表上りて言さく、「夫れ仏法、西国より漢に至りて、三百歳を経て、乃ち伝へて百済国に至りて、僅に一百年になりぬ。然るに我が王、日本の天皇の賢哲を聞きて、仏像及び内典を貢上りて、未だ百歳にだも満らず。故、今の時に当りて、僧尼、未だ法律を習はぬを以て、輒く悪逆なることを犯す。是を以て、諸の僧尼、惶懼りて、所知知らず。仰ぎて願はくは、其れ悪逆せる者を除きて以外の僧尼をば、悉に赦して勿罪したまひそ。是大きな功德なり」とまうす。天皇、乃ち聴したまふ。戊午に、詔して曰はく、「夫れ道人も尚法を犯す。何を以てか俗人を誨へむ。故、今より已後、僧正・僧都を任して、仍僧尼を檢校すべし」とのたまふ。壬戌に、観勒僧を以て僧正とす。鞍部徳積を以て僧都とす。即日に、安曇連（名を闕せり）を以て法頭とす。

まず、4月3日に一人の僧侶が祖父を斧で殴ったというのだが、もちろんこの祖父は死んだのであろう。それを聞いた推古天皇は大臣たちをよんで、そもそも出家して戒を保つべき僧が長上を無みして悪逆の振る舞いをした、諸の寺々の内実を調査せよという命を發し、悪逆の僧ばかりではなく、諸の僧・尼をも摘發して罰しようとした。それに対して、百濟からの渡来僧である觀勒が上表する。仏法がインドから中国に渡って三百年を經過した後に、百濟に至った。それが百濟で百年を経て、我が王（百濟王）が日本の天皇に仏像と經典を贈ったが、それからまだ百年は経っていない。觀勒のこの百年単位の歴史の把握は至極に大雑把であるが、仏教が日本に渡来してまだわずかな期間しか経っていないので、僧尼たちは「法律」を習得してはず、悪逆を犯すのだと、觀勒は力説する。ここでいう「法律」が世俗の法律なのか、仏教の戒律なのか、判断しかねるところがある。まだ律令なるものは施行されていない。ただ長上を殺すというのは、法律以前、仏教の戒律以前の問題であり、推古天皇が問題にしているのは、僧尼の生活習慣に一般人から見ても尋常ならざるものがあつたということなのかもしれない。空をいい、融通無碍をいえば、世俗の倫理を逸脱してとらわれない振舞も可能になるかも知れないし、宗教的な精神性や悟達とはまったく無縁のただの悪僧もいたのかもしれない。諸の僧尼たちは推古天皇の詔を恐れたが、觀勒は悪逆を犯していない僧尼は除外して、罪を加えないこと、それが推古天皇にとっても大きな功德になるであろうと、続けて進言していることになる。觀勒の進言を受けて、4月13日、推古天皇は、仏道に入った人であっても法を犯すことがあるが、それでは世俗の人びとを教誨できるわけがない、今後は僧正・僧都を置き、僧尼の「檢校」を行うことにすると声明することになる。その四日後の17日、觀勒を僧正、鞍部徳積を僧都、そして安曇連某を法頭にそれぞれ任命したという。法頭という職掌はあっさりしないが、寺院の財産の管理を行うものとみられる。国家による僧・尼の統制と寺院の財政の管理が行われるようになったことになる。

九月の記事は、この四月からの「檢校」の結果の報告だったことになる。

【推古天皇四十六院】

推古天皇三十二年の「四十六院」は、国家が認め、その統制に入った四十六の寺院であることになる。石田茂作博士の『飛鳥時代寺院址の研究』の本来の意図は、その四十六院を比定することにあるが、石田博士はまず当時、存在した寺院として、『日本書紀』・『法隆寺資材帳』・『大安寺資材帳』に記載される次の十九の寺院を拾い上げる。

向原寺・吉野寺・大別王寺・石川精舎・大野丘北塔・坂田寺（金剛寺）・四天王寺・法興寺（元興寺）・豊浦寺（桜井寺）・斑鳩寺（法隆寺）・葛野秦寺（蜂岡寺）・百濟大寺・柁削寺・橘尼寺・中宮尼寺・池後尼寺・葛城尼寺・片岡僧寺・熊凝精舎

石田博士は、この十九の寺院が存在したことは確かだとした上で、しかし、「右十九箇所

が全部であったかと云ふに大いに然らず」とし、日本書紀の推古天皇三十二年の条の「四十六院」について、それがどこに存在したかを述べようとするのである。ただ、この「推古四十六院」をどこに比定するかについての研究は、実は石田博士自身に始まるのではなく、近代以前、はるか中世からすでにあつて、それは「聖徳太子建立四十六院説」という形で行われてきたことを、石田博士はまず述べる。「推古四十六院」なるものが出て来るのは推古三十二年であり、聖徳太子が死んだのが推古三十年、ないしは二十九年であるから、すべてが聖徳太子の建立とすることはできないにしても、聖徳太子の時代にすでにあつた寺とするのに無理があるわけではなく、これらを聖徳太子ゆかりの寺とする発想はごく自然であるといえるかもしれない。

「聖徳太子建立四十六院説」の最初のもは法隆寺学問僧の顕真が撰述した『聖徳太子伝私記』別名『古今日録抄』の記載であり、次のようになる。

1 符神寺（駿河国嶽上在之）、2 阿弥陀院（信乃国後名善光寺本名亦云百濟寺）、3 四天王寺（撰津国玉造岸上立之、本天王寺合戦願寺也、此所被移立新天王寺也）敬田院（金堂名也）・悲田院・施薬院・寮病院（以上四ヶ寺今天王子）、4 茨田寺（河内国、或本不入）、5 菅田寺（同国、此入不入異議在之）、6 太平寺（同国、推古天皇治天下立之）、7 御廟寺（同国、名転法輪寺、或科長寺、或石河寺）、8 法隆学問寺（大和国平群郡斑鳩郷立之、此寺有七号、其中此南門名也）来立寺（中門也）・鳥路寺（経蔵也）・七徳寺（金堂也）・宝龍寺（鎮守也）・聖国寺（講堂也）・往生所寺（塔婆也）、9 上宮王院（斑鳩宮御夢殿也）、10 元興寺（同国、此寺有四寺、此者南門名也、中門亦此内也）飛鳥寺（西門也、金堂）・法万寺（東門也、塔婆也）・法興寺（北門也、講堂食堂也）此寺僧法興寺、本元興寺也、11 中宮寺（同国、斑鳩尼寺、此寺比丘尼法興寺也、穴穂皇女宮所也、太子御母也）、12 法起寺（同所、亦云池後寺、亦云岡本寺）、13 妙安寺、14 菩提寺（同国、橘寺、橘樹也）、15 定林寺、16 葛城寺（同国）、17 熊凝寺（同国平群郡額部郷額田寺也□□推古天皇御願今大安寺之本寺也）、18 金剛寺（同国 江州）、19 観音寺（同也）、20 散寺（事由、在別所）、21 味摩寺（後云瀾満寺）、22 勝善寺（同国、蒲生郡）、23 日向寺（大和国 或本无□滅也）、24 般若寺（同国、或本不入）、25 大官寺（大和国高市郡、或本不入）、26 妙教寺（同）、27 坂田寺（同国、金剛尼寺也）、28 豊浦寺（同国）、29 太子寺（美濃国、山背大兄懐胎之時為祈請立之）、30 百濟寺（撰津国、天王寺東面在之）、31 当麻寺（太子舍弟建立蒙太子命立之、用明天皇聚葛木当麻倉首名比里子女子伊比古郎女所生之王子麻呂古王也）、32 久米寺（用明王子太子舍弟同父一腹王子也依于太子命所立也。已上二箇寺大和国在之）、33 武佐寺（近江国、或云長光寺^{タケノカワツナ}武河綱修造之）、34 瓦寺（同国、天王寺瓦作所也、瓦山在之、本仏千手観音也）、35 懐堂（近江国馬屋原建之、妃懐妊之時寺也云々）、36 山田寺（大和国橘京建之、山田大臣造畢）、37 施鹿園院（法隆寺北山在之）、38 野中寺（河内国蘇我大臣造）、39 四天王寺（出羽国秋田城在之、御印半令置給□半者津国天王寺在之）

四十六院を探そうとしながらも、顕真は三十九院しか挙げられなかったことになるが、これをもとに『私註抄』では、14 菩提寺、9 上宮王院、35 懷堂の三寺を削除し、新たに比蘇寺、広隆寺、六角堂、長林寺、信貴山、真福寺、放光寺、蒲生寺、石塔寺、阿弥陀寺、西安寺、牛臥寺の十二寺を加えて、計四十八寺院を挙げる。さらに、『法空抄』では、『古今目録抄』から、9 上宮王院、24 般若寺、36 山田寺、5 菅田寺、7 御廟寺、30 百濟寺、18 金剛寺、29 太子寺、2 阿弥陀院の九寺を削除し、額田寺、牛臥寺、放光寺、西安寺、弘導寺、比蘇寺、龍門寺、大窪寺、檜前寺、広隆寺、六角堂、願成寺、蒲生寺、近江阿弥陀寺、近江般若寺、百濟寺の十六寺を加えて四十六に数字を合わせている。また『太子伝見聞記』（『重懷抄』）では、『法空抄』から法起寺、久米寺を削除して、転法輪寺（御廟寺）と法林寺を入れる。さらには『聖徳太子伝暦要解』（『松誉抄』）などにも四十六院の比定があって、それぞれが異なっている。

これらの書物を通して、和泉国の寺は名前が出て来ることはない。かつては和泉国そのものがなかったとしても、河内国で上がるのが、『古今目録抄』と『私註抄』では、野中寺、茨田寺、菅田寺、大平寺、御廟寺の五寺、『法空抄』では菅田寺と御廟寺とが削られて三寺のみであり、『重懷抄』と『松誉抄』では転法輪寺が加わって四寺となるが、いずれにしろ、これらの寺々は和泉国とは関係がない。

石田茂作博士の『飛鳥時代寺院址の研究』では、推古天皇の時代に四十六箇寺院が存在しているという『日本書紀』の確かな情報がありながらも、具体的に確実性のあるものは、文献の上からは十九箇寺以上にすることはできないとし、しかし、「立場を換へて、考古学的に遺物遺蹟の研究によるときは、文献の欠を補つて、更に多数の飛鳥時代建立寺院を確知し得る便宜を持つ」として、瓦と礎石とによる考古学的な研究を提唱することになる。礎石の位置から伽藍配置を考え、四天王寺式、法隆寺式、法起寺式をまずこの時代の寺院址と考え、さらに瓦の重要性を次のように述べる。

「就中瓦は我国へは仏教の伝来につれて輸入せられ、其の使用も多く寺院に限られたらしく、伊勢大神宮の忌詞にも『かはらぶき』の語を以つて寺の代用語となされてゐた位である。従つて飛鳥時代古瓦の出土するところは飛鳥時代寺院址であらうとの推定も、此の時代に於いては先づ可能のやうである」

まず文献で存在したことの確知される十九箇寺のみから発見され、その後の創建寺院からは絶対に出ることのない瓦を飛鳥時代の瓦の標準とする。豊浦寺、飛鳥寺、法隆寺などから発見された「素弁蓮華文鐙瓦」なるものがそれであるが、それをもとに「四十六院」に一度でも擬せられた個所をひとつひとつ調べ、七十五箇所を実地に踏査したうえで飛鳥時代の寺院址とできるものは次の四十六寺院であると、石田博士は結論している。

大和国 飛鳥寺 豊浦寺 奥山久米寺 坂田寺 橘寺
立部寺 軽寺 大窪寺 和田廢寺 田中廢寺

日向寺 法隆寺 中宮寺 法起寺 法輪寺
 熊凝寺 平群寺 片岡王寺 西安寺 長林寺
 百濟大寺 巨勢寺 比曾寺 横井廃寺 豊田廃寺
 山城国 広隆寺 八坂寺 白梅廃寺 高麗寺
 河内国 西琳寺 新堂廃寺 野中寺 衣縫廃寺 大縣廃寺
 和泉国 海会寺 禅寂寺 池田寺 上代観音寺
 摂津国 四天王寺 堂ヶ芝廃寺 猪名寺
 伊賀国 三田廃寺
 備中国 秦原寺
 伊予国 湯之町廃寺 法安寺
 豊前国 法鏡寺

海会寺は阪南の方に外れるが、上代観音寺は槇尾川沿いとはいえなくても、禅寂寺、池田寺からさほど離れていないところにある。いずれにしても、和泉国からは四つのお寺が挙げられていることになる。

個別の寺院について、石田博士の当時としては最も緻密とっていい考証がなされている。池田寺の調査結果、まずその伽藍配置について、石田博士は、

「当寺の伽藍配置に於いて、塔と金堂とを東西に対せしめ、その中間南方に参道を作る。法隆寺又は法起寺式配置を想像させるものではあるまいか」

とする。南門を入れて右（東）に金堂、左（西）に塔をもつ法隆寺式か、逆に右（東）に塔、左（西）に金堂をもつ法起寺式か、そのどちらかであるということであり、門—塔—金堂が一直線に並ぶ四天王寺式ではないということになる。

そして、石田博士は池田寺址発見の古瓦について、知りえた限りで十四種であるとし、蓮花文や宝相花文の鏡瓦、唐草文の字瓦、鬼面の鬼瓦などを挙げて、その調査の結果、

「当寺の草創に関しては、行基僧正の開基となす説があるけれども、発掘古瓦の実際より察するに、其の創建は行基時代より更に古く、少くとも飛鳥時代末期を下るものでは無いと思はれる」

として、さらに次のように結論する。

「凡そ池田の地は、姓氏録によれば皇別池田首の住居したところと云ふ。よつて思ふに、池田寺はこの池田首一族に関係をもつ、所謂池田氏の氏寺と云ふが如きものでは無かつたろうか」

池田寺のそばには池田御霊祠があり、祭神は大碓命であると、『和泉国名所図会』には記載されていた。池田氏については、確かに『新撰姓氏録』和泉皇別にあり、「池田首、景行天皇皇子大碓命の後也。日本紀漏る」と見えるものである。ただ、ここに「日本紀漏る」とあるように、大碓命の後裔について『日本書紀』には記載が漏れている。『古事記』の方で

は、大碓命の後として守君、大田君、島田君を載せ、もともとは父の景行天皇に召されたのをみずから婚して、弟の小碓命（倭建命）に殺されるきっかけになった、美濃の大根王の娘の兄比売から美濃の宇泥須和気の祖、弟比売から牟宜都君の祖が出ているとするだけである。しかし、『新撰姓氏録』には根拠があって池田首を大碓命の後としたのであろう。古くから池田郷にあって段丘の灌漑を行い田畑の開墾を主導して勢力を張った家であったと思われるが、『古事記』・『日本書紀』に目立った活躍の跡を残してはいるわけではない。

和泉市坂本の戒外に禅寂寺はあるわけだが、寺の外を戒外といったのだとすれば、あるいは寺そのものは戒内というべきかもしれない。しかし「戒下」とする表記もあり、戒の下にある地として解釈することもできる。

ここもまた明王院と同じく、現在は一院を残すに過ぎないが、石田茂作博士は西側の塔址、東側の金堂址、その間の道を通って、今の禅寂寺の手前にあった講堂址、塔址のさらに西と金堂址のさらに東に平行する回廊址、講堂址からまっすぐ南に位置する中門址、それらの存在を指摘して、

「その配置は法隆寺式のそれと規を一にするものと云ふべく、唯その異なるところは彼に比して幾らか規模の狭少なる事である」

としている。東と西にある回廊址の距離が二百尺であることから、その規模は法輪寺・定林寺・法起寺などと同規模であったと、石田博士は推測している。さらにこの地で発見された古瓦、鐙瓦十一種、宇瓦八種の調査の結果も加えて、この寺の草創の時期について、

「其の草創に関する記録として従来知られてゐるものには、和泉誌、同細見記、別本泉州記の諸書があるが、それらは何れも行基の開創としてゐる。しかし、伽藍の配置が法隆寺式であり、発掘古瓦の様式にもこれにふさはしきものゝある事は、文献の記載がないとは云へ、考古学的立場に於いて飛鳥時代の建立である事を否むわけにはゆかぬ」

とされていて、その発願はやはりこの地の豪族であった坂本氏であり、この寺が坂本氏の氏寺としての性格をもっていたことを指摘しているのである。

坂本氏については、『新姓氏録』に、

坂本朝臣 紀朝臣同祖、武内宿禰男紀角宿禰之後也、男白城宿禰三世孫建日臣、因居賜姓坂本臣

とある。紀朝臣と同祖で、武内宿禰を始祖にいただき、この和泉の坂本を本拠としたことから「坂本」氏を賜ったという。禅寂寺の前身であった坂本廢寺はこの坂本氏の氏寺であったと考えて差支えはないであろう。思い出されるのは、『日本書紀』の記事である。いよいよ、崇仏派と廢仏派とのあいだの宗教戦争の戦端が斬って落とされ、崇仏派の頭目である蘇我馬子が同志たちを糾合する。

秋七月に、蘇我馬子宿禰大臣、諸皇子と群臣とに勸めて、物部守屋大連を滅ぼさむことを謀る。泊瀬部皇子・竹田皇子・厩戸皇子・難波皇子・春日皇子・蘇我馬子宿禰大臣・紀男麻呂宿禰・巨勢臣比良夫・膳臣賀陀夫・葛城臣烏那羅、俱に軍旅を率て、進みて大連を討つ。大伴連嚙・阿倍臣人・平群臣神手・坂本臣糠手・春日臣（名字を闕せり）、俱に軍兵を率て、志紀郡より、渋河の家に到る。

崇仏派の軍勢が物部守屋の屋敷に殺到することになるが、その中に坂本臣糠手という人物が現れる。これが当時の坂本氏の中心人物と考えていいであろう。物部守屋は稲城を築いて私奴の先頭に立って敵軍を迎え撃つが、その奮戦も及ばず、迹見首赤一檣の矢に射落とされて死んでしまう。この戦が終息したあと、蘇我氏は法興寺を建て、聖徳太子は四天王寺を建てることになるが、それに続いて、推古天皇二年には次のような詔が出る。

二年の春二月の丙寅の朔に、皇太子及び大臣に詔して、三宝を興し榮えしむ。是の時に、諸臣連等、各君親の恩の為に、競ひて仏舎を造る。即ち是を寺と謂ふ。

つまり、仏教崇拜を奨励する詔が出て、多くの臣下たちが、君と親の恩に報いるために仏舎を建造したというのである。蘇我馬子と聖徳太子の旗下に集まった諸氏はこのときに寺を造ったと考えられる。とすれば、禅寂寺の前身の坂本廃寺はこのときに建てられたものと考えていいのではないか。

【坂本寺の古さ】

石田茂作博士の『飛鳥時代寺院址の研究』の所論を踏まえ、『日本書紀』を読んでいけば、上のような結論に容易にたどりつく。しかし、石田博士の「推古四十六院」は今では見直されている。戦後、各地で瓦は多量に出土し、その編年分析ははなはだ緻密になされるようになった。石田博士自身、推古三十二年（624）の四十六院を問題にしながら、その「飛鳥時代」は大化の改新（645）までを含むし、若草伽藍の発見を論じていながらも、現在の法隆寺式伽藍配置を飛鳥時代の標準とされている矛盾も見られる。

2003年3月に、帝塚山大学において、「推古朝の四十六か寺をめぐる」と銘打ってシンポジウムが開催された。その報告書を手にしてみると、

発表1 榮原永遠男氏「推古朝の仏教政策」

発表2 花谷浩氏「大和の寺々」

発表3 大脇潔氏「摂河泉と西国の寺々」

発表4 中島正「山背・近江と東国の寺々」

討論 司会 森郁夫氏

という次第で、まず榮原氏が文献史学の立場から発表をされ、花谷、大脇、中島の三氏が

考古学の立場からそれぞれの分担地域で推古朝四十六院に比定していい寺院、あるいは比定できかねる寺院をあげられている。発表3において、大脇潔氏は、

「和泉国では、小松里廃寺、秦廃寺、地藏堂廃寺、堀遺跡などといったところから、飛鳥の豊浦寺や和田廃寺に類例がある瓦が出ています。お寺としての遺構、金堂や塔などがはっきりわかっているところは、まだないみたいです。出てまいります瓦も非常に数が少ない。しかもこういう瓦を見てみますと、確かに飛鳥の豊浦寺などの瓦に似ていますけれども、ちょっと時代が下がるようです」

と発言されている。現在では、池田寺も坂本寺も上代観音寺も海会寺も問題にもならないようなのである。最後の討論において、堺市の近藤氏（このシンポジウムの記録には正確に名が記されていない）も次のように付け加えている。

「…小松寺廃寺、秦廃寺、地藏堂廃寺、堀遺跡。岸和田市から貝塚市にかけての遺跡ですが、これらの遺跡は、お寺の遺構というのが全くはっきりしておらず、唯一、2つ目の秦廃寺がお寺になってもいいかなという程度です。

地藏堂廃寺などは特に、平安時代後期が寺院の中心の時期になりまして、本日の飛鳥時代の瓦というのは、ぼろっと偶然に出たような感じの出方です。実際にここにお寺があったかどうかというのは、非常に難しいと考えております。

それで、実際の瓦を見てみますと、いまお話しした秦廃寺は、飛鳥の豊浦寺と非常によく似た紋様の瓦を使っているのですが、やや紋様が退化しているような感じを受けます。推古三十二年に入ってくるというのは、時期的にも少し難しいと考えております」

つまり、石田茂作博士は、明王院（池田寺）、禅寂寺（坂本寺）、上代観音寺、海会寺の四か寺を「推古朝四十六院」として数えられたが、最近ではこれらのお寺を推古朝に遡らせることには否定的で、あえて問題にもされないことがないし、また、他の小松寺廃寺、秦廃寺、地藏堂廃寺、堀遺跡についても、四十六院には入れられないという見解を、大脇氏も近藤氏も共有されているようである。石田博士が一つの根拠として挙げられている、池田寺・坂本寺から出てきた「素弁蓮華文鏡瓦」では十分ではないということになるのであろうが、この考古学的な知見は尊重するとしても、文献的には、池田寺および坂本寺を飛鳥時代の寺とするのはさほど見当外れではないように思われる。

この時代の氏族たちの動向として、先の『日本書紀』の記事は尊重されねばならない。用明二年（587）、崇仏派が勝利し、蘇我氏は法興寺を建て、聖徳太子は守屋の奴や土地をもとに四天王寺を建て、推古二年（594）、仏教崇拝を奨励する詔が聖徳太子と蘇我馬子に向けて出されて、仏教の興隆が命じられた。それを受けて、多くの臣下たちが、「各君親の恩の為に、競ひて仏舎を造る」とある。蘇我馬子と聖徳太子の旗下に集まった諸氏はこのときに寺を造ったと考えるのはごく自然である。禅寂寺の前身の坂本廃寺はこのときに建てられたと考えるのは自然である。

確かに瓦は残るので、考古学では調査の手掛かりになるのは当然である。石田茂作博士は

礎石の存在とともに瓦を寺院遺跡の決定のための一つ的手段とされた。『飛鳥時代寺院址の研究』の学界への貢献は計り知れないほど大きい。しかし、瓦は絶対的な指標となりうるものなのであろうか。京都にはおびただしい数の寺院があるが、実は京都に現存する最古の寺院建築である千本釈迦堂は瓦葺ではない。船岡山近くに住んでいた私は朝夕に窓からその檜皮葺の屋根を見ながら過ごした時期がある。他にも私の記憶には、愛知県の吉良で見た檜皮葺の金蓮寺弥陀堂の美しさが刻み付けられている。また、九州の球磨川を遡って、人吉盆地の奥の方、上相良氏の菩提寺だったという青蓮寺や、さらに古いとされる城泉寺の檜皮葺の堂舎も実に清楚で美しいと感じた記憶が残っている。これらは鎌倉時代のものだが、建築当時のまま現在に残る寺院建築としては最も古い時代に属する寺々ではあるまいか。推古天皇の詔を受けて、各氏族が作った仏舎=瓦葺と考える必要はないはずである。瓦は十分条件であるに違いないが、必要条件であるとはいえない。前述の帝塚山大学で行われたシンポジウムでの討論は由緒正しく美しい瓦の発見に終始しているようである。瓦の専門家たちによる議論なのだから、当然といえば、当然なのではあるが。

坂本臣糠手は推古天皇の時代に重用されている。たとえば、推古天皇九年（601）に、

三月の甲申の朔戊子に、大伴連嚙を高麗に遣し、坂本臣糠手を百済に遣して、詔して曰はく、「急に任那を救へ」とのたまふ。

とあって、滅びた任那の回復のために、高麗には大伴連嚙、百済には坂本臣糠手を派遣して、援軍を要請した。翌十年には、大和朝廷では新羅を攻めるために二万五千もの遠征軍を組織していて、高句麗および百済とともに、任那回復のために新羅を討とうと謀っていた。結局、この朝鮮半島への遠征は総司令官の久米皇子が筑紫まで行って病死して、代わりの当麻皇子も播磨までは行ったものの、同行した妻の舎人皇女が死んでしまって、引き返してしまったために、遠征そのものが取りやめになった。総司令官の都合で、戦争という国家的な事業が中止されたわけだが、坂本臣糠手の百済への派遣はまったく徒労だったことになる。しかし、仏教の先進国に行ってなにがしかの知見をもって帰国したのではなかったか。新羅の方では法興王（在位514～540）・真興王（同540～576）というみずからも王位を棄てて僧になったといわれる熱烈な仏教信者の王が二代続けて現れた後であり、百済の方でも法王（同599～600）が出る。この諱の「法」ももちろん仏法を意味する。聖徳太子もその伝記が『上宮聖徳法王帝説』とあるようにまさしく「法王」であった。

『三国遺事』には次のような記述がある。

百済の第二十九法王の諱は宣であるが、あるいは孝順ともいう。開皇（隋の文帝の年号）十年己未（599）に即位した。この年の九月に命令を下して、殺生を禁じた。民家で飼っている鷹・鷗はやぶさ類を放ち、漁獵の器具も焼かせるなど、一切を禁止してしまった。

明年庚申（600）に、三十人の新人僧をおいた。当時の都であった泗泚（泚）城（今の扶餘）に、王興寺を創建するために、敷地をならず途中で（王が）世を去った。武王が即位して、父君がはじめられた事業を受けつぎ、数紀（一紀は十二年）をへて落成（武王三十五年・634）した。その寺をまた弥勒寺と名づく。……

讚にこういつている。

「獸物類を寛恕する王の詔、その恩恵は千丘に達し、恩沢は豚魚にまであまねく、四海（みな）仁たり、聖君の下世（死去）を辱しむることなかれ、（法王のおられる）上界の兜率天、正に芳春なり」

新羅の法興王・真興王にしろ、この百済の法王にしろ、仏者としての生き方のモデルとなったのは梁の武帝（在位502～549）であったろう。法王の在位は一年に過ぎなかったものの、一切の殺生を禁じ、三十人の僧を度し、王興寺の建立を始める。そして、その子の武王（在位600～641）が父の遺志を継ぐことになるというのだが、この武王については同じく『三国遺事』におもしろい伝承を載せる。武王は一人の寡婦が池の竜と通じて生まれた子どもだというのである。その子どもはいつも薯を掘って売って暮らしを立てていたので、薯童（マトン）といった。新羅の真平王の王女・善花が美しいと聞いて童謡を作り、たくみに謀って結婚したが、薯堀りのおかげで金塊のありかを知っていて、百済の王位に即くこともできた。真平王の援助も得て、池を埋めて弥勒寺を建てたというのである。この弥勒寺と扶餘城に築いたという王興寺を同じものとするのはやや無理があるのだが、所伝の誤りで同一の寺とする考えもある。

私は1988年および1996年の二度、益山郊外の弥勒寺遺跡を訪れたことがある。今では補修が進んで風景はずいぶん変わっているに違いないが、畑の中に、日本では神南備山とでもい



弥勒寺址（韓国）

いたくなるような後山を背景に大きな六層の石塔一基だけが立っていた。もと七層であったらしいし、完全な形を残しているわけではなく、また近づけば、コンクリートで補修された部分も目に付いたが、韓国最大の石塔はやはり威容と行ってよく、感銘を受けた。今でも持続的に発掘作業が続けられているのだと思うが、『三国遺事』には「弥勒三像と会殿・塔・廊廡を各々三か所に建てた」とあるから、弥勒寺には弥勒像も会殿も塔も三つあって、日本には類を見ない巨大な寺院だったはずである。

坂本臣糠手が行った百済は仏法興隆の気運のさなかにあった。坂本臣糠手は先進の仏教と寺院の知識を日本にもたらしたと考えるべきなのではないか。聖徳太子よりも、蘇我馬子よりも、百済での仏教の在り方を実際に目にきて、最新の情報をもっていたのである。坂本寺は他の氏族の寺々よりひとときわその知見が生かされた成果であったと考えてしかるべきである。その知見とは弥勒信仰ではなかったか。坂本寺には新座工門という名をもつ、日照りに功験があり、しかし、背負った人間はかならず死ぬというあの弥勒菩薩があった。これは糠手が創建した当初からあった仏なのではなかろうか。弥勒信仰隆盛の朝鮮半島に行って、糠手もたらした仏そのものとすら考えられる。

いずれにしろ、推古朝で重用され、対物部の戦いにも大きな役割を担った坂本氏が推古二年の仏教興隆の詔に反応してかなり早い時期に氏寺をもったと考えるのはごく自然のこのように思われる。

【坂本氏の伝承】

先に「墳寺」ということばに出逢った。氏寺はかつての古墳の代役を果たすことになる。和泉地方は北部にあの巨大な百舌鳥古墳群をもっていて、それは今の行政区域では堺市になるが、和泉市には堺市に接するところに黄金塚古墳という、百メートルを超える古墳をもっている。若かりし（まだ大学入学以前の）森浩一氏が注目し、発掘に着手されていた古墳である。前方後円墳としてかなり早い時期のものであるとされているが、中央郭の被葬者は三体、その中心にあるのは女性であり、この地方の豪族の祭祀者であったろうと、森氏はいう。ある時期以降、地方にも増える前方後円墳は中央の大和朝廷とかかわり、あるいは影響関係をもつようになった地方の豪族が建造するようになったものと考えられる。それは中央から地方への文化の伝播とだけでは解釈し得ないものである。すでに「中央」-「地方」の意識が芽生えているとすれば、そこには臣従関係に近いものが生れているといわなくてはならない。

「まつる」ということばがある。平安時代にはさらに接頭辞の「立つ」を加えて「たてまつる」ということばになるが、「まつる」だけでも、目上の者に物品を供することを意味する。目上の者は人間であっても、また神々であってもいい。「まつる」の連用形が名詞化して「祭り」となるが、「祭り」の本質は神々に物品を供えることを意味する。日本の「まつりごと（政）」はことば本来の意味において、本質的に民百姓を向いてはいない。大和の大王の家は神々に向けて祭祀（まつりごと）を行うのがその職務であったとっていい。その

大王の家が地方の豪族の家々を従属させていく。「まつら（ろ）はす」わけだが、「まつる」の未然形「まつら」に、継続する意味の「ふ」を加えた「まつら（ろ）ふ」の本来の意味は継続的に物品を納めるということであり、それが服従するという意味を表すことになる。つまり、大和朝廷に毎年のように貢納すること、それが「まつらふ」ということになる。東や西の「まつらはぬ人々」を「まつらふ」ようにさせること、それが倭建命の仕事であったと考えられる。

逆に「まつらふ」人々への反対給付を表すことばは「たまふ」ということになる。「奉る」に対する「給ふ」であり、それが補助動詞になって、尊敬語か謙讓語か、そして誰の誰に対する敬意を表すのか、といった形で、古典文法を学ぶ高校生をしきりに悩ませることになる。この「たまふ」は、語源的には「魂一会ふ」と考えていいのではないか。「まつらふ」た人々に対して「まつらはれた」長上はその魂を振り向けるだけでいい。目をかけ、ことばをかけるだけでいいのだと思われるが、もちろんモノがともなう場合もある。所領安堵であり、あるいは役職であり、あるいは刀剣、あるいは鏡、そして自分の名前を与える。江戸時代、將軍家は諸国の大名たちにしきりに「松平」の名前を与えた。なんら実益がないように思われるものの、有難いと思う人がいる以上価値があったのである。「まつらふ」たことへの反対給付として、地方の国造・県主の資格を、青銅鏡を、前方後円墳を築くことの許可を「たまはる」のである。そうした地方豪族と大和大王家の関係は、『古事記』『日本書紀』には婚姻関係で書かれることもある。「まつり」「まつられる」モノとして最も貴重であり、珍重されたのは女性だからである。高天原のアマテラスの子孫が豊葦原の中つ国を治めるようになる前の国土経営者はオオクニヌシであった。八千矛の神という別称ももつので、戦闘神でもあったはずなのだが、なぜか戦については語られることがない。オオクニヌシは光源氏よろしく艶福家で、女性たちとの結婚が語られる。女性を手に入れることはその国を手に入れることと同義なのである。まずは稲羽の八上比売、そして須勢理比売、高志の国の沼河比売、胸形の奥津宮の神である多紀理毘売、神屋楯比売、八鳥牟遲能神の娘の鳥耳の神……それはアマテラスの子孫たちの場合についても同じである。女性が大和の王家に「まつられる」こと、献上されることは、その女性に付着した国魂が王家に服属することと同義なのである。

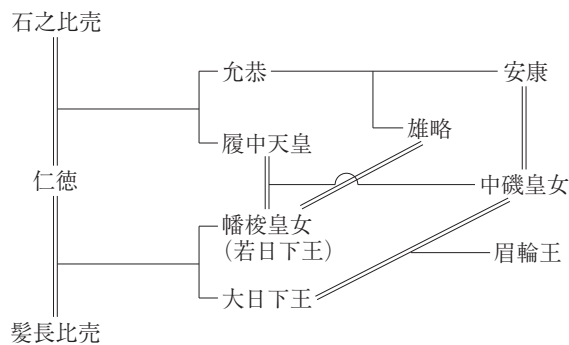
坂本糠手臣の数代前に当たる人物のエピソードが『古事記』および『日本書紀』に見える。安康天皇の時代のことである。

御子、穴穂御子、石上の穴穂の宮に坐しまして、天の下治らしめき。天皇、伊呂弟大長谷王子の為に、坂本臣等の祖、根臣を、大日下王の許に遣して、詔らしめたまひしく、「汝命の妹、若日下王を、大長谷王子に婚まぐははせむと欲ふ。故、貢るべし。」とのらしめたまひき。爾に大日下王、四たび拝みて白しけらく、「若し如此の大命も有らむと疑ひつ。故、外に出さずて置きつ。是れ恐し、大命の隨に奉進らむ。」とまをしき。然れども言以ちて白す事、其れ礼無しと思ひて、即ち其の妹の礼物と為て、押木の玉纒を持たしめて貢獻りき。根臣、

即ち其の礼物の玉纒を盗み取りて、大日下王を讒して曰ひしく、「大日下王は、勅命を受けずて曰りたまひつらく、『己が妹や、等し族の下席に為らむ。』とのりたまひて、横刀の手上を取りて、怒りましつ。」といひき。故、天皇大く怒りまして、大日下王を殺して、其の王の嫡妻、長田大郎女を取り持ち来て、皇后と為たまひき。（古事記・安康記）

『日本書紀』の話もこれとほぼ変わりはない。ただ若日下王が幡梭皇女の名前で記述されている。仁徳天皇は葛城氏から出た磐之媛とのあいだに次々と子をなし、その中から履中・反正・允恭の三人の天皇が出る。仁徳はまた、本来は父の応神天皇の妃となるはずであった日向から来た髪長媛にも先に手を付けてしまい、そこから大日下王・若日下王の兄妹が生まれる。允恭天王は忍坂大中媛と結婚して、軽皇子、軽皇女、穴穂（安康）、大泊瀬（雄略）という子どもを産む。允恭天皇の死後、本来は軽皇子が皇位を継承するはずであったが、軽皇女との近親相姦によって継承権を失い、穴穂が皇位に就くことになる。この穴穂が弟の大泊瀬を、叔父の大日下王に、その妹の若日下王と結婚させようとする。大日下王は承諾するが、その間に入って、混乱させたのが、まだ坂本を名乗っていない根臣だったというのである。大日下王は承諾の証に「押木の玉鬘」まで持たせたのに、それを欲しくなった根臣は横取りした上で、大日下王は「どうして妹が同族の敷布団にならなくてはならないのか」といったと伝える。結局、穴穂は大日下王を殺し、若日下王を大泊瀬と結婚させる。そして、大日下王の嫡妻であった長田大郎女も自分のものにしてしまうのである。

大日下王・若日下王は日下に住まっていたのであろうが、若日下王と結婚するということは女系で伝わるであろう日向の国魂をも手に入れることを意味する。「押木の玉鬘」は日向から来た髪長媛の美しい髪の毛をさらに引き立てる髪飾りであったのであろう。このあたりの系譜にはやや混乱がある。



『日本書紀』は、履中天皇は幡梭郎女と結婚して、そこから中磯皇女が生れたというのである。この中磯皇女は中帯姫皇女ともいい、長田大郎女ともいう。つまり、履中天皇がすでに幡梭郎女と結婚していて、その娘の中磯皇女と大日下王は結婚していたことになる。履中天皇が結婚していた幡梭郎女を別人とするか、伝承の混乱とするしかないのだが、あるいは、

ここの記述を鵜呑みにして解釈ができないでもない。幡梭郎女は履中天皇とも結婚し、雄略天皇とも結婚したのだと。貴重な魂を身に備えた女性を手に入れることによって、みずからの支配権をより強固なものにすることができるはずである。クレオパトラをものにしようとするローマの権力者が争ったのは、彼女が美しかったからだけではなかったはずである。

安康天皇は大日下王から略奪した長田太郎女との会話を床下で聞いていた、大日下王と長田太郎女の子の眉輪王に殺されてしまう。この眉輪王も大泊瀬（雄略）に殺害されるが、雄略天皇の十四年、坂本根臣が虚偽の讒言をして大日下王を死に至らしめたことが発覚する。

夏四月の甲午の朔に、天皇、呉人に設へたまはむと欲して、群臣に歴め問ひて曰はく、「其れ共食者に誰か好けむ」とのたまふ。群臣が、僉に曰さく、「根使主、可けむ」とまうす。天皇、即ち根使主に命せて、共食者としたまふ。遂に石上の高抜原にして、呉人に饗へたまふ。時に密に舍人を遣して、装飾を視察しむ。舍人、服命して曰さく、「根使主の著る玉纒、太だ貴にして最好し。又衆人の云はく、『前に使を迎ふる時に、又亦著りき』といふ」とまうす。是に、天皇、自ら見たまはむとして、臣連に命せて、装せしむること饗せし時の如くして、殿の前に引見たまふ。皇后、天に仰ぎて歎歎き、啼泣ち傷哀びたまふ。天皇、問ひて曰はく、「何の由ありてか泣ちたまふ」とのたまふ。皇后、床を避りて対へて曰したまはく、「此の玉纒は、昔妾が兄大草香皇子の、穴穗天皇の勅を奉りて、妾を陛下に進りし時に、妾が為に献れる物なり。故、疑を根使主に致して、不覚に涕垂りて哀泣ちらる」とまうしたまふ。天皇、聞しめし驚きて大だ怒りたまふ。深く根使主を責めたまふ。根使主、対へて言さく、「死罪死罪、実に臣が愆なり」とまうす。詔して曰はく、「根使主は、今より以後、子子孫孫八十聯綿に、群臣の例にな預らしめそ」とのたまふ。乃ち将に斬らむとす。根使主、逃げ匿れて、日根に至りて、稲城を造りて待ち戦ふ。遂に官軍の為に殺されぬ。天皇、有司に命せて、二に子孫を分ちて、一分をば大草香部民として、皇后に封したまふ。一分をば茅渟県主に賜ひて、負囊者とす。即ち難波吉士日香香の子孫を求めて、姓を賜ひて大草香部吉士としたまふ。其の日香香等が語は、穴穗天皇紀にあり。事平ぎし後に、小根使主（小根使主は、根使主の子なり。夜臥して人に謂りて曰はく、「天皇の城は堅からず。我が父の城は堅し」といふ。天皇、伝に是の語を聞しめして、人を使にして根使主の宅を見しむ。実に其の言の如し。故、収へて殺しつ。根使主の後の坂本臣と為ること、是より始めり。

雄略天皇の時代、呉との国交関係があったということになるが、呉人が大和朝廷にやって来た。その「共食者」というのは接待役を意味するのであろうが、根臣がそれに当ることになる。ということは、根臣は呉のことば、中国の南部のことばに堪能だったことを意味するのであろうか。石上の高抜原に、まさかテントを張って迎えたわけではなかろうから、迎賓館のようなものがあったのかもしれない。接待をする者は失礼のないように精一杯の盛装を

していったのであろうが、根臣は大日下王から奪った玉纒を身に着けていた。それで、今は雄略の皇后になっていた幡梭皇女（若日下王）はすべてを理解する。天皇は憤怒して根臣を追求し、殺そうとする。根臣は南に逃げて戦ったが敗れて、殺害された。難波吉士日香香というのは、大日下王に仕えて、大日下王が殺されるときに最後まで戦って、二人の子どもとともに、殉死した人間である。この人の後裔は尋ねだされて大草香部吉士という姓を賜り、根臣の半分は若日下王の部の民となり、半分は茅渟の県主の負囊者になったという。坂本臣となるのはこの後者の茅渟の県主の負囊者の方ということになろう。茅渟の県主は現在の和泉府中あたりに居住していたであろうから、坂本までは指呼の距離にある。

本稿は、桃山学院大学地域連携共同研究プロジェクト「大学教育における南大阪の地域文化資源の掘り起こし・保存・活用の研究」（14連242）の研究成果の一部として発表するものである。

【参考文献】

★引用は次の書物による

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注『日本古典文学大系68 日本書紀下』（岩波書店 1965）

石田茂作『総説飛鳥時代寺院址の研究』（聖徳太子奉賛会 1944）

帝塚山大学考古学研究所「推古朝の四十六ヶ寺をめぐる」シンポジウム報告書 2004年

福山敏男「聖徳太子時代の寺院」『日本建築史研究』（墨水書店）

森浩一『和泉黄金塚古墳』（中央公論美術出版）

和泉市史編さん委員会『和泉市の歴史6 和泉市の考古・古代・中世』

（2018年3月27日受理）

South Osaka:
Cradle of Japanese Buddhism (IV)
Along the Makio River (2)
Myo-o-in (明王院) and Zenjakuji (禪寂寺)

UMEYAMA Hideyuki

Going towards the firth of the Makio River, we can find two small temples in the now densely populated residential areas. Nowadays, even the local people neglect the origins and importance of these temples, namely Myo-o-in at Ikeda-cho and Zenjakuji at Sakamoto-cho.

The Japanese Archeological Society has been searching for the 46 temples of which the existence was mentioned in the *Nihon Shoki* in year 32 of the Suiko Era (624 CE). As seventy years had passed since the introduction of Buddhism in the mid-sixth century, the number of temples had gradually increased to 46. But where were those temples? It is almost certain that we can count Horyuji (法隆寺), Asukadera (飛鳥寺), and Shitenoji (四天王寺) among these 46 temples of the Suiko Era. However, many others remain unconfirmed.

Ishida Mosaku, the most authoritative archeologist before World WarII, nominated Myo-o-in and Zenjakuji as being among the 46 temples of the Suiko Era through estimation of the age of the production of tiles and the location of garan (伽藍), namely buildings. However, it seems that more recent archeologists have another conclusion; the origins of Myo-o-in and Zenjakuji, are not so ancient. So, how should we think of these temples?

After the victory of the Buddhists in the war between Shintoists and Buddhists in the year 587 CE, many families began to build temples for the purpose of ancestor worship. Buddhist temples became the sites of tombs. There were two ancient families, the names of which originated from the names of local areas, Ikeda and Sakamoto. Could they have built newly-styled magnificent buildings in keeping with the trends of the epoch?

We examine the land's folklore and literature.

〔共同研究：大学教育における南近畿の地域文化資源の掘り起こし・保存・活用の研究〕

日本仏教の揺籃の地としての南大阪（四）

梅 山 秀 幸

一、2015年 パリ

2007年度および2015年度、どちらも一年間、私はフランスで研修生活を送った。研修先はパリのコレージュ・ド・フランス。このコレージュはイタリアのパヴィアでスペイン軍と戦って捕虜となったフランソワ I 世（1494～1547 在位1515～没年）が、イタリア・ルネサンスに目を開かされ、その多大な影響を受けて1530年に作った王立教授陣（lecteurs royaux）を起源として、カトリック神学の牙城であるソルボンヌでは許されないヘブライ語、ギリシア語、そして数学などの学問への道を開き、「すべてを教える docet omnia」をモットーに掲げる。私は5区のカーディナル・ルモワンにある東洋部の建物に研究室を与えられたのだが、その建物には中近東の考古学者も、ヘブライの研究者もイスラームの研究者も同居していた。中国の、韓国の、チベットの研究者とも昼食時にはいっしょになった。刺激の多い充実した研究三昧の生活を送ることができる環境であったが、建物の五階の研究室からは中庭が見下ろせ、その中庭に面した一階にレヴィ＝ストロースの研究室が、2007年度にはもう彼が元気な姿を見せることはなかったものの、彼が使用していたときそのままに残されていた（レヴィ＝ストロースが百歳で亡くなったのは2009年のことである）。

2015年度の滞在では、ミシェル・ジंक教授の中世フランス文学の講義を聴講し、ダニエル・ストループ教授、アヌーク・ホリウチ教授らの木村兼葎堂の『山海名産図会』の共同研究に参加しながら、はたから見るとおかしなことをと思われるかもしれないが、『溪西野譚』・『青邱野譚』など朝鮮の両班たちの文学の翻訳に没頭した。翻訳の参考として必要な中国の四書五経も朝鮮王朝実録も、そして日本の古典文学大系も書棚に手を伸すだけでよく、必要な文献があれば、司書の方に頼めばいい、日本のどの図書館にもない恵まれた研究環境であった。その仕事の合間には、グレゴワール・ド・トゥールの『フランク史』のフランス語訳、そしてジャック・ル・ゴフの『聖王ルイ』の大部の書物を読んで過ごした。

そうして秋が深まり、11月13日（金）、パリは同時多発テロに見舞われた。

キーワード：2015年パリ、オランダの追悼演説、クロヴィス、グレゴワール・ド・トゥール、『フランク史』

その夜、ドイツとフランスのサッカー試合がサン・ドニのスタジアムで行われていて、そのテレビ中継を見ていたところ、途中でどうも様子がおかしい。すぐには何が起こったのかはわからなかったものの、異常事態が発生したことだけはわかった。サン・ドニのスタジアムの側で爆発があって3名ほどの死者が出たのだった。さらに大勢の死傷者を出したのはレパブリック広場限界であり、ロックの公演をやっていたバタ克蘭劇場では100名近くの死傷者があり、警官もまた4名が死亡した。カンボジア料理のレストランで、またカーザ・ノストラというイタリア名をもったレストランでも20名以上の死傷者があった。

その夜中じゅう、パリの空はヘリコプターが飛び交って寝付けなかったのを思い出す。その日を境に市民生活はさまざまな場面で一変した。町中どこでも、三人で一組になった警官、ジャンダルム（憲兵）たちが巡回する姿を見かけるようになったし、警察犬、あるいは軍用犬が地下鉄にまで乗って来た。私など豚肉は食べるし、ワインは飲むし、また醤油の匂いもしたろうから、私の匂いを嗅いだ犬は怪訝そうな顔をしてすぐに顔を背けた。愛玩犬、そしてせいぜい猟犬の観念しかなかった犬が実は軍事においても大きな役割を果たしていることに気づかされたことはちょっとした収穫ではあったのだが。博物館ではいままでにまして入念な身体チェックが行われるようになったし、それはデパートでまで行われるようになった。エッフェル塔の夜間照明は二、三日なされず、その後、フランス国旗のトリコロールに染まった。

11月16日（月）の正午前、コレージュ・ド・フランスの研究室からはノートルダム大聖堂で打ち鳴らされる鐘の音が聞こえ、それを合図に館内にいた研究者、職員全員が一斉に中庭に降りた。私も誘われて降りたが、正午、金曜日の死者たちのために一分間の黙祷を全員でささげた。それはフランス全土で行われたのだと思われる。私と研究室を共有していた図書館司書の海外県グアドループ出身の女性が涙を流していたのが印象的だった。

そして、事件があって2週間後の11月27日（金）、ひと足はやく冬が来たといっただけの厳しい寒さの日、アンヴァリッドで、13日の被害者のための、被害者の遺族および救援活動に当たった警察や消防隊の人びとを招いての追悼集会在厳かに執り行われた。三人の女性歌手の「私たちが愛しかもたないとき（Quand on n'a que l'amour）」というシャンソンの絶唱が今も耳に残っている。そのとき、オランダ大統領は次のような追悼の演説を行った¹⁾。

「11月13日の金曜日、その日を私たちは決して忘れません。遠方で冷酷に組織された戦争行為の中で、フランスは卑劣にも攻撃を受けました。殺人者の一団は、ばかげた理由と間違った神の名の下で、130名の命を奪い、何百もの人を傷つけました。

今日、すべての国民が犠牲者に涙を注ぎます。130の名前、130の奪われた命、130の中断された運命、130のもう聞くことのできなくなった笑い声、130の沈黙することになった声。

1) <Discours de François Hollande lors de l'hommage national aux victimes des attentas du 13 novembre>
www.youtube.com/watch?v=lqTfAsilCFc

その女性たち、その男性たちは生きる幸福を体現していました。彼らは生命そのものであったからこそ、殺されたのです。彼らはフランスそのものであったからこそ、打ち倒されたのです。彼らは自由そのものであったからこそ、虐殺されたのです。

この国家が一体となった暗鬱で悲痛な今、私は国家の名で、私たちの同情、私たちの愛情、私たちの衷情を、共有する不幸の中で、ここに集まられた家族および親族の方々にささげます。もうその子を見ることなくなったご両親たち、もうその親を見ることなく育つ子どもたち、愛する人を失って壊されたカップル、永遠に引き裂かれた兄弟姉妹。そして、130人の死者と、これからずっと肉体に影響を受け、心にトラウマを持ち続ける大勢の負傷者たち、そのすべてにです。

そして今、私はただ次のことばをいいます。フランスはあなた方に寄り添います。私たちは力を結集して、哀しみを慰藉し、死者を埋葬した後、生き延びた方たちが回復することに力を尽くします。

あなた方すべてに厳粛に約束します。フランスはこの罪を犯した狂信者の軍隊を破壊することに全力を挙げることを、そして国民を守るためには怠ることなく活動することを。さらにまた約束します。フランスはフランスのままであることを。それは亡くなった方たちが愛した姿であり、フランスが留まることを望まれたであろう姿でもあるはずで。もし今日、私たちがよって立つ理由、私たちの原則を守るために戦う理由、私たちの共通の善であるこの共和国を守るべき理由、そうした理由が必要であるとしたら、私たちはそれを彼らの思い出の中に見出します」

演説はさらに続き、20分ほどのものであったろうか。演説の草稿はオランダ大統領自身が作成したものだといひ、日本の為政者には望むべくもない格調の高さを感じさせるものであった。これは「弔辞」であり、またISに対する「宣戦」も兼ねていることになるが、フランスの国家の現在のあり方、ありうべき姿が異国の者には明瞭に示されていて、興味深いものであった。また、この式典がアンヴェリッドで行われ、ノートルダムで行われたのではないことも、当然ではあるが、留意しておく必要がある。もういつのことか記憶が薄れているのだが、「赤い旅団 Le brigade rosso」の終末期ではなかったか、ミラノでテロがあって警官が殉職したとき、その追悼式典がドゥオーモ（大聖堂）で行われたのをテレビ中継で見たのを覚えている。イタリアとはまた事情が違って、フランスにおいて *laïcité*（政教分離）は徹底されなければならないであろう。そして、「どのような条件（condition）の人であれ、どのような宗教（confession）の人であれ、またどのような出自（origines）の人であれ」、いまは「フランス人」なのであり、11月13日の犠牲者の中にはムスリムだっていたはずなのである。オランダはことばを変えて、このことを何度も強調する。「私たちの差異（*différences*）、出自（*origines*）、体の色（*couleurs*）、信念（*convictions*）、信仰（*croyances*）、宗派（*confessions*）などにこだわることなく。なぜなら、私たちは同じ価値観をもつ単一の、

そして同一の国民だからです」。そういえば、式典の間、オランダの後ろに控えて座っていた閣僚たちも肌の色はさまざまであり、出自もさまざまであった。日本と違って（これは強調しておいていい）、モロッコからの移民でも、中国系の移民でも、韓国系の移民でもフランスの閣僚になれるし、さらにいえば、半数の閣僚は女性であった……そしてまた、問題を難しくすることでもあるが、テロリストたちもまた、出自はモロッコであっても、チュニジアであっても、国籍はあくまでもフランスなのである。「同一の国民」ではあっても、「同じ価値観」をもつとはいえないことになるのだが。

オランダ大統領の追悼演説は次のように締めくくられていた。

「11月13日のアタックは世界の持続にとって恐ろしい通過儀礼として今日の青年の記憶に残りましょう。しかしまた、それは新たな参加を工夫して、それに対峙することへのうながしでもあるのです。私は若い世代が私たちの手渡す松明をしっかりと握りしめることを知っています。

私は確信します。彼らが私たちの国家の未来をしっかりと握りしめる勇気を持っていることを。11月13日の犠牲者に訪れた不幸は青年たちにその偉大で尊い義務を授けたのです。自由は復讐されることを求めず、奉仕されることを求めます。私は新しい世代に敬意を表します。その世代は攻撃されましたが、しかし、今、私たちが喪に服している無垢の犠牲者と同じく、恐れを知らず、明敏かつ活動的です。私は確信しています。彼らは偉大さを証明する術を知っていることを。彼らは生きる、今日、私たちが涙を流す死者たちの名において、十分に生きることでしょう。

流す涙にもかかわらず、今日のその世代がフランスの顔なのです。

共和国、万歳！ フランス、万歳！」

フランスの *laïcité* に至る過程には、中世のカトリック教会の支配、プロテスタントの台頭による熾烈な宗教戦争、聖バートルミーの虐殺、ナントの勅令、フランス革命、近々の植民地支配、ヴィシー政権のナチへの加担その他に、多くの紙面を割く必要があるであろう。しかし、それは私の任ではなく、今の課題でもない。フランスがカトリックの国になった淵源が、日本の聖徳太子の時代の仏教受容を考える上で参考になり、日本に「文明 *civilisation*」なるものがあるとして、その様相を知る手がかりにしたいというだけのことである。

11月13日のしばらく後であったが、コレージュ・ド・フランスの中庭が掘り返された。翌年度から、建物を改築するので、遺構を調査するということがあったが、実は中庭をフィリップ・オーギュスト（1165～1223 在位1185～没年）が建てた城壁が昔は突っ切っていたはずなので、それを調べるということであった（写真1）。はかばかしい発掘の成果はえられなかったらしく、すぐに埋め立てられたが、建物に隣り合っているクロヴィス通りにはフィリップ・オーギュストの城壁が露出したまま保存されている箇所がある（写真2）。



(写真1 コレージュド・フランスの中庭の調査発掘)



(写真2 クロヴィス通りのフィリップ・オーギュスト時代の城壁)

セーヌ右岸のマレー地区にもフィリップ・オーギュストの城壁の名残があるが、中世のパリ市内というのはいかにも狭いものであり、サント・ジュヌヴィエーブの丘の上方をやっと取り囲むくらいでしかなく、ムフタール街もその境界にあったことになる。



(写真3 右がアンリIV世校, クロヴィスが建てた聖使徒教会であり, 後に聖ジュヌヴィエーヴ修道院となり, 今は有数の進学校。クロヴィスの塔が見える。左は聖エチエンヌ教会)

クロヴィス通りを上っていくと、パンテオンがあるが、その前のところでクロチルド通りと交差する。またその地点を目指して、セーヌ河岸の方から登って来る道があり、それは聖ジュヌヴィエーブ通りということになる。そこには今、聖エチエンヌ教会があり、それと隣り合って、アンリIVという名門のリセがある(写真3)。その校舎はかつてのサント・ジュヌヴィエーブ修道院であった。クロヴィス自身が造り、当初は聖ペテロと聖パウロのための教会であったものを、聖ジュヌヴィエーヴ修道院と名を改め、フランス革命以前は聖ジュヌヴィエーヴ、クロヴィス、そしてその妻のクロチルドの墓があった。クロヴィスの塔といわれる塔が今もそのリセの中に立っている。フランス・カトリック草創期のビッグ・ネームがそろった。この界限は彼らにゆかりの深い場所であるために、地名として、通りの名として残っているのである。歴史が地名として、通りの名として刻み付けられる。聖ジュヌヴィエーブはセーヌ河畔からいつも聖ジュヌヴィエーブ通りを通過して丘の上にお祈りに来ていたというのである。

二、最初の司教たち

ロワール川に沿ったトゥールという町がある。高校生のときにならった世界史で、シャルル・マルテルがサラセン軍と戦って撃退したツール・ボワチエの戦いによって、記憶に残っている名前である。バルザックの故郷でもあり、多くの作品の舞台にもなっている。その司教であったグレゴワール(538, 9~594)の『フランク史』をひもとき、その叙述をたどってみたい。フランスにおけるキリスト教の歴史について論じようという大それた意図はなく、聖徳太子の仏教受容に百年ほど先立つクロヴィスのカトリック入信のありようを見る

ことによって、日本の仏教受容の意味を考える手立てとするためである。

キリスト教そのものはクロヴィス以前のガリア地方にすでに伝わっていた。グレゴワールは次のように語っている。

「そのころ、殉教者サチュルナンの受難史が語るところによると、七人の人が司教に選ばれ、伝道のためにガリアに派遣されたのであった。受難史は次のように語る。

『デキウスとグラトゥスが執政官のとき、確かな記憶として、トゥールーズの町はその最初の際立った司教として聖サチュルナンを受け取った』

以下の人びとがガリアに派遣されたのである。トゥールにはガティアン司教、アルルにはトロフィーム司教、ナルボンヌにはポール司教、トゥールーズにはサチュルナン司教、パリにはドニ司教、クレルモンにはオーストルモワヌ司教、そしてリモージュにはマルシアルがそれぞれ司教として赴任したのである。これらの中で福者のドニはキリストの名のもとにさまざまな拷問に堪え、遂に刀刃によってこの世の生を終えたのであった。

サチュルヌについていえば、殉教することが確かになって、司祭たち二人にいった。

『私は今、命を失い、神に召されるときが近づいた。わたしの終わりがあるべき姿で完成されるまでは、あなた方は私を見捨てないでほしい』

サチュルヌが捕まり、キャピトル（ジュピターの神殿の丘）に連れられて行くことになって、司祭たちは彼を見捨てて逃げた。サチュルヌは一人で連れ去られて行った。司祭たちが見捨てたことを知って、彼は次の祈りをしたと伝えられている。

『主イエスよ、聖なる高みから私の願いを聞いてください。あの教会は将来にわたって決して住民たちから選ばれた司教をもたぬように』

今に至るまでその町ではそのようになっている。サチュルヌはキャピトルの丘からいきり立って駆け下りる牡牛につながれて落とされ、そのようにして命を終えた。

ガティアン、トロフィーム、オーストルモワヌ、そしてポールとマルシアルは、高い聖性につつまれて行き、人びとの教会において成功し、キリストの信仰をいたるところに広めた』²⁾

一般的に、ローマは都市文明の国家であり、ローマ帝国が世界に広め普及させた文明は都市中心主義にならざるをえなかったとされる。ガリア地方にはローマ以前にケルト族が部族単位で集落をつくって民会を開いて治めていたようだが（カエサルやタキトゥスはそれを *civitas* キヴィータスと呼んだ）、そこにローマから商人、事業家、兵士たちが植民して来て、植民都市ができる。ケルト人とローマ人は時間はかかったろうが、混交していく。そこにローマ教会は伝道者を派遣したということになる。トゥール、アルル、ナルボンヌ、トゥー

2) Grégoire de Tours, *Histoire des Francs*, traduite du latin par Rpbert Latouche, LES BELLES LETTRES, Paris 1996 pp 54-55 以下、『フランク史』についてはこの書物により、筆者が日本語に翻訳する)

ルーズ、パリ、クレルモン、リエージュ、いずれも今に残る都市の大聖堂の司教たちは重要であるが、ここではパリの初代の司教のドニについて見てみたい。ウォラギネの『黄金伝説』の中の聖ディオニュシウス（ドニ）伝は、使徒パウロによって改心してアテネの初代司教になったというディオニュシウス・アレオパギタと初代パリ司教のディオニュシウスとを同一視して書かれているとされる。パリ司教としての部分だけを次に引用してみる。

「そのあとクレメンスがローマ教皇になると、聖クレメンスは、しばらくしてからディオニュシウスをフランスに派遣し、ルスティクスとエレウテリウスを彼に同行させた。彼は、こうしてパリに着くと、多くの人びとをキリスト教に改宗させ、たくさんの教会を建て、さまざまな品級の聖職者たちを叙品した。神の恩寵の光が彼の五体からかがやいていることは、だれの眼にもはっきりとわかった。これはなんどかあったことだが、偽神の祭官たちは、民衆をそそのかして彼に反乱を起こさせ、大挙して武器を手に押しよせてきたまではよかったが、彼の顔を見るやいなや、だれもみな牙を抜かれたようにおとなしくなり、彼の足もとにひざまずくか、怖ろしくなって一目散に逃げだすのがおちであった。

こうしてキリスト教の信者がふえ、悪魔の領分が日一日と狭くなって、教会が凱歌を奏するのを見て、悪魔は、ものすごい嫉妬にかられた。そこで、皇帝ドミティアヌスの胸に憤怒の炎を焚きつけ、キリスト教徒を見つけしだい力づくで神々に供香させ、それでも応じなければきびしい拷問にかけて殺してしまえという命令を出させた。こうして長官フェスケニヌスがキリスト教徒掃討のためにローマから派遣された。フェスケニヌスは、人びとに教を説いているディオニュシウスを見つけるや、すぐさま捕らえて、拳でめった打ちさせた。ディオニュシウスは、顔につばを吐きかけられ、さんざんあざけられたうえ、丈夫な皮ひもでしばりあげられ、ルスティクスおよびエレウテリウスの両聖人ともども長官のまえに引きだされた。聖人たちは、毅然としてキリストに対する信仰を告白してはばからなかった。と、そのとき、ひとりの身分の高い婦人がすすみ出て、わたしの良人ルビウスはこのけしからぬ魔術師どもに誘惑されたのです、と訴えた。彼女の良人は、すぐに逮捕されたが、すこしも屈しない信仰を守りつづけたので、不法にもその場で処刑された。聖人たちは、十二人の兵士たちに笞で打たれたあと、重たい鎖でしばられ、牢に入れられた。つぎの日、ディオニュシウスは、鉄の火格子のうえに裸で寝かされ、その下には火が炎々と燃えさかっていた。彼は、主をたたえて、『あなたの約束は、まことに確かです。あなたのしもべは、これを愛します』（『詩篇』119ノ140）とうたった。つぎに、人びとは、彼を火のなかから引きずりだして、長いあいだ餌を与えないで飢えさせておいた猛獣どものまえに投げあたえた。獣どもは、猛然とおそいかかろうとしたが、聖人が彼らにむかって十字を切ると、たちまちおとなしく、静かになった。こんどは、大きな炉のなかに投げこまれたが、火はすぐに消えて、火傷もしなかった。そのつぎは、十字架に打ちつけられ、長いあいだ大きな苦しみを受けた。やがて十字架から下ろされ仲間の聖人たちや多くの信者たちといっしょに牢に寝かされた。

彼は、それでも立って、信者たちのためにミサをあげ、聖体をさずけようとしたとき、主イエスが無量の光とともにあらわれ、パンを手にもって、こう言われた。『わたしの愛子よ、これを受けなさい。あなたが受ける最大の報酬は、わたしのもとにあるのですから』。このあと聖人たちは、長官のまえに引きだされ、あらたな拷問をくわえられたのち、メルクリウスの柱像のそばで至聖三位一体にたいする信仰を告白しながら三人そろって斧で首を落とされた。聖ディオニシウスの首のないからだは、すくと立ちあがって、自分の首を両手にかかえ、ひとりの天使にみちびかれ、天上の光につつまれて三マイルの道のりを歩いていった。今日「殉教の丘」とよばれているところから彼がみずから選び、神の思召しによっていまも永遠に安らっている場所まで歩いていったのである」³⁾

殉教者たちの受けたさまざまの拷問と、それに屈しなかった強い信仰心が語られる。ドニはモン・マルトルで首を斬られ、みずからその首を両手に抱えて、今のサン・ドニまで歩いて行ったというのである。無残にも去年五月の火災で焼け落ちてしまったが、初めてパリを訪れ、ノートルダムの大聖堂を見上げ、足を運んでファサードに近づいてゆく。左手の処女マリアのポルターユにコンスタンティヌス帝の彫像があり、天使を挟んで、首がなく、そしてその自分の首を胸の前に抱えている聖人像があるのを見て、いぶかしく思う経験をした人は多いであろう。それがサン・ドニだということになる。通りの名についてもいえば、サン・ドニ通りというのは、ドニがパリ市内から今は観光名所である、文字通り殉教の丘であるモン・マルトルに向かう道筋だったということになる。

さらに北方の、サン・ドニが自分の首を抱いて歩き続けて落ち着いたというサン・ドニの町にはサン・ドニ教会があり、フランス王の霊廟という位置づけになっている。しかし、サン・ドニ教会に王たちの墓を集め、メロヴィング家からカロリング家、さらにカペー家を「万世一系」として連ねるイデオロギーは、ルイ九世、すなわちサン・ルイの時代からのものであると、ジャック・ル・ゴフは指摘している⁴⁾。このサン・ドニの町の中でいま一際大きく目立つのはサッカー競技場のスタード・ド・フランスであり、それは11月13日のアタンタの対象にもなったわけだが、初代パリ司教の墓所であり、またフランス王家霊廟の町が今やアフリカからの移民の町にもなっている。日曜日のマルシェはごった返し、そこで売られる日用品や食料品はパリ市内に比べれば安価で、大変に重宝したものであったが、11月13日のアタンタの首謀者たちのアジトも移民たちのコミュニティを形成しているこの町にあって、五日後の18日には、警察が踏み込んで首謀者たちを射殺したニュースが伝えられた（写真4）。

サン・ドニはパリの初代司教ということになるが、フランス語に *suffragant(e)* という形容詞がある。司教が（大）司教に従属する、という意味でつかわれる。それが名詞として使

3) 前田敬作・山中知子訳『黄金伝説4』人文書院、1988、pp. 86-88

4) Jacques Le Goff, *Saint Louis*, Gallimard, 1996, p. 338



(写真4 聖ドニ教会と日曜日のマルシェ)

われる場合は「従属司教」という意味になる。たとえば、次のように使われる。

À la fin du IV^e siècle, l'organisation de l'Église, calculée sur celle des provinces romaines, fait de l'évêque de Paris un suffragant de l'évêque métropolitain de Sens⁵⁾.

(4世紀末において、教会の組織は、ローマの地方行政の組織にのっとって、パリの司教を首都のサンスの司教の従属司教とした)

ローマの行政組織そのままにカトリックの教会組織も作られたので、パリはサンスに従属し、パリの司教はサンスの司教の下位にあったということになる。人口において、その規模において、そして首都機能において、中世のパリとサンスは比較にならないにもかかわらず、パリには司教 (évêque) がいて、サンスの大司教 (archevêque) に従属していた。フィリップ・オーギュストも、サン・ルイもパリに自分以上の権威がいることを欲しなかったということになるのであろう。ルイ XIII 世治下の1622年、ジャン・フランソワ・ド・ゴンディが初めてパリ大司教に任じられることになる。

この当時の聖人をもう一人挙げてみる。ハンガリーから来たサン・マルタンである。この人は先の二人と違って殉教者ではない。『フランク史』では次のように語る。

「そして私たちの光が現れ、新たな輝かしい光線がガリアを照らした。それははなはだ幸いなるマルタンがガリアで神の教えを説き始めたのである。彼は人びとにさまざまな奇跡を通して、神の子キリストは真実の神であることを明らかにし、異教徒たちの不信を減少させたのである。彼はまた異教徒の祭壇を壊し、異教を窒息させ、教会を建て、それと同時に、他の多くの奇跡によって名を現し、三人の死者を蘇らせて、栄光の名をほしいままにした」⁶⁾

5) Jean Fabier, *Paris*, Fayard, 1997, p. 390

6) 前掲 *Histoire des Francs*, p. 61

その死者を蘇らせた話というのは『黄金伝説』では次のようなものである。

「あるとき、しばらく旅に出て修道院に帰ってくると、留守のあいだにひとりの洗礼志願者が、洗礼を受けないまま死んでいた。そこで聖マルティネスは、遺体を庵室にはこび、そのうえにかがみこんで一心に祈り、死者をよみがえらせた。この人がつねづね話していたところによると、彼は、すでに審判を受け、どこか暗い場所に送りこまれたが、そのときふたりの天使が裁き主にむかって、「マルティヌスが祈っているのは、この者のためでございます」と申しあげた。すると、裁き主は、彼をよみがえらせて、マルティヌスのもとにつれもどすようにと天使たちにお命じになったということである。聖マルティヌスは、首を吊って死んだもうひとりべつの人物をもよみがえらせた」⁷⁾

これで二人である。そしてもう一人、

「ある若者が死んだ。その母親は、どうか息子にもう一度命をあたえてやってください、と涙ながらに聖マルティヌスにたのんだ。聖人は、数えきれないほど大勢の異教徒たちが集まっている野原のまんなかでひざまずいて、祈りはじめた。すると、若者は、みんなの見ているまえてよみがえった。これを目撃した異教徒たちは、みんな回心してキリスト教を信じるようになった」⁸⁾

『黄金伝説』の「司教聖マルティネス伝」は他よりも分量が多く、彼の生涯を丁寧にとどることができるが、まだ聖職にいる前の軍人時代の話として、次のような話も載せる。

「ある冬の日のこと、彼が馬でアミアンの市門を通りぬけていこうとしたとき、ひとりのはだかのおもらいに出会った。だれひとりとして施しをめぐむ人はなかった。マルティヌスは、この男は自分に助けられるように定められているのだとさとして、ほかに施すものがなかったのので、剣を抜いて、着ていたマントをふたつに切り、ひとなどつを貧しい男にあたえ、残りの半分を自分が着た。その夜、彼が貧しい男に着せかけてやった半分のマントをまとったキリストが、彼の夢枕に立たれた。」⁹⁾

死者に衣服を施し、復活させる、聖マルタンエピソードは似通った日本の話を思い出させる。『日本書紀』推古二十一年に載せる話である。

「十二月しはすの庚かのえうま午ついたちのひの朔ひつぎのみこに、皇太子い、片岡うゑたるひとに遊行ほとりでます。時に飢こや者よ、道の垂よに臥よせり。仍よ

7) 前掲『黄金伝説4』pp. 223-224

8) 同上 pp. 225-226

9) 同上 p. 221

りて姓名を問ひたまふ。而るに言さず。皇太子、視して飲食与へたまふ。即ち衣裳を脱きたまひて、飢者に覆ひて言はく、「安に臥せれ」とのたまふ。則ち歌ひて曰はく、

しなてる 片岡山に 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ 親無しに 汝生りけめや さ
す竹の 君はや無き 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ

とのたまふ。未に、皇太子、使を遣して飢者を視しめたまふ。使者、還り来て曰さく、「飢者、既に死りぬ」とまうす。爰に皇太子、大きに悲びたまふ。則ち因りて当の処に葬め埋ましむ。墓固封む。数日之後、皇太子、近く習る者を召して、謂りて曰はく、『先の日に道に伏して飢者、其れ凡人に非じ。必ず真人ならむ』とのたまひて、使を遣して視しむ。是に、使者、還り来て曰さく、『墓所に到りて視れば、封め埋みしところ動かず。乃ち開きて見れば、屍骨既に空しくなりたり。唯衣服をのみ量みて棺の上に置けり』とまうす。是に、皇太子、復使者を返して、其の衣を取らしめたまふ。常の如く且服る。時の人、大きに異びて曰はく、「聖の聖を知ること、其れ実なるかな」といひて、¹⁰⁾ 逾惶る¹¹⁾

病を治癒する、死者を蘇らせる。hagiographie（聖者伝承）というのは聖者の生涯を語り、聖者の聖者たるゆえんである彼の起こした奇跡の数々を語るものとすれば、極めて似通ったものとなるのも確かである。ちょうど、私が滞在していた2015年の9月25日、26日の二日間、コレージュ・ド・フランスでは「聖人信仰と聖者伝文学、調和と不調和 Culte des saints et littérature hagiographique. Accords et désaccords」と題してシンポジウムが行われた。「偽書について」、「信仰と奇跡の収集」、「疑わしい聖者たち」、「文学と真実の姿のあいだ」などのセッションに分かれて、ギリシア語の資料など、私は解さなかったものの、興味深い発表が数多くあった。物語や伝承の分析は、ウラディミール・プロップあるいはレヴィ＝ストロース以後であり、軽々に影響や伝播を問題にするわけにはいかないようである。しかし、サン・マルタン伝承と聖徳太子伝承のあいだの類似には偶然では片づけられないものがありそうな印象をもつ。中世、サン・マルタンの信仰が庶民のあいだに広がったというのが、「太子信仰」もやはり庶民のあいだの信仰であった。

また、『黄金伝説』の「司教聖マルティネス」は次のようなエピソードも語る。

「フランスの国王は、戦争に出かけるときにはいつでも聖マルティヌスのカッパをたざさえていくならわしであった。それで、カッパを守護する者という意味でカペラヌスと呼ばれたともいう¹¹⁾

Cappaはポルトガル語から入って日本語にもなったが、頭巾つきのマントをいう。マルティヌスがアミアンではだかの乞食に与えたマント（カッパ）は聖遺物として保存され、フ

10) 『日本書紀下』日本古典文学大系 岩波書店 pp.198-200

11) 前掲『黄金伝説4』p.236

ランス国王は戦争に出陣するさい、この聖遺物のカッパを携行した。そのためにカペラヌス（capellanus）と呼ばれたということになる。フランス語の chapelain と英語の chaplain の語源であり、施設付きの司祭を今はいう。私の勤める大学にもいるが、アメリカ軍などにいるのを知って驚いたことがある。しかし、軍にいるのが本来の姿であることになる。

三、クロヴィス

さて、グレゴワールの『フランク史』からクロヴィスの事績をたどってみたい。

「キルデリックスが死に、その子のクロヴィスが彼に代わってフランク人を治めた。その統治の5年目、エギディウスの子のローマ人の王シアグリウスが父と同じくソワソンに拠点構えていた」¹²⁾

クロヴィスが父の後を継いだのは581年、まだ十五歳に過ぎなかった。ここでいう「ローマ人の王」というのはローマの軍司令官のことであり、その拠点がソワソンにあったことになる。クロヴィスはこのシアグリウスと戦って破り、シアグリウスはトゥールーズに拠点を置く西ゴートのアラリックのもとに逃げる。しかし、アラリックはフランク族と事を構えるのを嫌って、シアグリウスを引き渡したので、クロヴィスはこれを引き取ると、その領土をわがものにした後、これを殺した。

フランクの王の髪の毛は長い。グレゴワールの『フランク史』にもその言及があるが、サン・ドニに安置されているお棺の上の彫像は後の製作であり、リアリズムにのっとった作品ではないにしても、王のありうべき姿を現しているのであろう。クロヴィスの髪の毛は肩まで垂れている（写真5）。中国において、漢字の「長」は、髪の毛を伸ばした一族を主導する老人の姿をかたどった象形文字だという。「髪」という字そのものにも「長」が左上にある。古代中国において、部族の酋は長髪の老人だったことになる。フランクの王家の男たちは老若にかかわらず、髪の毛を伸ばしていて、それが王族の印となる。遺棄された遺体の長い髪の毛でもって王族であることを認定した話や、王位継承権を剥奪する意味合いで断髪させられる王子の話などが『フランク史』にはある。髪の毛に呪力があったということであろうか。女性についていえば、日本の「髪長姫」伝承、あるいは『トリスタンとイゾー』伝承の、イゾーの髪の毛のモチーフから、その長い髪の毛に呪力があったことを指摘することができようし、柳田国男も女性の髪の毛の呪性については随所で述べている。

さて、そのころのフランク族の戦士たちの風儀とはどのようなものだったのか。

「そのころ、多くの教会がクロヴィスの兵士たちによって略奪された。というのも、クロ

12) 前掲 *Histoire des Francs*, pp. 114-115



(写真5 棺上のクロヴィスの横臥像)

ヴィスはまだ狂信の過ちに陥っていたからである。兵士たちはある教会から、儀式に使われる他の器物とともにとりわけ大きく美しい壺を持ち出した。その教会の司教は王のもとに使者を送り、他の聖器はともかくとして、少なくともその壺だけは返してもらいたいと頼んだ」¹³⁾

戦争とは略奪であった。様々な戦争の原因があり、もっともらしい大義を掲げることがあったとしても、常におぞましい略奪行為をとまなう。そして敵方の男は殺害し、女には暴行を加えるものであったろう。まだカトリックを信奉していない蛮族は特に教会をねらう。というのも、教会には富が集積されていて、価値のある金銀の器物を多く所持していたのであろう。クロヴィス自身はこの司教の依頼を受け、略奪品を分配することになっているソワソンまでついてくるようにいう。そこで、運よくその美しい壺が自分のものになったら、司教の頼みを受け容れようというのである。ソワソンに着き、略奪品が積み上げられ、クロヴィスは、その壺については自分が欲しいと、戦士たちにいう。みな王の思い通りにすればいいと答えたが、ただ一人が大声をあげ、「みながまっとうな取り分しか手にしてはいけない」といって、斧を持ち上げ、壺に振り下ろした。クロヴィスはその場では平静を装ったものの、年が改まり、武器の整備を検査するために全兵士たちを武装させて行進させたとき、すべての兵士たちを検閲しながら、王はあの壺を打ちすえた者に近づき、「お前の武器のように手入れをしていない武器は誰も持ってはいない。槍も矛も斧もさ錆びついているではないか」といって、その男の斧を取り上げて、地面に投げ捨てた。その兵士がそれを取り上げようと身をかがめたとき、王は腕を振り上げて自分の斧を兵士の頭に振り下ろす。

13) 同上 p. 115

この時点のフランク族において、王も兵士の一団の中であって、特別な存在ではなく、分捕り品の分配は公平に行われるべきだという意識が生きていたことが注目される。しかし、王に対する畏怖を植え付け、王は特別なものだという意識の改革を行ったのはクロヴィスその人の猛々しい暴力だったともいえる。

四、クロヴィスの結婚 クロチルド

モンテスキューの『法の精神』によれば、一夫一婦制はキリスト教以前からのゲルマン諸族の特徴であつたらしい。もちろん、放逸はある。クロヴィスにはすでに一人の女性とのあいだにティエリーという息子がいたが、新たな結婚相手としてブルゴンドの王女のクロティルドを迎えることになる。この女性の感化がフランス史に大きな変化をもたらすことになる。

クロティルドは最初の子どもを身ごもり、その子を洗礼によって聖別したいと思って、夫のクロヴィスを熱心に説得する。

「あなたが信仰をささげているのは神といえるものではありません。それらはそれら自身にとっても、そして他の者にとっても、救いとはまったくなりえないものです。それらは実際、石に、あるいは木に、そして金属などに彫り込まれたものに過ぎません。あなたがそれらに与えている名前も人の名前であり、神々の名前ではありません。サチュルヌというのは、人が言うには、自分の息子に王国を奪われぬために逃げ回っているというではありませんか。ジュピターはといえば、強姦まがいの恥ずかしいことばかり、人びとを凌辱し、親たちを嘲弄し、自分自身の妹と寝るのをやめません。彼女はジュピターの妹でありながら、妻であるという憂き目を避けることができなかつたのです。マルスとメルキュールになにができるというのですか。彼らは神の名を負うべき力の持ち主であるよりは、ただ呪術の方法に通じているというだけではありませんか。私たちが礼拝をささげなくてはならない対照が他にあります。その方は、一言でいえば、何も無いところから天を造り、地を造り、海を造り、そしてそれらすべてを包み込むものを造られた。そして太陽を燃やし、夜空の星を輝かせ、水を爬虫類で、大地を動物で、空を鳥たちで満たされた。その方のおかげでまた、大地は穀物で、木々は果実で、蔦は葡萄で飾られる。そうして、その方のみ手によって、人は誕生しました。さらには、その方の寛大さによって、すべての造化はすすんで、その方が創造した人間に対して奉仕するのです」¹⁴⁾

しかし、この王妃の熱心な説得にもかかわらず、王の心は信仰には向かわない。信心深い王妃は王子の洗礼を済ませたが、インゴメールと名付けたその赤子は白い襁褓の中で死んでしまい、「襁褓はそのまま葬衣となってしまった」。クロヴィスはクロチルドを容赦なく責め

14) 同上 pp. 117-118

立てたが、クロチルドはそれに対して、「私はすべての造物主である、全能の神に感謝をささげます。なぜなら、神は私をまったくつまらないものとは判断されなかった。私の胎内に宿った子をその王国に迎え入れてくださったのだから、私の心は悲しみに打ちのめされてはいません。というのも、わが子は神の眼差しのもとで育つために白い襦袢のままこの世から呼び出されたのですから」といって、神に対する絶対的な帰依を姿勢を示す。

そんなことがあって、しばらく経ち、彼女はまた男子を生み、洗礼を受けさせ、クロドミールと名付けた。そして、この子が病気になると、王は、「この子にも、この子の兄に訪れた運命がまた訪れよう。お前のキリストの名の下で洗礼をして、すぐにでも死んでしまうだろう」と呪いのようなことばを掛ける。

しかし、母親の敬虔な祈りによって、この子は神の命のもとで快復することができた。

五、クロヴィスの改宗

クロヴィスがカトリックに改宗したのは、敬虔な妻のクロティルドの説得によってではない。アルマン族との戦争において、フランク軍は壊滅の危機に立たされた。そのとき、クロヴィスは空を仰いで、涙を流しながら、叫んだという。

「ああ、イエス・キリストよ。クロチルドが生きた神の子であるというあなた、悩める者に救いを与え、懇願する者に勝利をもたらすと人がいうあなたに、私は懇願いたします。どうかご助力によって勝利を下されんことを。もしあなたがこの敵に対する勝利をくださり、そしてまた、人びとがあなたの名前に帰する奇跡の力が証明されるなら、私はあなたを信じ、あなたの名前において洗礼を受けましょう。私は、実のところ、私の神々に救いを求めましたが、しかし、今までで見るところ、私を援けてくれようとしな。彼らには櫃はなんら力が備わっていないと信じざるを得ない。自己への奉仕者を救いにやって来ようとはしないのだから。今、私が加護を求めるのはあなたです。私が敵から引き離されるように信じたいのはあなたです」¹⁵⁾

すると、アラマン族は背を向けて、退却を始めたのである。

このことが契機になって、クロヴィスはカトリックに改宗することになる。『日本書紀』は、廃仏派の物部守屋との戦で劣勢に立たされた崇仏派の聖徳太子が、四天王の像を彫って頭に刺して、この戦に勝つことができたなら、四天王のために寺を建てようと願を立てたことにより、戦に勝ったのだと語る。戦勝を祈願したという点で一致する。戦勝の向こうに平和があるとしても、宗教は必ずしも平和を目的とはしない。

いずれにしろ、クロヴィスはカトリックへの入信を決心した。王一人が決心したところ

15) 同上 p. 119

で、その旗下の三千の兵士たちがどうするか、危惧があったものの、三千の兵士たちも、クロヴィスが語りかけようとした矢先に、死すべき神々を棄てることに同意した。「神の力」がすでに働いたのである。

ランスにおいて、聖レミのもとでクロヴィスの洗礼が行われる。

「この話はさっそく司教にもたらされ、司教は大きな喜びに満たされて、沐浴場を用意した。その場所は色彩豊かな幕でおおわれ、教会は白いカーテンで飾られた。洗礼堂は整えられ、香の匂いが立ち込め、芳しい大蠟燭があかあかと燃えていた。洗礼堂いっぱいには神聖な匂いが立ち込め、神が人びとを恩寵で満たしたので、人びとは天国の香りの中に連れて来られたものと信じた。最初に司教から洗礼を受けることを望んだのは王であった。新たなコンスタンティヌスである彼は前に進み出て、沐浴場に向かい、古いレプラの病から癒され、清らかな水でかつての古く穢れたしみを消し去ろうとしたのである。そこに彼が入ると、聖なる神は厳かな声で彼を呼び止めて、いった。

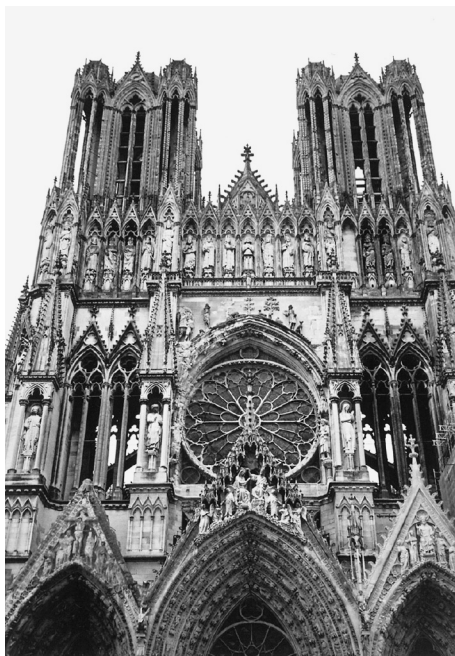
『ゆっくりと頭を下げよ、シカンプルよ。汝がこれまで燃やしたものを敬い、敬ったものを燃やしなさい』

聖レミはすぐれた学識の司教であり、特に修辞学に優れていたが、その聖性においても抜きん出ている、奇跡を起こすことにおいて、シルベストルに匹敵するほどであった。今日においても彼の伝記は残っていて、そこには彼が死者を蘇らせたことが語られている。こうして、王は三位一体において全能である神に告解をして、父と子と聖霊のみ名のもとで洗礼を受け、十字のみ印とともに聖油を塗付されたのである。クロヴィスの軍の三千以上の者たちも同じように洗礼を受けた』¹⁶⁾

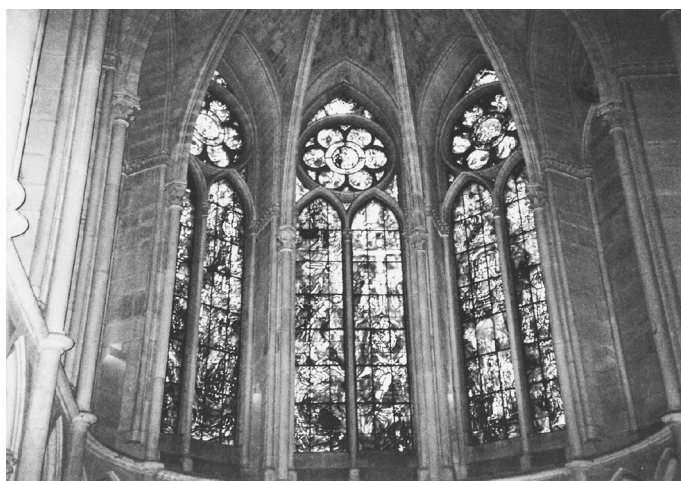
このとき、王に注ぐべき聖油がなかった。すると、一羽の鳩がくちばしに聖油の入ったガラスの小瓶を加えて空から舞い降りてきて、聖レミはその聖油をクロヴィスに注いだとされる。このクロヴィスのランスの聖堂での洗礼にちなんで、中世を通じて、フランス歴代の王たちの戴冠式はランスで行われ、そして鳩のもたらした聖油でもって聖別されるしきたりになっていた。1429年、ジャンヌ・ダルクはシャルルVII世をランスに連れていき、戴冠式を行わせることよって、正統の王にすることに躍起となったのである（写真6）（写真7）。

フランスはカトリック教会の「長女」だといわれる。ローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ教会を訪れたとき、コンスタンティヌス帝がサン・ピエトロに先立って建てたこのローマでもっとも由緒のある古い教会の参事会会員としてフランス大統領が名前を連ねていることに驚いたことがある。その起源はアンリIV世のときのものであり、メロヴィング朝までさかのぼることではないし、ポンピドー、ミッテランなどは参事会会員となること

16) 同上 pp. 120-121



(写真6 ランスのキャテドラル)



(写真7 同 シャガールのステンドグラス)

を拒否したらしいが、現在のマクロンはこの教会の参事会会員たることを受け入れているようである。クロヴィス個人の洗礼はカトリック国としてのフランスという国家の誕生を意味し、また西ヨーロッパ世界に大きな影響を及ぼしたことを考えれば、インターナショナルな出来事としての性格をもっている。そのきっかけがクロチルドという女性の敬虔な精神性であり、子どもの洗礼をきっかけにして、さらに戦争への勝利への強い祈願をきっかけにしていることは明記しておいていい。カトリックの中には脈々と母性信仰とっていいものが受

け継がれていることは、キリスト磔刑像と並んで聖母子像が多くみられることを考えても否定のしようがないし、それは人間の掛け替えのない無私の愛情を示しているものとして美しく至高のものだといってよい。しかし、キリスト教が特に好戦的であるというのではないとしても、戦争については深く考えさせられる。先に上げたサン・マルタンは軍人の風貌をもち、聖王ルイにしても、その断食や徳行などに疑問の余地はないものの、二度の十字軍への積極的な参加が聖別の理由になっているのであろう。

六、「教会」ということ

キリスト教を受容することによって何が起こったか、あるいは仏教を受容することによって、何が起こったか、と考える。どちらにおいても人びとの内面に向けられる意識の変化を一応はあげることができる。しかし、そのことについてここで考察しようとは思わない。日本に「文明」というべきものがあるのかをいうことはできないが、西洋にはローマから受け継いだ普遍性をもった確固とした「文明」があるかに思われる。ヘーゲルの観念的な歴史哲学よりも説得力を感じる、福沢諭吉の『文明論之概略』にも大きな影響を与えたフランソワ・ギゾー『ヨーロッパ文明史』は、ローマは崩壊していくものの、「都市制度」を残し、その慣習、その規則、その典範、すなわち自由の原理を残し、さらに全体的な国内法則、専制的権力、神聖なる尊厳、皇帝の権力という観念、すなわち秩序と隷従の原理を残したとする。そして、もう一つの原理がある。

「しかし、諸君、これと同時にローマの社会のうちには、まったく別の原理に基き、別の感情に鼓舞せられ、かつまた近代ヨーロッパ文明にまったく別の性質の諸要素をもたらすべき、はなはだ異なった一つの社会が形成されておりました。すなわちそれはキリスト教会のことです。わたくしはキリスト教会とって、キリスト教とは申しません。四世紀末および五世紀初頭には、キリスト教はもはやたんに個人的信仰ではなかったのであって、一つの制度でありました。それは組織されておりました。すなわち自己の政府、聖職社団、聖職者の種々の職務に応じた一定の階級制度、収入、独立の活動手段、大社会に適合しうる集合点、地方的、国民的、全体的教議会、社会問題を共通に取扱う慣習をもっておりました。一言でいえば、この時期において、キリスト教はたんに宗教ではなく、教会でありました」¹⁷⁾

少し気になるので、原文を次に引いてみる。

Mais, Messieurs, en même temps s' était formée dans le sein de la société romaine une société bien différente, fondée sur de tout autres principes, animée d'autres sentiments, et qui

17) フランソワ・ギゾー『ヨーロッパ文明史』みすず書房、1987, pp. 33-34

devait apporter a la civilisation européenne modern des éléments d'une bien autre nature: je veux parler de l'Église chrétienne. Je dis l'Église chrétienne, et non pas le christianisme. A la fin du IV^e siècle et au commencement du V^e siècle, le christianisme n'était plus simplement une croyance individuelle; c'était une institution; il avait son gouvernement, un clergé, une hiérarchie déterminée pour des différentes fonctions du clergé, des revenus, des moyens d'action indépendants, des points de ralliement qui peuvent convenir a une grande société, des conciles provinciaux, nationaux, En un mot, a cette époque, le christianisme n'était pas seulement une religion, c'était une Église¹⁸⁾.

自由の原理、秩序と隷属の原理とは全く別の原理に基いた、「はなはだ異なった社会 (une société bien différente)」があり、それは「キリスト教会 (l'Église chrétienne)」なのだという。「キリスト教 (christianisme)」はたんなる「宗教 (religion)」ではなく、大文字の「教会 (une Église)」なのだという。そして、さらに続けている。

「わたくしは、四世紀末および五世紀初頭においてキリスト教を救ったのはキリスト教会であると断定しても、いい過ぎではないと思います。帝国の内部解体に対し、野蛮性に対し力強く身を守り、夷狄を征服し、ローマの世界と夷狄の世界との文明の紐帯、手段、根源となったものは、制度と長官と権力とを伴った教会なのであります¹⁹⁾」

(Je ne crois pas trop dire en affirmant qu'à la fin du IV^e et au commencement du V^e siècle, c'est l'Église chrétienne qui a sauvé le christianisme; c'est l'Église avec ses institutions, ses magistrats, son pouvoir, qui s'est défendue vigoureusement contre la dissolution intérieure de l'Empire, contre la barbarie, qui a conquis les Barbares, qui est devenue le lien, le moyen, le principe de civilisation entre le monde romain et le monde barbare.)²⁰⁾

「教会」、ここで大文字で書かれる l'Église は日本の仏教にはなかったものである。この「制度と長官と権力をもった教会」こそが「野蛮性 barbarie」に抗して、「野蛮人たち Barbaries」を征服したとする。フランク族が「教会」を飲み込んだのではなく、「教会」こそがクロヴィスを、そしてフランク族を飲み込んだという認識をギゾーはもっているようである。『ヨーロッパ文明史』は、1928年にソルボンヌ大学において行った講義をもとにするといい、七月革命(1830)以前のものということになるが、ギゾーはオルレアン家のルイ・フィリップの七月王制の末期には首相を務め、政治家としての無能が二月革命(1848)をもたらしたとして解任された人である。蛇足であるが、私の娘がパリの公立小学校に通ってい

18) François Guizot, *HIstoire de la civilisation en Europe*, Hachette, 1985, p. 84

19) 前掲『ヨーロッパ文明史』p. 34

20) 前掲 *HIstoire de la civilisation en Europe*, p. 84

たときの担任の女性の姓が d'Orléans であった。いたって庶民的な雰囲気を漂わせた方であったが、姓を聞いて驚いたものであった。「共和国」であることの意味は深い。『ヨーロッパ文明史』第6版の序文（1853）には、ギゾーの次のようなことばがある。

「わたくしは、フランスが精神および社会の救済のために、キリスト教に復帰しなければならぬと確信し、かつキリスト教に復帰する場合は依然としてカトリックたるべきことを確信するものである。フランスがこの道に歩みを進めることを妨げるべき言動は一切これを慎むであろう」

カトリック教会が優先する。その大司教によって王は「聖別 *sacre*」される。それでは教会と王はどのような関係になるのであろうか。

ジャック・ル・ゴフは、フランス王は戴冠式において、ランスの大司教によって聖油を頭に、胸に、肩に、腕に注がれ、その後、身体すべてが王を表現するものとなるといい、次のように王の「聖別 *sacre*」の意味を述べている。

「この超自然的な力を付与され、王はそれ以降、神（Dieu）と自分が治める民との間の聖別された仲介者となる。彼を通して、つまり塗油を受けた彼の身体を通して、神の保護、神からの靈感がもたらされる。彼は、神と自分が治める民との間のハイフンであり、その死に至るまで、王国とその人民とに、現世における守護のみならず、とりわけ来世における救済についても、神の助けを保証する」²¹⁾

さらに、この戴冠式において、王は誓約を行うが、その儀式の進行の過程で、教会と王の関係に逆転が起こると、ジャック・ル・ゴフは指摘している。

「実際、これらの誓約の中において、そして聖別のさいの全般において、王と教会 l'Église との間にある協約が締結されるのであり、教会はここではみずからと同時に自身がその代表であるとする人民の立場でふるまっていることになる。「1250年の儀典書 *ordo*」の手稿本を飾る細密画は、聖別する者（*consécrateur*）が聖別される者（*consacré*）よりも上位にあるという、聖職者と王の間にそもそも前提とされている不平等関係をきちんと尊重しようとしている気遣いをよく表しているが、儀式の最後には、王が聖職者に対して上位に立つに至る。大司教が塗油され戴冠して王座に座る王に対しておこなう平和の接吻は（おそらく臣従礼の接吻も）、塗油され戴冠した王、すなわち「聖化された」王の「聖なるものへの変容」を象徴するものであろう」²²⁾

王は大司教よりも、そして「教会」よりも上位のものになるというのである。しかし、フ

21) Jacques Le Goff, *Saint Louis*, Gallimard, 1996, pp. 951-952

22) 同上 p. 954

ランス王は「祭祀王 *roi prêtre*」にはならないとも、ジャック・ル・ゴフは留保する。聖別の最中もその後も、王は俗人のままであるという。レジスタン運動の中でナチに殺されたマール・ブロックは、その『癒しの王—特にフランスとイギリスにおいて王の力に付与された超自然的性格についての研究—』という大部の書物の中で、「瘰癧 *écrouelles*」の症状を手で触れるだけで治癒させるフランス王とイギリス王の霊力について述べたが、ジャック・ル・ゴフはその起源をブロックほどには遡らせず、聖王ルイの時代あたりに求めている。世俗の権力と聖なる権力とは危うい均衡を保ちながら、不即不離の関係を保ちつづけることになる。

(この論文は桃山学院大学の共同研究プロジェクト「17連260 大学教育における南近畿の地域文化資源の掘り起こし・保存・活用の研究」の一環として、執筆者がプロジェクトの開始する前年度のフランス滞在での研究成果の一部を比較研究の立場から取りまとめたものである。南近畿をフィールドとする研究成果についても近々発表する予定である)

(2020年3月4日受理)

23) Marc Bloch, *Les rois thaumaturges—Étude sur le caractère surnaturel attribué à la puissance royale particulièrement en France et en Angleterre—*』(初版は1924年、参考にしたのは Gallimard 1983)

Southern Osaka: The Cradle of Japanese Buddhism IV

UMEYAMA Hideyuki

Continuing to study how Buddhism was accepted in ancient Japan, I spent the year of 2015 on sabbatical in Paris. The series of terrorist incidents that occurred in November of that year forced me to ponder the clash of civilizations and religions. In Paris I was a guest academic fellow of *College de France*, whose ethos is “*docet omnia* (teaches all),” so it was a very convenient circumstance to think about the conflicts and symbioses of civilizations (and of religions). There, Hebraists, Semitists, Buddhists, and Biblicists could be seen having lunch together in the university cafeteria, and holding peaceful discussions in the corridors. The building of *College* faces the rue *Clovis*. Going up that street, we meet the rue *Clotilde*. At the place where those two streets intersect, there once was the *Abbaye de Ste. Geneviève*. King Clovis, Queen Clotilde, and Saint Geneviève complete the three big names of people who contributed to the acceptance of Christianity in France and the founding of Catholic France.

The field of comparative studies is likely to offer a new and valid perspective from which to consider the theme that I have been concerned with for many years. So, through reviewing Former President François Hollande’s discourse at the ceremony of homage to the Victims of 13 November 2015, and reading Gregoire de Tour’s “History of the Franks”, this research paper will explore how the “barbarous” people became civilized through accepting the highly dogmatical and catechized religion.

(共同研究：大学教育における南大阪の地域文化資源の掘り起こし・保存・活用の研究)

日本仏教揺籃の地としての南大阪（五）

——鳥取郷の方へ——

梅 山 秀 幸

一 物部について

物部氏の本拠地であった渋川の廃寺跡の発掘によって、『日本書紀』崇峻即位前紀に記された、蘇我氏・厩戸皇子の崇仏派と物部氏の廢仏派とあいだの宗教戦争、そして崇仏派の勝利と廢仏派の敗北、物部氏の衰退という、図式的な歴史の展開は（高校の教科書はまだおおむねそのように記されている）、修正を加えることが余儀なくされた。物部氏も同時代者として蘇我氏らと同じように新たに入ってきた仏教を理解し、受容していたのであり、その「廢仏」は、仏教そのものを排斥、迫害するものではなく、神祇を祀ることで大和を統治すべき天皇が、その個人的な趣向から、古来の神祇とは異なる「蕃神」をあらためて礼拝しようとしたことに対する抵抗だったと、安井良三氏は説く（1）。

安井氏は、渋川廃寺が物部守屋その人によって創建された可能性にまで言及するのだが、いずれにしろ、物部守屋は武人として、まさに「もののふ」らしくみずから先頭に立ち、朴の木の上に登って矢を雨のように射て戦って、迹見首赤禰によって射落とされてしまう。一族も殺され、守屋の軍は敗北した。そして、『日本書紀』は物部守屋の「資人」である捕鳥部とりべのよろず万の奮戦とその飼い犬のエピソードを極めて印象的に記している。後に河内の国から分立する和泉の国が舞台となる話であり、この稿では和泉の国の最南端に蟠踞した鳥取氏に話を収斂させることになる。ともあれ、この丁未の年（587）の「宗教戦争」によって、物部守屋は死に、物部氏は敗退し、いったん歴史の表舞台からは引き下がることになる。

しかし、「物部」とはいったいどういう存在だったのか。

『日本史広事典』（山川書店）は「物部（もののべ）」の項で次のように述べる。

【物部】古代、物部連に統率され軍事・警察・刑罰に従事した部民とするのが通説。「もののふ」と読んで武人一般をさすこともある。律令時代には諸国に多数の物部姓の人々があり、物部郷（里）も二〇に及ぶ。六世紀に滅びた物部氏の部民がこれほど多かったかは疑問で、また部民であったとしても多くはふつうの農民で、中央の物部氏とそれに従う武人た

ちの経済的基盤になっていたとみるべきであろう。律令制下では刑部省の囚獄司に伴部である物部四〇人が所属して罪人の刑罰を担当し、そのもとに士丁から選ばれた物部丁二〇人が武器を帯して獄を守った。衛門府にも内の物部三〇人がおり、東市・西市には各二〇人の物部が属して非違を禁察した。

まず「部民」として「物部」がいたとする。それは後の「もののふ」の語義が示すように武人的な性格をもち、戦闘行為を当然行うことになるが、平時であっても武力行使が必要となる刑吏および警察業務に携わったことが特に取り上げられている。その「物部」を統轄する「物部氏（もののべうじ）」については、『日本史広事典』は別の項を設けて次のように述べている。

【物部氏】^{にぎはやひ}饒速日命を祖とする有力氏族。軍事・刑罰を担当する物部の伴造。姓ははじめ連（むらじ）。六八四年（天武一三）朝臣に改姓し、まもなく^{いそのかみ}石上朝臣に改氏。本拠地は河内国^{とのおちね}洪川郡付近。複姓の同族が多く、八十物部と称された。『日本書紀』では、垂仁朝に物部十千根大連がみえるが、実際には継体天皇を擁立した^{あらかひ}麩鹿火が大連に就任した最初か。ついで麩鹿火とは別系の^{おこし}尾輿が大連になり、大伴金村を失脚させて勢力を誇ったが、^{いなめ}蘇我稲目（いなめ）と対立した。次の大連^{もりや}守屋も^{うまこ}蘇我馬子と争い、五八七年（用明二）に滅ぼされた。その後、壬申の乱では物部^{えのい}朴井連（^{おきみ}朴井氏）雄君が活躍。天武朝に石上朝臣に改姓した麻呂は左大臣に至り、以後石上氏は八世紀～九世紀初めに多くの高官を輩出した。

「連」を姓とする「物部氏」がいて、複姓の同族も多く、「八十物部」とも称したという。『万葉集』には「物部八十伴雄（もののべのやそものを）」ということばがたしかに頻繁に出てくる。八十というのは勿論、数が多いという意味だが、実に数多くの「物部」の氏族群を饒速日命を祖とする「物部連」が統轄したということなのであろう。神代はともかくとして、垂仁朝にも物部大連が出てくるものの、物部連が大和朝廷で重きをなすのは継体天皇の麩鹿火以後のことであり、蘇我氏との抗争に敗れ、後に石川氏に改姓したことを、『日本史広事典』では簡単に述べていることになる。さらに詳しい物部についての諸家の見解については必要に応じて触れることにしたい。

物部氏については、江戸時代以降は偽書扱いされる『先代旧事本紀』にことさらに詳しく、注目すべき記載があるのだが、まず『日本書紀』にどう記されているのかを把握しておこう。

二 饒速日尊の天降り

神武天皇即位前紀によると、まだ九州にいた神^{かむやまといはれひこ}日本磐余彦（神武）に、^{しおつつのをぢ}塩土老翁が、
「東の方に美^よき地^{くに}有り。青山^{よもにめぐ}四^{あまのいわふね}周^{あまのいわふね}れり。其の中に亦、天^{あまのいわふね}磐^{あまのいわふね}船^{あまのいわふね}に^{あまのいわふね}乗りて^{あまのいわふね}飛^{あまのいわふね}び^{あまのいわふね}降^{あまのいわふね}る者^{あまのいわふね}有り」
と告げたという。ここから東方に、美しい土地がある。そこは四方をぐるりと緑の山に囲

まれている。そこにはすでにわれわれより先に天孫族が船に乗って降臨している、というのである。そこで、イハレヒコは考える。

「彼の地は、必ず以て大業を恢弘あまつひつぎ ひらきのべて、天下あめのしたに光宅みちをるに足りぬべし。蓋し六合くに もなかの中心か。厥その飛び降るといふ者は、是饒速日にぎはやひと謂ふか。何ぞ就ゆきて都みやこつくらざらむ」

天孫族というのは、おそらくは朝鮮半島からの渡来人と認識していいのであろう。稲作と金属器とそして新しい土器とをともなうて、何波にもわたって渡来したのであったろうが、カムヤマトイハレヒコたちより早くすでに近畿地方に入って居住している人びとがいる。おそらく話には聞いているニギハヤヒの一族なのであろう。われわれは曾祖父のホノニギノミコトが高千穂の峯に天降って以来、三代ものあいだのんびりと構えて南九州で過ごしてしまって、先を越されてしまったが、どうしてわれわれもそこに行って都を造らないでいようか、ということになる。文意は直截的で、東征の決意である。そして、その年の十月には兄弟たちと船団を組んで出発する。まずは筑紫の宇佐、そこでは宇佐津彦と宇佐津媛の饗応を受け、一族の一人を宇佐津媛と結婚させる。征服には戦闘がともなったにちがいないが、むしろ相手の服従の意を表現する饗応と女性との結婚とでしばしば語られる。そして十一月には筑紫の岡、十二月には安芸の埃宮、翌年の乙卯の年の三月には吉備の高嶋。そこで三年のあいだ船を修造し、軍糧を蓄え、一気に天下を平定しようと決意する。戊午の年の二月に船団は浪速に至り、三月には当時はおそらくは洲潟のようだった大阪湾を奥に縫うように入っていく、河内の草香の白肩の津に至った。四月にはそこから陸を竜田に向かい、一気に生駒を越えて中洲なかづくに（大和）に攻め込もうとしたのが、長髓彦に迎撃されて、兄の五瀬命が致命傷を負い、撤退を余儀なくされる。そうして、太陽神の子孫である自分たちが太陽に向かって攻めて行くことはできない、生駒山を越えて大和に入ることは困難と判断して、大阪湾を今度は南下することになる。

私が勤務する桃山学院大学のキャンパスは和泉市の高台にあつて、研究室の窓からは、古代には茅渟の海といった大阪湾が見える。晴れ渡っていれば遠く淡路島をつなぐ明石大橋が見え、北方には六甲の山並みも見える。太陽の沈むはるか西の向こうからカムヤマトイハレヒコの船団がやって来て、大阪湾に侵入したものの、生駒山を越えることができず、撤退して、大阪湾を紀州の方に南下して行く、その行程を目で追うことができる。

カムヤマトイハレヒコの兵たちは熊野まで至り、なぜかあの熊野の広大な原生林を越えて吉野から大和に入る。まるで中国共産党の延安への長征を思わせるが、実際には可能とは思えないし、意味のあることとも思えない。やはり神話の領分での話と考えるしかない。その間、熊野の高倉下たかくらじ、頭八咫鳥やたのからす、兄狛えうかし・弟狛おとうかし、井光あひか、八十梟帥やそたける、兄磯城えしき・弟磯城おとしきなど、抵抗や帰順の興味深いエピソードに事欠かないが、大和の豪族たちも服属させた後に、最後にふたたびナガスネヒコと対峙することになる。今度もナガスネヒコの軍は強盛で、カムヤマトイハレヒコの軍はなかなか勝つことができなかった。そこに、にわかにかが曇って氷雨が降って来

る。金色の靈鷲が飛んできてカムヤマトイハレヒコの携えた弓の弭に止まる。その鷲は金色にまばゆく光り、まるで稲光のようであったために、ナガスネヒコの軍は幻惑されて戦意を喪失することになる。

時に長髓彦、乃ち行人を遣して、天皇に言して曰さく、『嘗、天神の子有しまして、天磐船に乗りて、天より降り止ませり。号けて櫛玉饒速日命（饒速日、此をば你芸波椰卑と云ふ）と曰す。是吾が妹三炊屋媛（亦の名は長髓媛。亦の名は鳥見屋媛）を娶りて、遂に児息有り。名をば可美真手命（可美真手、此をば于魔詩莽耐と云ふ）と曰す。故、吾、饒速日命を以て、君として奉へまつる。夫れ天神の子、豈兩種有さむや、奈何ぞ更に天神の子を称りて、人の地を奪はむ。吾心に推るに、未必為信ならむ』とまうす。天皇の曰はく、『天神の子亦多にあり。汝が君とする所、是実に天神の子ならば、必ず表物有らむ。相示せよ』とのたまふ。長髓彦、即ち饒速日命の天羽羽矢一隻及び歩鞞を取りて、天皇にみせ奉る。天皇、覽して曰はく、『事不虛なりけり』とのたまひて、還りて所御の天羽羽矢一隻及び歩鞞を以て、長髓彦に賜示ふ。長髓彦、其の天表を見て、益蹶踏ることを懐く。然れども凶器已に構へて、其の勢、中に休むこと得ず。而して猶迷へる凶を守りて、復改へる意無し。饒速日命、本より天神慍慍したまはくは、唯天孫のみかといふことを知れり。且夫の長髓彦の稟性復、俛りて、教ふるに天人の際を以てすべからざることを見て、乃ち殺しつ。其の衆を帥いて帰順ふ。天皇、素より饒速日命は、是天より降れりといふことを聞しめせり。而して今果して忠効を立つ。則ち褒めて寵みたまふ。此物部氏の遠祖なり。

ナガスネヒコがいうには、すでに天神の子が天の磐船に乗って天からやって来ていて、その名前はニギハヤヒノミコトといい、自分の妹のナガスネヒメと結婚をして、子どものウマシマデノミコトまでもうけている。天の神に二種類があるのだろうか、というナガスネヒコの質問が面白い。遅れてやって来たカムヤマトイハレヒコ一行は偽物なのではないか。その偽物が人の国を奪おうとしてやって来るとは怪しからぬということになる。

それに対して、カムヤマトイハレヒコは、天孫族というのもたくさんあり、もしお前がいうニギハヤヒノミコトが天神の子孫であれば、きっとそれを証明するものをもっているであろう、それを見せよ、といい、ナガスネヒコは天孫族固有の矢とヤナグイを見せたとある。それが本当に天孫族固有のものであることを確認した上で、カムヤマトイハレヒコもまた自分たちが天孫族であることを証明する矢とヤナグイを見せた。ナガスネヒコはそれを見て恐縮するものの、すでに戦闘態勢を整えて、高まった兵たちの士気を抑えることができず、当初の作戦を撤回することもできない。ニギハヤヒノミコト自身についていえば、天孫族は天孫族を悪いようには扱わないと判断し、しかし、ナガスネヒコは性格がひねくれているし、天孫族と土着の人とは越えられない障壁があると判断して、なんとも無惨な話だが、妻の兄のナガスネヒコを殺して、カムヤマトイハレヒコに帰順することになる。カムヤマトイハレ

ヒコはこのニギハヤヒノミコトの一族を優遇したが、これが物部氏の先祖だということになる。だが、これは常に男系のイデオロギーがかったジェネアロジーであり、物部氏は母系で長髓媛の血を受け継いでいることは強調しておいていい。

三 石上神社のこと

もう一つ、「物部首」にかかわる『日本書紀』の垂仁紀の記事も検討しておこう。

三十九年の冬十月に、五十瓊敷命、茅渟の菟砥川上宮に居しまして、劍一千口を作る。因りて其の劍を名けて、川上部と謂ふ。亦の名は裸伴（裸伴、此をば阿箇播娜我等母と云ふ）と曰ふ。石上神宮に蔵む。是の後に、五十瓊敷命に命せて、石上神宮の神宝を主らしむ（一に云はく、五十瓊敷皇子、茅渟の菟砥の河上に居します。鍛名は河上を喚して、大刀一千口を作らしむ。是の時に楯部・倭文部・神弓削部・神矢作部・神穴磯部・泊櫃部・玉作部・神刑部・日置部・大刀佩部、併せて十箇の品部もて、五十瓊敷皇子に賜ふ。其の一千口の大刀をば、忍坂邑に蔵む。然して後に、忍坂より移して、石上神宮に蔵む。是の時に、神、乞して言はく、「春日臣の族、名は市河をして治めしめよ」とのたまふ。因りて市河に命せて治めしむ。是、今の物部首の始祖なり）。

垂仁天皇は狭穗姫を亡くした後、丹波の道主王の五人の娘と結婚した（古事記では四人）。古代の日本で多く行われたソロレイト婚であるが、ただし、末の妹の竹野媛は醜かったので故郷に帰され、その途中で身投げをして死んだという悲しい逸話が残る。五人姉妹の長姉である日葉酢媛とのあいだに五人の子どもが生まれる。第一に五十瓊敷入彦命、第二に大足彦尊、第三に大中姫尊、第四に倭姫尊、第五に稚城瓊入彦命である。垂仁紀三十年に、五十瓊敷入彦命と大足彦尊兄弟のあいだで垂仁後の皇位継承について取り決めがなされた旨の記事がある。

三十年の春正月の己未の朔甲子に、天皇、五十瓊敷命・大足彦尊に詔して曰はく、「汝等、各情願しき物を言せ」とのたまふ。兄王諮さく、「弓矢を得むと欲ふ」とまうす。弟王諮はく、「皇位を得むと欲ふ」とまうしたまふ。是に、天皇、詔して曰はく、「各情の随にすべし」とのたまふ。則ち弓矢を五十瓊敷命に賜ふ。仍りて大足彦尊に詔して曰はく、「汝は必ず朕が位を継げ」とのたまふ。

古代日本においては必ずしも長子相続ではなかったことは古事記・日本書紀を読めばすぐに気づく。そもそも初代から、天皇家では、五瀬命が死んだからとはいえ、カムヤマトイハレヒコ（神武天皇）は末弟であった。第二代の崇神天皇も第三代の垂仁天皇も長子とはいえないし、垂仁には狭穗姫とのあいだに誉津別命がいたが、母の死の衝撃からか大人にな

るまで口がきけず、皇位継承からは外されていたかに見える。そして、日葉酢媛の長子であるイニシキノミコトはここで皇位の放棄をあっさりと宣言し、弟のオホタラシヒコノミコトが垂仁を継ぐことになる（景行天皇）。兵権よりも祭祀権を優先させる天皇制のあり方がここにはすでに表れているともいえる。イニシキノミコトは兵権を選んだことになるが、それはどうやら軍需産業を掌握することでもあったらしい。そのことを崇仁紀三十九年の記事は如実に語っているともいえる。ここでいう「茅渟の菟砥河上宮」というのは、阪南市を流れる菟砥川の上流の現在の玉田山に比定される。イニシキノミコトはそこに宮を造って落ち着き、千本の大刀を作らせたというのである。

その千本の大刀を川上部というのには、「一に云はく」以下のヴァリエントのいうように、川上という土地の鍛冶集団の作った大刀だからいうのであろうが、刀剣は後代においても製作者の名前でもって呼ばれ、「正宗」や「長船」のように一種擬人化すらされるところがある。「裸伴」というのは鞘に納めず刀身のままだったからとも、その切れ味が甲冑を帯びた敵であってもまるで裸身を切るがごとくであったからともいうが、冴え冴えとした刀身をイメージさせて、官能的ともいえる。くりかえすが、「もの」という古語はそこに内包する霊的なものをも意味する。現代人でもフェティッシュな思考から免れているわけではないが、「川上部」は他とは差異化された特別な刀剣だったのだと思われる。それを後に石上神宮に納めて、イニシキノミコトが管理したというのである。「一に云はく」のヴァリエントでは、さらに楯、弓、矢などの兵器製作者の集団、織布、土器（泊櫃）、玉の製作者集団、刑吏、警察軍事（大刀佩）などの十の品部をすべてイニシキノミコトに与えたということになっている。

ここにいう「品部」とはいったい何なのだろうか。岩波古典文学大系本で「とものみやつこら」という訓を丁寧につけているが、『日本史広事典』では「品部（しなべ）」について、次のようにいう。

【品部】「ともべ」とも。朝廷により組織された特殊な部。大化前代の品部は、『日本書紀』垂仁三九年条の伝承にある楯部^{たてぬいべ}・神弓削部^{かむゆげべ}・玉作部^{たまつくりべ}などの十種の品部が著名。当時はさまざまな職業部が、伴造^{とものみやつこ}に管掌されて朝廷に物資と労働力を提供し、伴造の経済的基盤となつたらしい。最近では名代^{なしろ}の部も品部の一種とする説がある。律令時代には大化前代の品部の一部が残存し、たとえば図書寮の紙戸五十戸、造兵司の楯縫^{たてぬい}三六戸、漆部司の漆部^{ぬりべのつかさ}一五戸のように、伝統的諸官司に配備されたものとするのが有力な学説である。彼らは所属官司に上番して特殊な労役に服し、調・庸^{ぞうよう}・雑徭の全部または一部を免除された。

そして、「伴造（とものみやつこ）」は別に次のように説明されている。

【伴造】大和政権において伴^{とも}や部^べを領有・管理し、朝廷の職務を分掌した官人。「臣連伴造・国造百八十部」と称され、臣^{おみ}・連^{むらじ}につぐ地位を占めた。大伴連・物部連・中臣連など連は上

級の伴造ともいうべきものであるが、一般に伴造というとき、それ以下の身分である忌部首・^{いんべのおびと}玉作造・^{たまつくりのみやつこ}秦造・^{はたのみやつこ}漢直などをさす。忌部首は紀伊・阿波などの諸国の忌部を統轄し朝廷に必要な物資をださせた。『日本書紀』欽明元年八月条に、秦人の七〇五三戸を戸籍につけ、秦^{あやのあた}大津父を秦伴造としたとあり、伴造の勢威をうかがうことができる。律令制下に各官司では伴造一品部・雑戸の関係がみられ、伴部を伴造とも称したのは、大和政権の伴造の名残であろう。

またこのヴァリエントでは、一千口の大刀をはじめ忍坂邑に蔵め、後に石上に移したとし、またそのとき、神の要求があり、春日臣の一族の市河に官吏させることになったとする。そして、その市河が物部首の祖先なのだとする。

垂仁紀は三十九年の記事のすぐ後に八十七年の記事が続く。

八十七年の春二月の丁亥の朔辛卯に、五十瓊敷命、^{きざらぎ ひのとい ついたちかのとう}妹大中姫に謂りて曰はく、「我は老いたり。神宝を掌ること能はず。今より以後は、必ず汝主れ」といふ。大中姫命辞びて曰さく、「吾は^{かむたから つかさど}手弱女人なり。何ぞ能く天神庫に登らむ」とまうす（神庫、此をば保玖羅と云ふ）。五十瓊敷命の曰はく、「神庫高しと雖も、我能く神庫の為に梯を造てむ。豈庫に登るに煩はむや」といふ。故、諺に曰はく、「天の神庫も樹梯の随に」といふは、此其の縁なり。然して遂に大中姫命、^{ものべのとちねのおほむらじ}物部十千根大連に授けて治めしむ。故、^{ものむらじら}物部連等、今に至るまでに、石上の神宝を治むるは、是其の縁なり。昔丹波国の桑田村に、人有り。名を甕襲と曰ふ。則ち甕襲が家に犬有り。名を^{あゆき}足往と曰ふ。是の犬、山の獸、名を^{むじな}牟士那といふを^く咋ひて殺しつ。則ち獸の腹に^{やさかに まがたま}八尺瓊の勾玉有り。因りて献る。是の玉は、今石上神宮に有り。

イニシキノミコトもすでに年若い、石上神宮の神宝の管理に疲れてしまった、そこで妹のオホナカツヒメに代わって欲しいという。しかし、オホナカツヒメは自分も年を取っていて、しかも女性の身で高床式の庫には登れないと答える。イニシキノミコトはそれなら梯子をかければ大丈夫だといひ、「天の神庫も梯子をかければ大丈夫」という諺のもとになったという。どこかで、『仮名手本忠臣蔵』の一力茶屋の場面を彷彿させる。お軽が二階にいて密書を覗いているのに気づき、由良之助は梯子をかけてお軽を下に下ろして殺そうとする。お軽にとっては生命にかかわる危うい場面なのに、由良之助は「船玉さまが見える」などときわどい冗談をいう。この記事にもその種のきわどさがあるような気がする。オホナカツヒメは梯子に登り降りしなければならぬような仕事を回避して、神宝の管理を物部十千根大連に譲ってしまう。ここで、十箇の品部もそのまま物部連に継承されたと考えていいのだと思われる。

四 『先代旧事本紀』の記述を読む

以上にみたとおり、天照大神の孫の降臨から続く天皇制イデオロギーを前面に打ち出した『日本書紀』ですら、物部氏の存在を無視することができず、ニギハヤヒノミコトの降臨がニギノミコトの降臨に先行することを否定できなかった。この論考では『日本書紀』にそって物部氏の輪郭を理解すれば、それで十分に事足りるのだが、『先代旧事本紀』の記事も一瞥しておきたい。偽書であるかどうかはともかく、こちらは汎ニギハヤヒ=物部イデオロギーを全面的に展開することになる。

『先代旧事本紀』巻第三「天神本紀」は次のように始まる。

まさかあかつつはやひあめのおしほみのみこと てらすおほみかみ のたまは とよあしはらのちあきながいほあきながのみずほくに
 正哉吾勝々速日天押穗耳尊に、天照太神の曰く、「豊葦原千秋長五百秋長瑞穂国は、吾が
 御子正哉吾勝々速日天押穗耳尊の知らすべき国なり」と言寄さし詔りたまふ。天降ります
 とき、たかみむすびのみこと おもひかねのかみ よろづはたとよあきはたとよあきつしひめたくはたちぢひめのみこと あまてるくにてるひこ
 高皇産靈尊の兄思兼神の妹万幡豊秋幡豊秋津師姫栲幡千々姫命を妃として天照国照彦
 あまのはあかりくしたまにぎはやひのみこと あれま まう あれ
 天火明櫛玉饒速日尊を誕生せり。正哉吾勝々速日天押穗耳尊奏して曰さく、「僕まさに降ら
 んとして装束ふ間、生るるところの児、これをもって降すべし」とまうす。詔してこれを許
 したまふ。あまつかみのみおやみことり あまつしるしみずのたからとくさ おきつ へつ
 天神御祖詔して、天璽瑞宝十種を授けたまふ。謂はく、羸都鏡一つ、辺都鏡一つ、
 やつかのつるぎ いくたま よみがへしのたま たるたま ちがへしのたま へみのひれ はちのひれ くさぐさのもの
 八握剣一つ、生玉一つ、死反玉一つ、足玉一つ、道反玉一つ、蛇比礼一つ、蜂比礼一つ、品物比
 礼一つ、是らなり。天神御祖教え詔して曰はく、「もし痛きところ有らば、この十の宝をして、
 一・二・三・四・五・六・七・八・九・十と謂ひてふるへ、ゆらゆらとふるへ、此の如く之
 をなせば、死人も生き反るべし」と。是、則ち所謂「ふる」の言の本なり

アマテラスは豊葦原の瑞穂の国にまず自分の子のアメノオシホミミを天下らせようとした。ところが、アメノオシホミミはタカミムスビの娘のタクハタチヂヒメと結婚して、その間にニギハヤヒが生まれたので、自分ではなく、ニギハヤヒを天降りさせることを願い、アマテラスはそれを許可したというのである。この記述は記・紀とそう異なるところはないが、記・紀ではもう少し紆余曲折があって、まずアメノオシホミミを天降らせようとしたところ、豊葦原の瑞穂の国は「いたくさやぎて」あるようだったので、アメノオシホミミは恐れをなして引き返した。そこで、八万の神たちが相談して、まずは天菩比神あめのほひのかみを天降らせ、さらには天若日子あめわかひこを天降らせるが、国つ神に懐柔されて復奏しなかった。その後、建御雷神たけみかづちのかみを降らせ、大国主命に国譲りをさせた後に、その間にアメノオシホミミとタクハタチヂヒメの間に番能邇々芸命ほのくにぎのみことが生まれたので、このホノニギを天降らせたことになっている。

アマテラスは天降るニギハヤヒに十種の宝を与え、その宝を用いて行う呪術の方法を教える。あるいは「ひ、ふ、み、よ・・・」という斬新な数学、「十進法」を伝えたといえるのかも知れない、その数は呪文の働きをして、死者をもよみがえらせる「フル」の秘儀は執行されたということになるであろう。この神道は物部氏に伝わることになる。『先代旧事本紀』は続けて、タカミムスビが天降るにニギハヤヒに、

「もし葦原中国の敵、神人を拒みて待ち戦ふ者有らば、能く方便して誘ひ欺き、防ぎ拒む

べし」

といい、三十二柱の神々を随行させたとし、その神々を列挙している。

あまのかごやまのみこと 天香語山命（尾張連等祖）、あまのうずめのみこと 天鈿売命（媛女君等祖）、あまのふとたまのみこと 天太玉命（忌部首等祖）、あまのひこねやのみこと 天児屋命（中臣連等祖）、あまのくしたまのみこと 天櫛玉命（鴨県主等祖）・・・

というようにである。近畿だけにとどまらず、九州から中国、そして中部、関東の広域にわたる豪族の祖先神たちがそこには含まれ、また、

あまのぬかとのみこと 天糠戸命（鏡作連等祖）、あまのあかるたまのみこと 天明玉命（玉作連等祖）

などの工人集団の祖先にあたる神々もいる。

その中に、

すくなひこねのみこと 少彦根命（鳥取連等祖）

として、鳥取氏の祖先神も名を連ねていることをここでは強調しておきたいが、文脈上、この三十二柱の神々は戦闘要員としても饒速日尊に随行したことになる。

饒速日尊とともに天降ったのは三十二柱の神々だけではなかった。他に、鍛冶や笠縫などの五つの「部人」、五つの「部造」、そして「天物部」として二十五の「部人」らもいっしょであり、それらの名前が列挙される。さらに天の磐船の「船長」もいたし、「舵取り」もいたし、「船子」も「船大工」もいたらしいのである。最近の新聞記事で感銘を受けたものがあった。切り抜きをしたはずなのだが、今は手元がない。大阪の東成区の深井には笠縫が伝承されていて、大嘗祭に使用される笠はここで作られ宮内庁に献納されるのだということであった。古い時代に笠の材料である菅が密生している深井に大和から移住したといい、ニギハヤヒとともに天降った「部人」の末裔とその技術が今になお生き残っているらしいのである。

ニギハヤヒには実に大勢の集団が随行して豊葦原の瑞穂の国に天降ったことになる。時系列でいえば、しばらく後に、ホノニギは遠く九州の高千穂の峯に天降ったのだったが、ニギハヤヒはそれに先立っていったいどこに天降ったのだろうか。

饒速日尊、あまつかみみおや 天神御祖の詔をう稟け、天の磐船いはふねに乗りて河内の国の河上のいかるが哮峰に天降りまし、おほやまと 則ち大倭の国の鳥見白庭山とみに遷ります。いはゆる天の磐船おほそらに乗りて大虚空を翔けり行き、是の郷を巡り睨て天降ります。即ちそらみつやまとのくに 虚空見日本国と謂ふは是か。饒速日尊、便ちながすねひこ 長髓彦の妹御炊屋姫みかきやひめを娶りて妃と為し、みめ 任胎はらまましめたまふ。いまだ産む時に及ばざるに、饒速日尊神損去ります。

ニギハヤヒが天の磐船に乗って天降った最初の場所は河内の哮峯であり、その後すぐに大和の国の鳥見の白庭山に遷ったということになっている。交野から枚方の傾斜地を北の淀川に向けて天の河が流れる。氾濫を繰り返すそのために堤を築き上げてきた歴史から天井川になっていて、そのことからの名前だと考えられるのだが、花崗岩の砕かれた砂が光り輝くことからくる名前だともいう。『伊勢物語』の「世の中に絶えて桜のなかりせば春の心は

のどけからまし」という歌の出でくる有名な章段にもこの川がでてくる。

「よき所を求めゆくに、天の河といふ所にいたりぬ。親王に馬頭、大御酒まるる。親王のたまひける、『交野を狩りて、天の河のほとりに至るを題にて、歌よみてさか月はさせ』とのたまうければ、かの馬頭よみて奉りける。

狩り暮らし棚機つ女に宿からむ天の河原に我は来にけり」

春の行楽ののどかな趣を尽して読む者までも酩酊させてしまふ文章である。

この天の河の源が哮峯であり、磐船神社がある。そこに確かに大きな磐があって、これが磐船なのだというが、ニギハヤヒはここに最初に天降り、すぐに大和の国の鳥見の白庭山に遷ったという。哮峯と白庭山、河内と大和と国名が違い、大阪と奈良と府県名が違ふと、かなりの距離を考えがちであるが、実は京阪奈丘陵の直線距離で4キロほどのハイキングコースにもならない指呼の間にこの二つの伝承地はある。



磐船神社

五 鳥取万、そして義犬の伝承

丁未の年（587）の「宗教戦争」において、物部氏もその傘下にあった物部も一敗地に塗れることになる。物部守屋の死も印象深く、多くの戦士たちの死があったのに違いないが、特に印象深いエピソードとして、日本書紀は物部守屋の「資人」として難波の家を百人ほどの兵とともに守った捕鳥部万の奮戦とその死、そして万の死体の側を離れなかった犬の話を書き記す。

物部守屋大連の資人捕鳥部万（万は名なり）、^{つかひびととりべのよろず} 一百人を将て、^{ももたりのひと ひきみ} 難波の宅を守る。而して大連滅びぬと聞きて、^の 馬に騎りて夜逃げて、^{ちぬのあがた} 茅渟原の^{ありまかむら} 有馬香邑に向く。仍りて婦が宅を過ぎて、遂に山に匿る。朝廷議りて曰はく、「万、^{さかしまなこころい} 逆心を懐けり。故、^か 此の山の中に匿る。早に族を滅ぼすべし。な怠りそ」といふ。万、^{きものや} 衣裳弊れ垢つき、^{かほかし} 形色憔悴けて、弓を持ち剣を帯きて、独り自ら出で来れり。有司、^{つかさ} 数百の衛士を遣して万を圍む。万、^{ももあまり} 即ち驚き^{いくさびと} 篁藪に匿る。繩を以て竹に繫けて、^{つかさ} 引き動して他をして己が入る所を惑はしむ。衛士等、^{たかふる} 詐かれて、^{あざむ} 揺く竹を指して馳せて言はく、「万、^は 此に在り」といふ。万、^{はな} 即ち箭を發つ。一つとして^{あた} 中らざること無し。衛士等、^{すなは} 恐りて敢へて近つかず。万、^{はづ} 便ち弓を弛して腋に挟みて、^{わき} 山に向ひて走れ去く。衛士等、^あ 即ち河を夾みて追ひて射る。皆中つること能はず。是に、^に 一の衛士有りて、^ゆ 疾く馳せて万に先ちぬ。而して河の側^{かたはら} に伏して、^{さしまかひ} 擬ひて膝に射中てつ。万、^{はな} 即ち箭を抜く。弓を張りて箭を發つ。地^{つち} に伏して^{よば} 号ひて曰はく、「万は天皇の楯として、^{すめらみこと} 其の勇を効さむとすれども、^{みたて} 願は^{いさみ} と問ひたまはず。翻りて此の窮^{きはまり} に逼めらるることを致しつ。共に語るべき者来れ。願は

くは殺し虜ふることの際を聞かむ」といふ。衛士等、競ひ馳せて万を射る。万、便に飛ぶ矢を扨ひ捍きて、三十余人を殺す。仍、持たる剣を以て、三に其の弓を截る。還、其の剣を屈けて、河水裏に投る。別に刀子を以て頸を刺して死ぬ。河内国司、万の死ぬる状を以て、朝廷に牒し上ぐ。朝廷、符を下したまひて称はく、「八段に斬りて、八つの国に散し梟せ」とのたまふ。河内国司、即ち符旨に依りて、斬り梟す時に臨みて、雷鳴り大雨ふる。

爰に万が養へる白犬有り。俯し仰ぎて其の屍の側を廻り吠ゆ。遂に頭を嚙ひ挙げて、古冢に収め置く。横に枕の側臥して、前に飢ゑ死ぬ。河内国司、其の犬を尤め異びて、朝廷に牒し上ぐ。朝廷、哀不忍聴りたまふ。符を下したまひて称めて曰はく、「此の犬、世に希聞しき所なり。後に観すべし。万が族をして、墓を作りて葬さしめよ」とのたまふ。是に由りて、万が族、墓を有真香邑に双べ起りて、万と犬とを葬しぬ。河内国司言さく、「餌香川原に、斬されたる人有り。計ふるに将に數百なり。頭身既に爛れて、姓字知り難し。但衣の色を以て、身を収め取る。爰に桜井田部連膽淳が養へる犬有り。身頭を嚙ひ続けて、側に伏して固く守る。己が主を収めしめて、乃ち起ちて行く」とまうす。

物部守屋は洪川の屋敷にいて、難波の宅を鳥取万は守っていたというのだが、この難波の宅は今の森ノ宮（鶴森宮）あたりだと比定される。そこで敗れ、南に逃れ、妻の家のある有真香邑を過ぎた山の中に籠もる。その鳥取の一族のつわものぶりは名をとどろかせていたのであろう。朝廷は一族の殲滅をはかる。万はただひとり残ったというのか、破れて垢のついた服と憔悴した顔つきをして山から出て奮戦を続ける。ここに「もののふ」の原型を見る思いがする。武の技能の習練とともに「こころ」も刃金のように鍛錬されていて、「死に狂ひ」をして戦う。「武士道とは死ぬことと見つけたり」と言上げせずとも、連綿と地下水脈のように生き続けた、生死のはざまを容易に超えることのできる価値観、あるいは美意識、あるいはモラルとていいものの源流が生る形で表れているように思うのだが、これが六世紀の話だとすれば、それが社会の表舞台に噴出するのは十世紀のことになる。

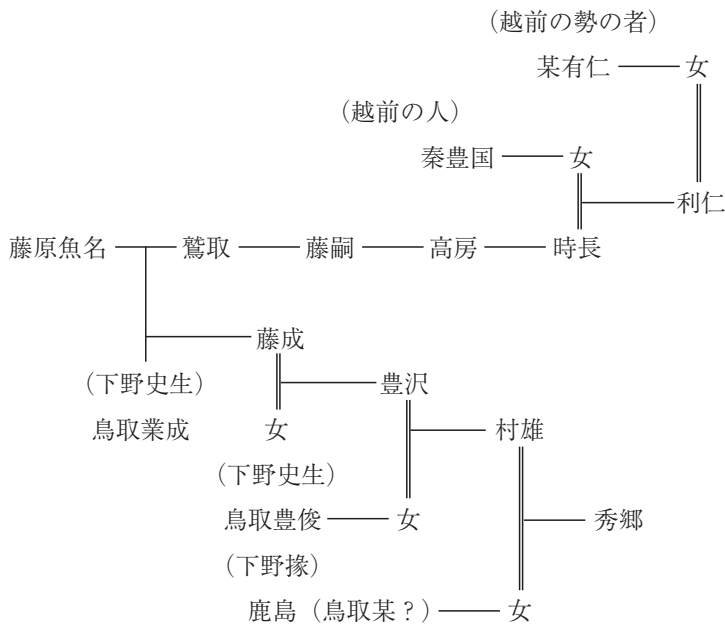
大きな謎のように見えていた「武士」の出現という現象について、最近、桃崎有一郎氏が斬新な説を出された。そこでは「武士」がいつ、どこで、なぜ、どのように登場したかを鮮やかに解き明かされている。桃崎氏はいう。

国造の時代から何世紀もかけて形成された、古代の郡司富豪層の地方社会に対する支配的な地位と、彼らの濃密なネットワークに、血筋だけ尊い王臣子孫が飛び込み、血統的に結合して、互いに不足するもの（競合者を出し抜くための尊さと地方支配の力）を補い合った。そして、秀郷流藤原氏は蝦夷と密着した生活から、源平両氏は伝統的な武人輩出氏族（将種）の血を女系から得て、傑出した武人の資質を獲得した。武士とは、こうして

【貴姓の王臣子孫×卑姓の伝統的現地豪族×準貴姓の伝統的武人輩出氏族（か蝦夷）】

の融合が、主に婚姻関係に媒介されて果たされた成果だ。武人は複合的存在なのである

父系の一方だけにとらわれず、母系を重視することで、いわれてみれば、当たり前のことが判明する。ただ単に桓武天皇の子孫である、あるいは清和天皇の子孫である、藤原家の子孫であるというだけでは「武士」にはなれない。「武士」はハイブリッドな存在として誕生したというのだが、最初の「武士」といっていい一人の藤原秀郷について、桃崎氏は次のような系譜を作成して掲げている。



(桃崎氏は秀郷の母の父の「下野掾鹿島」の「鹿島」を「鳥取」の誤記としている)

桃崎氏は、芥川龍之介の『芋粥』でも知られる、同じく藤原魚名流の利仁がなぜ越前で勢威を蓄えるに至ったかと対比して語るのだが、河内(和泉)を本拠地とした鳥取氏は関東にも移住して、下野国で勢力をたくわえて「下野掾」という任用国司を出せるまでの郡司富豪層を形成していた。これは「卑姓の伝統的現地豪族」というべきなのであろうが、藤原秀郷の祖先は、魚名の子の藤成以来、その鳥取氏と結婚を繰り返して、藤原秀郷の血の八分の七は鳥取氏の血だというのである。とすれば、鳥取万の血と同じ血が藤原秀郷の子孫だという奥州藤原氏にも、佐藤氏にも、つまり義清(西行)にも、義経にしたがった継信にも忠信にも(二人の奮戦とその死はまさに鳥取万を彷彿させる)、小山氏や結城氏(結城合戦で一族の死はやはり見事というしかない)にも、そして九州の大友氏にも少弐氏にも、そしてそれこそ『葉隠』の鍋島氏にも延々と受け継がれていたことになる。

さて、この鳥取万の死には「義犬」伝説も付け加わる。『コーラン』の中でもフォークロア的な色彩の強いといわれる「エフェソスの七人の眠り人」の逸話で、洞窟の中で眠り込んだ七人を洞窟の入り口で守り続けた犬の話が思い出されるが、武人としての鳥取万を考えると、この犬にはまた別の性格があるように思われる。人類と犬の先祖は狩猟者としてはライヴァル関係にあり、それが共生するようになり、やがて力関係で人が圧倒するようになって、犬は家畜化することになる。しかし、猫とはちがって、近代になるまでは単に愛玩するだけのペットではなく、人にとって大いに有用な仕事を任されていた（2）。先に犬養の地名、あるいは県犬養氏の説明で触れたように、屋敷や屯倉、神社の番犬となり（狛犬はその名残である）、当然、狩猟犬でもあったし、狩猟の対象を人に変えれば、警察犬にも、戦闘犬にもなったはずである。

私がフランスにいたとき、2015年11月13日にはパリでISのメンバーによる同時多発テロがあったことは前稿で述べた。その日から、パリ市内では至る所で、警察あるいはジャンダルムが犬とともに巡回しているのがみられ、地下鉄に乗っていても犬がやって来て乗客の匂いを嗅ぎまわった。そうして、11月18日には、ジャンダルムがサン・ドニにあるISのアジトに踏み込んで犯人たちを掃討したのだが、そのときのテレビ・ニュースの解説が興味深かった。まず、あるアパートマンの一角が犯人たちのアジトであり、そこに数名の犯人たちが今現在いることを確認した後、近辺の人びとには退去を命じ、そして、ドアを開けて最初に飛び込んだのは人間ではなく、犬なのであった。犬がひとしきり犯人たちにダメージを与えた後、警察あるいはジャンダルムが踏み込んで、そしてメンバーたちを射殺した（逮捕などという生半可なことではなかった）。ガリア以来の軍用犬の歴史を垣間見た思いであった。

また、トランプ前アメリカ大統領の物議をかますことの多かったツイッターに面白いものがある。2019年10月28日のものである。

We have declassified a picture of the wonderful dog (name not declassified) that did such a GREAT JOB in capturing and killing the Leader of ISIS, Abu Bakr al-Baghdadi!

ISのアブ・バクル・アル・バグダディ最高指導者を追い詰めて殺す大仕事をやってのけたのは、名前は伏せたままなのだが、犬であったことを述べ、その写真を公開している。現代においてなお軍用犬が大いに活躍しているのである。ただ、ここまで書いて来て、この特殊部隊の軍用犬を駆り立てる姿勢には、いくら敵対者だからといってもその人間性へのリスペクトが欠如した無惨な印象を禁じえない。

しかし、戦闘犬の性格を帯びた wonderful dog が、実は日本の古典文学の傑作の一つとあっていい作品に登場する。滝沢馬琴の『南総里見八犬伝』である。この読み本の冒頭、窮地に陥った里見義実が、敵将の安西景連の首を取ったら、娘の伏姫を褒美としてやろうと口にしたことから、犬の八房は実際に景連の首をくわえて戻ってくる。しかし、八房は忠犬とも義

犬とも言えず、妖犬、あるいは霊犬というべきかもしれない。八房の行動の源泉は伏姫への恋であり、交わりはなかったことに馬琴はするが（そうするしかない）、八房の精気が八犬士の誕生につながることになる。

ところで、岸和田市の天神山町は今は住宅地になっているが、そのところどころにこんもりとした森が残されている。古代の古墳群の名残なのだが。その一つは鳥取万の墓とされ、そこから少し離れたところにある墳丘が万の飼犬の墓だと伝承されている。考古学的な根拠があるわけではないものの、難波の物部守屋の家から逃れ、妻の有真香邑の家を過ぎて、隠れた森というのは、確かにこのあたりになるはずである。



鳥取万の墓碑



鳥取万の犬の墓碑

六 鳥取郷

さて、藤原秀郷の身体に色濃く流れている鳥取氏の血について先述したが、「鳥取」という町名は阪南市に今も残っていて、そこが鳥取万の本貫だったのだと思われる。だが、『和名抄』で「鳥取郷」と称される地域はさらに広い地域であったらしい。『大阪府の地名Ⅱ 日本歴史地名大系 28』には次のようにいう。

鳥取郷 「倭名抄」は「止々利」と訓ずる。「和泉志」は尾崎・下出・黒田・新・石田・波有手・中・自然田・山中・桑畑・貝掛・舞の諸邑（現泉南郡阪南町）を郷域とするが、下庄と称された箱作（現同上）、淡輪・深日・孝子・谷川・東畑・西畑・小島（現泉南郡岬町）も含むとみるべきであろう。式内社としては波太（現阪南町）、国玉（現岬町）の二社がある（町名は1989年時点）。

実に広大な地域で、そこを鳥取氏は本拠地として、「もののべ」の生業にいそしんでいた

のだと思われるが、垂仁紀にはこの鳥取氏の由来にかかわるエピソードがある。

二十三年の秋九月の丙寅の朔丁卯に、群卿に詔して曰はく、「ながつき ひのえとら ひのとう まへつきみたち みことり のたまは ほむつわけのみこ これ居うまれのとし 誉津別王は、是生年既に
みぞとせ やつ かひげ なほいき わかこ まことと なにゆゑ 三十、八掬髯鬚むすまでに、猶泣つること児の如し。常に言はざること、何由ぞ。因りて
つかさつかさきみことおほ はか 有司せて議れ」とのたまふ。

かむなづき きのとうし みずのえさる 冬十月の乙丑の朔壬申に、天皇、大殿の前に立ちたまへり。誉津別皇子侍り。時に鳴鶴有
おほぞら とびわた みこあふ くぐひ みそなは のたま これなにもの りて、大虚を度る。皇子仰ぎて鶴を觀して曰はく、「は何物ぞ」とのたまふ。天皇、則ち皇
あぎと しろ もとこつひと みことり たれ よ 子の鶴を見て言ふこと得たりと知しめして喜びたまふ。左右に詔して曰はく、「誰か能く是
とりのみやつこ おやあめのゆかはたな まう の鳥を捕へて献らむ」とのたまふ。是に鳥取造の祖天湯河板拳奏して言さく、「臣必ず捕へ
みことり て献らむ」とまうす。即ち天皇、湯河板拳（板拳、此をば陀讎と云ふ）に勅して曰はく、「汝
かなら あつ たまひもの 是の鳥を献らば、必ず敦く賞せむ」とのたまふ。時に湯河板拳、遠く鶴の飛びし方を望みて、
つ いた とらへ あるひと 追ひ尋ぎて出雲に詣りて、捕獲へつ。或の曰はく、「但馬国に得つ」といふ。

しもつき きのえうま きのとひつじ 十一月の甲午の朔乙未に、湯河板拳、鶴を献る。誉津別命、是の鶴を弄びて、遂に言語
かばね ふこと得つ。是に由りて、敦く湯河板拳に賞す。則ち姓を賜ひて鳥取造と曰ふ。因りて亦
ととりべ とりかいべ ほむつべ 鳥取部・鳥養部・誉津部を定む。

ホムツワケというのは、垂仁天皇とのあいだに狭穂媛が生んだ子である。兄の狭穂彦が皇位の篡奪を企てた過程で、垂仁と狭穂彦の争いとなり、狭穂姫は狭穂彦が稲で作った砦に逃げ込んだが、夫の軍に攻められて火を放たれ、その火の中で生まれたホムツワケだけを夫の垂仁天皇に渡して、みずからは狭穂彦ともに死を選んだ。ホムツワケにはその赤子のときのトラウマがあって、永いあいだ口が聞けなかったということなのであろう。それが鶴が天空を渡るのを見たときに、「あれは何だ」と初めて声に出したというのである。同じような子どものエピソードを大江健三郎がノーベル文学賞の受賞のスピーチの中で語っていた（4）。息子の光クンははじめて発したことばは「クイナ」だったというのだが、川端康成を意識しつつ、川端とはちがって自己の過去の日本文化との断絶を強調するスピーチで、はるか昔の神話の型にはまった話をしたので記憶に残っている。アメノユカワダナがホムツワケに口を開かせた鳥を探して、出雲まで（あるいは但馬まで）行って、その鳥を捕らえて帰って来たと、『日本書紀』はいう。光クンはクイナをきっかけに音楽への道を切り開いたが、ホムツワケ王は鶴をきっかけにことばを獲得した。鶴を捕らえて帰ってきた褒美として、アメノユカワダナは「鳥取造」の姓をもらい、その下に鳥取部、鳥養部、そして誉津部を定めたことがここでは記されている。

ここで、先に触れた垂仁紀三十九年の記事が問題になってくる。

「三十九年の冬十月に、五十瓊敷命、茅淳の菟砥川上宮に居しまして、劍一千口を作る。因りて其の劍を名けて、川上部と謂ふ。亦の名は裸伴（裸伴、此をば阿箇播娜我等母と云ふ）と曰ふ。右大神宮に蔵む」

剣一千口を作ったという菟砥川上宮というのはまったくの鳥取郷の中にある。菟砥川は鳥取郷を貫ぬく形で流れる川であり、その菟砥川上宮は今の玉田山公園がその跡地だと考えられている。イニシキノミコトは父の垂仁天皇から軍事権を譲られたのだったが、その武器製作を担当したのはアマノユカハダナラ、鳥取の人びとだったと考えられる。



菟砥川上宮があったとされる玉田山から大阪湾を眺望する



玉田山の麓にある古墳

ところで、物部についての論説として、詩人としての直感が横溢してはなはだ魅力的でありながら、その横溢する詩ゆえに取り扱いかねている書物がある。谷川健一氏の『白鳥伝説』(5)であり、また『四天王寺の鷹』(6)がそれである。後者の四天王寺が物部氏の鎮魂の寺、あるいは見方を変えれば、調伏の寺であるとする説はその通りだと思うし、四天王寺をおおう晴れやかな虚無とハンセン氏病者をも包容し掬い取る無限の慈悲の空気は、日本一の古刹でありながら、奈良や京都のどんな古刹ももたない独自のものであろう。大阪という町の中心にある寺の本質を谷川氏は見事に捕らえているように思う。『白鳥伝説』は、これまでこの論考でたどってきたように、ホノニギに先行して天降り、そしてその曾孫のカムヤマトイハレヒコが大和に来るより以前に、すでに大和を治めていたニギハヤヒ=物部について述べ、抵抗して敗れたナガスネヒコとは別に、東国に撤退して抵抗を続けた物部たちについて述べる。なぜ「日下」を「くさか」と呼ぶのか、「日の下の草香」と続く「日の下」という枕詞から「日本」の国号が説明されるのだが、その「日の下」が生駒山西麓の瀉湖の「草香」からどんどん東に移動するのは物部の東漸をも意味することになる。そして、物部は軍事集団であるとともに、工人集団でもあり、その中でも先進的な技術であった鍛冶の技術を中心に置く集団でもあったということになろう。白鳥伝説はまた鍛冶集団とも無縁ではないというのが、谷川説の骨子となる。踏鞴(たたら)の鞴(ふいご)が鳥を連想させ、また鳥が「羽ばたく」ことを古代の日本語で「はぶく」というが、その連用形の「はぶき」はそれこそ鞴を意味する。たとえば、天照大神が岩戸に隠れて、世の中が真っ暗闇になってしまった。思兼命という知恵者が天照大神の姿を写して誘き出そうと鏡の制作を思いつく。もちろん、銅鏡なのであろう。その制作を石凝姥に命じたという(工人が女性であることにはぜひ注目しておかなくてはならない。私は縄文土器や、弥生土器についても、その工人たちは女性たちではなかったかと考えている)。その銅を制作する文脈の中で、『日本書紀』の一書には

「真名鹿の皮を全剥ぎて、天羽輪あまのはぶきに作る」とある。雄鹿の皮でつくるふいごはやはり羽をもった鳥のイメージだったことになる。

谷川氏はそこでマルセル・グラネが論じた中国の伝承を援用している。ただ、グラネがフイゴを連想させる鳥としたのは、谷川氏のいうような白鳥などではなく、ミミズク、あるいはフクロウである。梟（フクロウ）という漢字はまた曝し首をも意味することを考えると、白鳥のようなロマンティックな鳥のイメージではない。同じ鳥でもむしろ怪鳥を意味してしよう。饜飩文とうてつもんの青銅器を見かけることがあるが、饜飩もまたフクロウをもととし、悪鳥である（7）。

谷川氏の説は詩人としての直観によるが、氏は精力的に日本各地をまわった方であり、それは他の民俗学者たちの追隨を許さない。昨今の民俗学者たちはピンポイントでのフィールドワークに終始する傾向がありはしないか。鍛冶氏の集団のいたところには白鳥伝説があり、そこには物部の足跡があるという説は、谷川氏の丹念な実地踏査からの実感に裏付けられている。

また、ホムツワケが母の狭穂姫が兄の狭穂彦の下に走って夫の垂仁天皇に攻められ、火（ホ）の中で誕生したとする伝承はそのまま金属精錬の過程をなぞっているものであり、ことばがしゃべれなかったというのも、水銀中毒によって咽喉を犯されることの多かった鍛冶師たちの職業病を暗示しているのだと、谷川氏は指摘している。水銀中毒者を数多く出した水俣出身の谷川氏ゆえの「気づき」である。そしてさらに、鳥取氏の祖先の「天湯河板拳」の「湯」も折口信夫などのいう常世から流れ来る神聖な「水」をいうのではなく、鎔鋳炉から流れて来る溶解した金属をいうのだと、谷川氏はしている。鳥取氏は物部の中の物部であり、金属の武器生産者であるとともに、類なき戦闘者を出す氏族だったといえよう。その一族の蟠踞したのが、今の阪南市一帯であったことになる。

七 波汰神社とその祭礼

その鳥取郷の中心をなし、また鳥取氏の共同体を統べる役割を果たしていたのは波汰神社である。しかし、現在の波汰神社も神さびた森の中にあつて古い由緒をうかがわせるものの、歴史の中で幾多の変遷を経て来ていて、昔のままのものではない。『大阪府全志 卷之五』は次のようにいう。

【波汰神社】

波汰神社は南方字池の内にあり、延喜式内の神社にして角凝命を主神とし、相殿に品陀別命を祀れり。鳥取郷の総社にして、鳥取氏の其の祖神を祀りしものならん。今の大字桑畑なる字奥の宮にありて鳥取大宮と称せしが、南北朝の戦に鳥取氏の南朝に加はりしが為め、天授年中山名氏に滅ぼされ、当社及び波太八幡宮並びに宮寺たる神光寺も総て劫火に罹りて焦土と化せり。

波多八幡宮は当時今の下莊村大字貝掛の指出森にありて、昔神功皇后の新羅より凱旋し給ひしとき、務古の水門より紀の國に至らんとして御船を鳥取の玉津浦に繋がれ、武内宿祢皇子を懐にして其の海辺を逍遙せし縁あるに依り、同皇子即ち品陀別命を其の地に祀りしものに係り、神光寺は貞觀年中南都大安寺行教和尚の其の祖紀船守の墓に詣づる為め淡輪村に行かんとして、鳥取郷を過ぎけるとき、鳥取隼人正の一寺を創立して宮寺と為し、同和尚を開山たらしめたるものにて、宝塔・護摩堂・般若堂・東坊・西坊・普門院等鱗次檐を連ねたりしといふ。

鳥取氏已に亡び、当社及び波太八幡宮並に神光寺も烏有と化せしかば、郷の耆宿之を嘆じて、永徳年中其の三十六人力を戮せ私財を抛ち、地を南山の麓に卜して社殿を再建し、波太八幡宮の祭神を相殿に合祀し、神光寺を再建して、護摩堂・帳舎・僧坊等旧觀に復せしは即ち当所なり。

然るに天正十三年豊臣秀吉の根来征伐に際し社頭再び兵火に罹りければ、御朱印地書類を初め平重盛奉納の太刀・梶原景時奉納の長刀、其の他の旧記什宝等悉く灰燼と化し、神領は没収せられて無禄となりしが、慶長四年豊臣秀頼は其の臣片桐東市正且元を奉行として社殿を造営し、神光寺は祀官を扶けて祭祀を勤め来りしも、明治維新後の神仏分離に依りて寺は廃絶し、社は同五年郷社に列し、同四十年一月神饌幣帛料供進社に指定せらる。



波汰神社本殿

この記事も少しわかりにくいところがあるのだが、波汰神社は主神を鳥取氏の祖神である角凝命として、今は品陀別命（応神天皇＝八幡神）を相殿に祀っている。もとは現在の場所ではなく、大字桑畑にあった。それが、南北朝の時代、鳥取氏が南朝方に加わったために、鳥取氏は滅ぼされるとともに、この原波汰神社＝鳥取大宮も焼滅した。品陀別命を祀る波汰八幡宮とその神宮寺である神光寺はまた別のところにあったのだが、やはり南北朝の乱によって焼滅した。そこで、永徳年中（1381～1384）、土地の三十六人が私財をなげうって、波汰神社を現在の地に再建し、そこに波汰八幡宮の祭神であった品陀別王も相殿に合祀し、神光寺も再建した。ところが、これもまた、天正十三年（1585）、豊臣秀吉の根来攻めの際にふたたび灰燼に帰し、現在のものは、慶長四年（1599）、豊臣秀頼が片桐且元に命じて再々建したものだという。明治の廃仏毀釈によって神光寺は廃されたのが、今の波汰神社の姿になる。ただ、波汰神社を訪れる者を混乱させるのは、少し離れてはいるものの、同じ境内といって

いいところに、鳥取夷神社があることである。しかし、これは鳥取郷の各字々にあった神社を明治四十二年に集めて合祀したものであるらしい。

「波汰」という神社名は「わたつみ」の「わた」、つまり海なのであろう。朝鮮語でも海をパダといい、なぜかこの語は日本語と朝鮮語で共通である。海の部民を「わたのべ」といい、転化して「わたなべ（渡部、渡辺）」という姓になったことはいうまでもない。実は「波汰」が海であるには違いないと思いつつ、そう断言することにはややためらいがあった。というのも、波汰神社に海へ繰り出す神事があるにしても、現在の波汰神社も、それから原波汰神社があったという桑原も海岸線からやや離れた2、3キロの位置にあるからである。しかし、この論考を執筆している2021年3月、東日本大震災から10年ということで、その津波の映像をふたたび見るに及んで、気づかされたことがある。あまり幸福な「気づき」だったとはいえないのだが、南大阪の海岸線は南海トラフが動くたびに大きな津波に何度も襲われているはずなのである。『方丈記』にも元暦二年（1185）の大地震と「海ハカタブキテ陸地ヲヒタセリ」という大津波の記述があり、『太平記』には康安三年（1361）の大地震と大津波の記載がある。「海は傾きて陸地に成しかば」という、引き潮、あるいは地殻の隆起が記され、阿波の話ではあるが、「中にも阿波の雪の湊と云浦には、俄に大山の如なる潮漲来て、在家一千七百余宇、悉く引潮に連て海底に沈しかば、家々に所有の僧俗・男女、牛馬・鶏犬、一も不残底の藻屑と成にけり」とある。阿波は南大阪の対岸といってもいい位置にある。あるいは、宝永四年（1707）には南海トラフの全域が破壊されて、大地震が起こり、東海、近畿、四国、九州の海岸部全域が津波に襲われ、このようなときに使うことばではないが、「津々浦々」が消滅したはずなのである。もうやめよう。波汰（海）神社も、それから次にあげる海会寺も、海にちなむ社寺がやや内陸部にあつてよく、むしろあるべき位置にあるというべきなのであろう。

今回のこの論考は、実はこの波汰神社の祭礼を実見してルポルタージュを書くつもりで着手して、そのルポルタージュが大半を占めるはずのものであった。ところが、2020年度はパンデミックの状況下、当然、祭礼は行われなかった。Youtubeである程度は見るができるものの、やはり実際に生で見て受ける印象はまったく違うものであろうし、この論考もまた違ったものになっただろうと思う。

『大阪府全志 卷之五』は、その波汰神社の祭礼について、次のように続けている。

祭祀は往時より木村（今は田島と改む）・山本両氏の掌る所にして、両氏共に鳥取氏の裔なり。今の氏地は本村・西鳥取村・尾崎村の全部及び下荘村の内大字貝掛にして、例祭は四月十五日・秋祭は十月十一日に行はるれども、以前は二月初午及び六月初午に大祭を行ひ、二月の初午には、大字貝掛の玉津浦に神輿の渡御ありて貝掛より甲冑せる武士の出迎ありしは、三韓征伐の古式に抛りしと伝へ、六月の初午には、氏子の各村は矢倉と称して御所車に屋根を付けたる車を曳出して参詣し、其の数四五十台の多きに及びしが、今は十月十一日の

大祭前日の宵宮に矢倉の宮入を為し、其の数は稍減じたるも尚二十台の余に出で、石田の血祭と呼ばれて非常に喧噪し、其の壯観を見んとて群集雑鬧せる為め、地方の名物祭となりて其の名高し。

かつて二月初午の日に行われ、今は四月十五日に行われるという祭りは、波汰八幡宮の祭祀であったろう。海に神輿を繰り出し、赤子の八幡神、すなわち品陀別命を迎える意味合いをもっていたのだと考えられる。かつて六月初午に行われ、今は十月十一日に行われる大祭が波汰神宮、すなわち鳥取大宮そのもののお祭りであったと考えられる。その「矢倉」の宮入りが物見の人びとを集めてこの地方の名物祭なのだというのが、映像を見ると、本殿の前の石段を、大勢の氏子が勢いをつけて引っ張って、豪壮で重いはずの「矢倉」を一気に引き上げる。かつてはそれが四五十台続き、この記事のころは二十台、素晴らしく威勢のいいお祭りであり、「血祭」といわれるほどだから、矢倉に圧迫されてなのか、雑踏に巻き込まれてなのか、怪我人の絶えない祭りであったらしい。今でもその面影は十分にとどめている。古代の鳥取郷の人びとの息吹きを伝えるお祭りだといえよう。

八 海会寺 仏を打ち欠く盗人、仏を供養する人びとの光景

その鳥取郷の人びとにも仏の教えが浸透してくる。愛欲の放埒をいましめ、ものを貪ることをいましめ、むやみに憤ることなく、生き物の命をいとおしむことを教える。次の『日本靈異記』に登場するお寺は「尽恵寺」とあるが、海会寺のことではないかとされる。天正五年、海会寺は織田信長に焼かれて残っていない。その跡が発掘されて史跡公園になっている。所在地は現在の地名で泉南市信達大苗代であり、『和名抄』の日根郡四郷の鳥取郷とはいえず、北隣のおお郷になる。



海会寺址

あかがね みかたぬすびと と あや しるし あらは あらは ことのもと
 仏の銅の像盗人に捕られて霊しき表を示し盗人を顕す縁 第二十二
 いづみのくにひねのこほり ひとり あ みち ほとり うぢなつばひらか ひととなり まが ころすこと
 和泉国日根郡の部内に、一の盗人あり。道路の辺に住み、姓名詳ならず。天年心曲り、殺
 ぬすむこと なりはび いんぐわ うべな おび てらは しょうむ みよ
 と盗とを業とし、因果を信はず。常に寺の銅を盗み、帯を作り銜して売る。聖武天皇の御世
 こほり じんまじ みちゆ
 に、其の郡の尽恵寺の仏の銅の像盗人に取らる。時に路往く人有り。寺の北の路より馬に乗りて行き、声有るを聞く。叫び哭きて曰はく「痛きかな。痛きかな」といふ。路ゆく人聞き

思はく「諫めて打たしめずあらむ」とおもひて、馬を趁せて疾く前む。叫ぶ音に近くに随ひて、やうやく失せて叫ばず。馬を留めて聞けば、ただし鍛する音のみ有り。所以に馬を前めて過ぎ往けば、却くに随ひて先の如くまた叫び呻ふ。忍びて過ぐる事得ず。故にまた還来る。叫ぶ音また止みて鍛する音有り。疑はくはもし人を殺すかと、かならず異ふ心有らむとうたがひて、良久にありて徘徊り、竊に從者を入らしめて屋の内を窺看しむれば、仏の銅の像を仰け奉りて手足を剔缺き錠を以ちて頸を歸く。すなはち捕へ打ちて問ひていはく「何れの寺の仏の像ぞ」といふ。答へていはく「尽恵寺の仏の像なり」といふ。使を遣りて問はしむれば、実に盗めるなり。使者語を挙げて具に状を述ぶ。僧並に檀越聞きて集り来り、破かれたる仏を衛みて号び愁へて曰さく「哀なるかな。悲しきかな。我が大師や。何の過失有せばか此の賊の難を蒙りたまふ。尊き像寺に有すときは像を以ちて師とす。今滅びたまふより後には、何を以ちてか師とせむ」とまうす。衆の僧輩を敲りて損はれたる仏を安置き、哭きて寺に殯りたてまつる。彼の盗人刑罰せられずして捨てらる。路ゆく人繋ぎて官に送り、囹圄に閉囚ふ。定めて知る、聖其の悪を輟めむとして是の瑞を示す、至誠懼るべし、聖の靈無きにあらざることを。涅槃經十二卷の文に仏の説きたまふが如し「我が心に大乘を重ぶ。婆羅門の方等を誹謗るを聞きて其の命根を断つ。是の因縁を以ちて是れより以來地獄に墮ちず」と。また彼の經の三十三卷に云はく「一闍提の輩は、永く断滅つが故に、是の義を以ちての故に、蟻子を殺害すすらなほ殺の罪を得れども一闍提を殺すは殺す罪有ること無し」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり（此の人は仏と法と僧とを誹謗り、衆生の為に法を説かず、思議無きが故に、殺すとも罪無きなり）。

「姓名詳ならず」とここではいうが、端的にいうと、この盗人は鳥取氏であり、そうでなくてもその周辺の人間とっていいだろうと、私は思う。寺の所有する銅器を奪っては、鍛金し、あるいは熔解して、带状にして売りさばいていたというのである。道行く人が聞くと、遠くからは「痛きかな、痛きかな」と聞こえるが、近づくと「鍛する音」ばかりが聞こえる。遠ざかるとまた苦しみ叫ぶ声が聞こえ、また近づいて行くと鍛冶をする音になる。そこで裏に回って從者に見させると、仏の銅の像を塹で掻き砕いていたという。つまり盗人は金属の精錬、鍛冶に習熟していたことになる。仏の教えになじむことなく、仏の像に価値を認めず、畏怖することも無い鳥取の男には仏の声が聞こえず、自分の鍛冶の工房で鍛冶師の技術でもって銅の製品に過ぎないものを加工して、そして売りさばいているということになる。「路往く人」は馬に乗っていて、そして「使者」をやって偵察させ、そして捕らえさせる、とすれば、日根郡の郡司階級とも考えられるが、その処置は官吏らしくもない。盗人を捕らえて打擲してどこの寺から盗んだか白状させ、尽恵寺に使者をやると、僧および檀越が駆けつけて、泣き叫んで、飾り立てた輿に砕かれた仏を安置して寺に運んで殯を行ったという。まるで生きていた人のように仏の像を扱い、葬儀を行ったということになる。まことに素朴な信仰のありようといわなくてはならない。そして、盗人については刑罰を行わず、放置されたと書く。

仏者たちは制裁を行うべきではなく、まして殺生などはすべきではないと、尽恵寺の僧侶も檀越も考えたということをお願いのだろう。これも真っ正直に仏の教えを守ったものだが、ただ、『日本霊異記』の著者の景戒は、仏者は蟻を殺してはいけないけれど、こんな謗法の盗人は殺してもいいのだと、やけに激しいことばを投げかけている。仏教が導入されてしばらく後の、鳥取郷近辺の光景である。盗人も檀越も鳥取氏なのではないか。

九 自然居士のこと

旧鳥取郷の中には自然田という地名があり、波汰神社にも近接している。「自然」ということばで思い出すのは、柳父章先生の名著『翻訳語成立事情』（岩波新書）であるが、そこでは仏教由来の古い「自然」ということばに、西洋の nature の意味を盛り込んだために、混乱が生じていると説かれている。「自然田」という地名は、勝手次第の土地、免租の権利をもつ土地とでもいうことになるだろうか。ただし、豊臣秀吉の時代からは検地が行われ、すでにそのような特権はなくなっている。「前田」というのは、ただ単に家の前にある田ではなく、神社の前であって、神々に奉納する米を収穫するための田であるというのは、谷川健一氏の卓説であるが、「自然田」というのは波汰神社の前田だと考えることができるのではないだろうか。

その自然田に実は自然居士の旧宅址というのがある。ただ「自然」ということばからの、いつの時代かの好事家の故事つけだと切り捨ててもいいのだが、鳥取郷を実際に歩いてみると、そう簡単な問題でもない気がしてくる。自然居士その人は鎌倉末期の京都に実在した人物だとされる。『天狗草紙』の絵を見ると、棧敷の上で、有髪で烏帽子をかぶり、髭を生やした男が、ササラをもって舞い踊っていて、それが自然居士だとされている。「居士」を名乗るから、僧ではないが、京都で活躍した唱導の芸能者であり、「自然法爾」などという深遠な仏教哲学を踏まえたものというのではなく、当世の喜怒哀楽をあるがままに受け入れて肯定し、したたかに生きた風狂の演芸者であり、また京都の人気者だったのだと思われる。鳥取郷の中には波汰神社を挟む形で、自然田とは反対の方向に舞という地名があり、それは説経・祭文・万歳・歌舞など芸能に従事する人々が居住したことに由来するという（『大阪府の地名Ⅱ 日本歴史地名大系 28 平凡社』）。和泉市にも舞の地名があるが、それも同じく芸能者が多く居住していたことによる。自然居士が自然田の出ではないにしても、この地方の出自であるとかこつてたくなるような材料が確かにないわけではない。



自然居士旧居址伝承地

観阿弥は髭を生やした中年の自然居士を美少年の喝色の姿に変えた。そして、身売りをし

た少女とそれを東国に連れ去ろうとする人買いを大津まで追いかけて、少女を連れ戻そうと人買いと掛け合い問答をする、仁慈と正義に満ち、かつ理知的な姿に変貌させている。そしてその舞う姿も、室町將軍の趣味にかなって、あくまでも優美である。しかし、その中にあっても、中世社会のレジームからはみ出して生きる芸能者のしたたかな姿は決して失われていないように思われる。

【この論考は本学共同研究プロジェクト 17 連 260「大学教育における南近畿の地域文化資源の掘り起こし・保存・活用の研究」の研究助成を受けた成果の一部である】

【注釈および参考文献】

- (1) 安井良三「物部氏と仏教」(『日本書紀研究』第三冊 1968年11月 塙書房)
- (2) J.C. マクローリン著・澤崎坦訳『イヌ』(同時代ライブラリー 59 1991年2月 岩波書店)
- (3) 桃崎有一郎『武士の起源を解きあかす一混血する古代, 創発される中世』(ちくま新書 2018)
- (4) 大江健三郎『あいまいな日本の私』(1995年1月 岩波新書)
- (5) 谷川健一『谷川健一全集 第1巻 古代1 白鳥伝説』(2006年5月 富山房インターナショナル)
- (6) 『谷川健一全集 第21巻 古代・人物補遺 四天王寺の鷹 人物論』(2011年3月 富山房インターナショナル)
- (7) Marcel Granet “Danses et légendes de la Chine ancienne” (1994年1月 Presse Universitaire de France)

※なお, 引用は次の書物による。

- ・『日本書紀 上・下』(日本古典文学大系 67,68 1967年3月, 1965年5月 岩波書店)
- ・『新訂増補 国史大系 7 古事記・先代旧事本紀・神道五部書』(1966年1月 吉川弘文館)
- ・『日本霊異記』(新古典文学大系 30 1996年12月 岩波書店)
- ・井上正雄『大阪府全志巻之五』(1922年 1976年復刻 清文堂出版)
- ・『方丈記・徒然草』(新古典文学大系 39 1989年1月 岩波書店)
- ・『太平記 三』(日本古典文学大系 36 1962年10月 岩波書店)

(2021年3月25日受理)

Southern Osaka: The Cradle of the Japanese Buddhism (5)

UMEYAMA Hideyuki

After the defeat of the Shintoists in the war between Buddhists and Shintoists in the year 587CE, the Mononobe (物部) clan was destined to run its course to ruin. But what was the Mononobe clan? The word mononofu, synonym for samurai, was derived from the name of this clan. So, we can easily assume that Mononobe was a representative clan of ancient warriors. Furthermore, it also means that this clan shouldered the military industry, and as a result, the majority of other industry of that period.

According to the myths, Nighihayahi, ancestor god of the Mononobe clan, came to Japan, ahead of Ninighi, ancestor god of the Emperor's family. Transferring the political power to the Emperor's family, Mononobe had maintained a certain important position within the Emperor's government. We will search for and consider the Mononobe legends and their legendary places which still remain in present day Osaka.

In Nihon-shoki(日本書紀), we find an impressive tale of Mononobe's vassal Tottori-no-yorozu (鳥取万), who valiantly fought to the death in the above religious war and of his faithful dog who continued to protect his master's corpse. We visit the legendary tombs of the dog and of his master. Tottori is also the place name of the extreme South Osaka. Hata-jinja(波汰神社)exists as the religious centre of this district and observes the ancient rites and festivals. The remains of Kaieji (海会寺), a few kilometres from Hata-jinja, shows us the Tottori people's reformation to Buddhism. In Nihon-ryoiki (日本靈異記), we can find an interesting episode which tells of the Tottori people's spiritual beliefs at that time.